

トヨタ財団
1993(平成5)年度年次報告

目次

目次	2
凡例	3
理事・監事	4
評議員	5
助成財団の当面する問題 飯島宗一	6
回顧と展望 山口日出夫	8
研究助成プログラム見直しの視点 黒川千万喜	10
I. 研究助成	
I-0.研究助成の概要と活動結果	14
I-1.第I種研究（個人奨励研究）	17
I-2.第II種研究（試行・準備研究）	24
I-3.第III種研究（総合研究）	30
II. 市民活動関連プログラム	
II-0.市民活動関連プログラムの概要と活動結果	36
II-1.第7回市民研究コンクール予備研究助成	39
II-2.市民活動助成	41
III. 東南アジア関連プログラム	
III-0.東南アジア関連プログラムの概要と活動結果	48
III-1.国際助成	55
III-2.国際助成：マレーシア東南アジア研究奨励助成	76
III-3.インドネシア若手研究助成	80
III-4.「隣人をよく知ろう」プログラム：日本向け・翻訳出版促進助成	86
III-5.「隣人をよく知ろう」プログラム：アジア相互間・翻訳出版促進助成	90
IV. その他の助成	
IV-0.その他の助成の概要	96
IV-1.計画助成	97
IV-2.成果発表助成	102

V. 会計報告・事業日誌	
V-0.事業実績の概要	104
V-1.1993（平成5）年度会計報告	106
V-2.1993（平成5）年度事業日誌	109

凡例

1. 財団法人トヨタ財団は、1974（昭和49）年10月15日、トヨタ自動車工業株式会社及びトヨタ自動車販売株式会社（両社は1982年7月1日合併し、トヨタ自動車株式会社となりました）の出捐に基づき、総理府より設立許可を受けた民間助成財団です。

2. 当財団では、1975年度以来毎年度、和文・英文の年次報告書を作成し、広く関係者にお配りしております。

3. この年次報告書は、1994年6月29日の第70回理事会において承認されました「平成5年度事業報告書」に基づき、当財団の1993（平成5）年度（1993年4月1日～1994年3月31日）の事業内容をとりまとめたものです。

4. 本報告書中の助成対象一覧は、いずれも助成決定時のものであり、決定以後の変更は割愛しました。ただしこれまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては、会計報告欄にそれを記載しました。

5. 本報告書中の助成概要は、いずれも助成決定時における計画の概要であり、助成による研究等の成果ではありません。これらの概要は、助成対象者からの提出書類に基づき、財団事務局にて作成したものであり、文責は当財団にあります。

6. 当財団では、和・英文の年次報告のほか、年4回「トヨタ財団レポート」を発行しており、これらは希望者に無料でお配りしておりますので、御希望の方は官製ハガキで財団事務局あて、お申しこみください。

理事・監事

1994(平成6)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

会長	豊田英二	トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長
理事長	飯島宗一	愛知芸術文化センター総長, 名古屋大学・広島大学名誉教授
常務理事	山口日出夫	
理事	天城 勲	文部省顧問
	石井米雄	京都大学名誉教授, 上智大学アジア文化研究所教授
	大島正光	財団法人 医療情報システム開発センター理事長
	加藤一郎	東京大学名誉教授, 成城学園学園長, 弁護士
	加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問
	神尾秀雄	千代田火災海上保険株式会社取締役会長
	草場敏郎	株式会社 さくら銀行相談役
	黒川千万喜	(常 勤)
	富永誠美	社団法人 日本交通科学協議会会長
	松本 清	日本フライングサービス株式会社取締役会長
監事	伊藤 哲	公認会計士

なお、監事 菊池稔氏(東京海上火災保険株式会社相談役)は平成5年8月26日
逝去されました

評議員

1994(平成6)年3月31日現在(五十音順・敬称略)

飯島宗一	財団法人 トヨタ財団理事長, 名古屋大学・広島大学名誉教授
岡本道雄	京都大学名誉教授
加藤誠之	トヨタ自動車株式会社顧問, 財団法人 トヨタ財団理事
楠 兼敬	トヨタ自動車株式会社顧問
小林清志	豊田工業大学学長
小山五郎	株式会社 さくら銀行相談役・名誉会長
佐伯喜一	財団法人 世界平和研究所常任顧問
杉浦敏介	株式会社 日本長期信用銀行相談役
辻 源太郎	トヨタ自動車株式会社相談役
豊田英二	財団法人 トヨタ財団会長, トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長
豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役会長
永井道雄	財団法人 国際文化会館理事長
縫田瞳子	ジャーナリスト
沼田 真	千葉大学名誉教授
林 健太郎	東京大学名誉教授
林 雄二郎	東京情報大学学長
平尾 収	東京大学名誉教授
本明 寛	早稲田大学名誉教授, 女子美術大学理事長
森 秀太郎	財団法人 トヨタ財団前副理事長
盛田昭夫	ソニー株式会社取締役会長
渡辺 武	財団法人 損害保険事業総合研究所会長

助成財団の当面する問題

トヨタ財団 理事長

飯島宗一

現在、日本の助成財団が当面している問題の1つは財政であろう。基金を備え、その運用により得られる果実を助成事業の財源にあてている財団では、このところの低金利のために、助成に用いる金額、助成件数あるいはプログラムそのものを縮小せざるを得ないのが大部分の状況である。GNP比でも、また国際比較の点でも必ずしも十分とはいえない日本の民間の助成事業は、せつかく上向きかけた伸びが停滞し、あるいは減退するおそれすらある。もちろん、金利は経済の指標の1つで、財団自体がどうこうし得る事柄ではない。また助成財団は営利を目的とする存在ではないから、基金を有利に運用するといっても、そこにはおのずから限度がある。それを補うためには資金自体の増大を図り、あるいは財団への寄附をより多く受け入れることが望ましく、かつ必要でもあるが、それには税制のうえでの制約があるし、またいわゆる不況下で企業などの減収が続く状況の下では、一般にはそれもままならない。しかし法人、個人を問わず、公共のためにできるだけ経済的寄与を行うという友愛奉仕の精神が民間助成財団のよって立つ根本であるから、難しい時世であればあるほど、その気持ちをより確かに保つ努力が必要であろう。このことはまた一面、国のマクロ的な経済のなかで、いわゆる the third sector と呼ばれるお金の動きを、いかなる意味でどれほどのサイズで位置づけることが、社会のあり方にとって望ましいか、の問題にもかかわる。ことに、教育、福祉、保健、学術、芸術、文化、宗教、スポーツ、社会奉仕など本来非営利的 non profit な事業がますます要請される社会事情の動向に照らして、それらにあてられるべき経費をいかに調達し、運用するかが真剣に考えられなくてはならないと思われる。

もちろん、国を中心とする政府支出がこの領域により多く割かれるのは望ましいことだが、一面それは政府の規制あるいは干渉を伴いがちで、

しばしば硬直化し、非能率に陥るばかりでなく、政府財政の巨大化にもつながりかねない。また、利潤を主要な動力源とする自由競争経済の効用も大事であるが、この場面では非営利事業はもともと弱いため、利潤の原則によって仕事の本質が損なわれかねないおそれを生じる。したがって、企業倫理ということが大事であるが、公的奉仕に基盤をおくその精神の1つの実践の方向はフィランソロピーであろう。そしてそこに、官主導でもなく、利潤追求ベースだけでもない、民の自主性とその自由な人間的価値追求に経済的支柱を与えるものとして、the third sectorが存在する。それを日本流に、政府や地方自治体の事業経営の半官半民的組織とのみ解するのは誤解である。誤解でないとすれば僭称である。高齢化時代への対応として増税の方策のみに頼ろうとするのはやや狭い考え方で、さらに力強い民間の意志と活力に期待してもよいのではないか。民間助成財団の問題もこのような文脈で積極的に取り上げ、研究していくべきであろう。

話は変わるが、近くトヨタ財団常務理事の山口日出夫氏がその職を離れる。常務理事としての任期が終わるためであるが、長い間トヨタ財団の運営の実務を担い、財団活動を優れたレベルで維持発展せしめてきた功績は大きい。この機会に、改めて感謝の意を表しておきたい。山口氏はトヨタ財団と一応離れるが、今後は助成財団資料センターの仕事をしてくださることになっている。助成財団資料センターも日本の民間助成財団にとってきわめて大事な組織で、その活動がますます充実し、活発になることが切に望まれる。トヨタ財団での長い経験が必ず生かされるであろうし、山口氏はもともとトヨタ財団のみでなく、日本のフィランソロピーのあり方について深く関心し、その向上のために力をつくしてきた人であるから、同氏に期待される場所は少なくない。トヨタ財団としても、引き続きご指導・ご助言をいただくつもりである。ご健勝をお祈りする。

財政とともに助成財団がよいスタッフを備えることは重要なことで、アドミニストレーターのみでなく、プログラム・オフィサーや事務の担当者に至るまで、そこには優れた、またこの仕事に情熱と理想をもって取り組む人材が携ることが願わしい。そのあり方、処遇、育成、交流等についても、助成財団全体として研究、検討を深めるべきであろう。

回顧と展望

——常務理事辞任にあたって——

トヨタ財団 常務理事

山口日出夫

●着任の頃

一昨年の夏、今度の任期を果たすと財団の勤務も13年になるため、現場の責任者としては永すぎた気もして後任者の人選を上司と相談した。その際、豊田会長は、「君が財団へ転任したところと違って今度はよいだろう。会社のなかでの財団への評価はだいぶ変わったからな」といっておられた。確かに財団に対する企業や社会の認識はこの13年間に変わってきている。しかし、財団のなかにいたものとしては、そうした外部の変化を読み取りきちんと対応できたのだろうか、という反省もある。

そうはいっても、この13年間を振り返れば、充実していた歳月であった。筆者は出捐企業の1つのトヨタ自動車工業㈱東京支社・業務部長から転じた。着任にあたっての社長＝財団理事長（現会長）との財団の運営についてのやりとりを思い出す。

財団の活動がほとんど社内には広報されていなかったため、「トヨタ新聞に財団の活動を掲載してもらい、トヨタの社員に財団を知ってもらったほうがよいと思います。かまいませんか」「それはよい、財団の人間は気づかなかつたことだろうし、それにいままでは財団として、知ってもらえるような実績も少なかったから」。私がかつて調査広報部長であった経験を生かして、財団のことを派手に宣伝するのではないかと懸念されたのか、「財団のやり方はいまのままでよい」「派手にはやらんからな」と付け加えられた。ところで「会社側の窓口はどこになりますか」との問いに対しては、「何かあったら、直接電話でもかまわないから私に相談するように」ということであった。社内報には後日談があって、「社内報といっても数が多いのだから問題になりはしないか」と心配した関係者もいた。世論の企業への風当たりが強く、財団活動の取

扱いはまだ神経が払われていた時期であった。

企業のなかで財団が理解されていたかどうかということについては、冒頭の会長のことばが象徴的であるが、それ以後は変化させることができたのかと問われれば、努力はしたつもりだが、むなしさだけが残ったとしかいようがない。

それはさておき、着任した年のこと、たまたま助成を受けた若い女性が、「私の属している組織からはほかに2人の先輩研究者が申請した。ところがいちばん若くてたぶんだめだろうと思った私だけが通った。なぜだろうか」と多少困惑気味に語ってくれた。財団の助成方針からいえばごく当然のことであったが、よく伝わっていない、という感じを受けた。財団の年次報告書に助成の考え方を詳しく書くのがよいと思い、プログラム・オフィサーの論文を掲載することにしたのはそれからである。

また、広報の仕事をしていた関係もあって、記者の人たちによく取材をお願いした。トヨタ財団そのものを記事にするのは難しいようであった。かなりの個別プロジェクトが記事になったが、財団活動そのものの紹介にはつながらず、歯がゆかった。

●民間助成財団らしさ

プログラムの名前からして民間らしい、“身近な環境をみつめよう”研究コンクールや“隣人をよく知ろう”プログラム翻訳出版促進助成などをはじめとして研究助成、市民活動助成、国際助成など財団のなかではいろいろ工夫され、評価作業も行われ、それぞれに変遷があった。

国際助成は「固有文化の保存と振興」というテーマで、研究への助成が中心であるから、どうしても地味である。せっかく行うからには、もっとショウ・アップしてほしい

い、などと政府の関係者からいわれたことがある。しかし、財団のスタッフは現地のニーズに触れながら実行してきたことであり、手ごたえを感じていた。また、東南アジアの各地は安全な所ばかりではなかった。そんな場所にも飛び込んでの現地の先生方との対話を繰り返しながらのプロジェクト実施であったため、なおさらのことであった。

1982年の春、私は南タイを訪ねることになった。そのときタイ・トヨタの友人からは危険な所もあるから注意をしたほうがよいといわれた。しかし、財団のスタッフはすでに数年前から行っていることであり、気にも止めずに出かけた。現地のS教授からフィールドである小島へ渡る船内で、「去年はこの船でゲリラに襲われ、乗客の何人かが殺されました。幸い私は大学の教官であるといっただけで難を逃れることができました」と聞かされ、友人の心配が杞憂でないことが分かった。

財団の行動には、どうしてもこうした危険をはらんでいる。ケースは違うが、インドシナ諸国への助成をはじめたのは1985年からであるが、ヴェトナムへ行きたいというスタッフの申請には、国情がよく分からないだけに心配した。しかし、永かった戦争の後遺症で苦しんでいるに違いない研究者を思うと、日本の戦後の空白をよく知っているだけに、それを拒否することはできなかった。インドシナ諸国ばかりでなく東南アジア諸国において、トヨタ財団の助成は高く評価されている。

少しは冒険をし、そして忍耐強くなければ財団らしくなれないという教訓は生きていた。

また、インドネシア若手研究者奨励研究助成のように、担当者が財団へ来てからインドネシア語を学び、それを生かしてインドネシア語での申請を可能としたプログラムがいまや1,000名を越す応募者を迎えるような結果をみていることは、いろんな条件が重なり合って実現したこととはいえることであった。現地で行われた研究報告会へ参加して、指導するインドネシアの学者、指導を受ける若い研究者のぶつかり合いは、酷暑のインドネシアではあったが、一服の清涼感を味わったものだった。

それは、現地のニーズを十分に把握し、温かな理解が生んだ成果に違いない。

●企業フィランソロピーと企業財団

確かにフィランソロピーを巡る環境は好転した。しかし、いま、財団を去るにあたって企業フィランソロピーの進展に対し、どれほどかかわってきたのかと、振り返ってみるといささか悔いが残る。

日本の企業財団は、企業フィランソロピーの一環としてよりは、企業の外部にあって独立した形で運営されていた。これに対し、アメリカの企業フィランソロピーについては「公益活動は大なるマーケティング」とか「企業寄附の性格は、企業の利己主義から利他主義に至るまで非常に多様である」(注)といった紹介がされていた。どちらかという控えめな感じの日本の企業財団のほうが王道を歩んでいるようにみえた。

しかし、筆者も参加した1988年に行われた経団連・日本国際交流センターの「米国の地域社会における企業の社会活動に関する調査ミッション」で、それまでの印象が覆された。とにかくアメリカの企業・企業財団は地域の社会問題に真正面から取り組んでいた。それに倣って、日本からの進出企業もその現地社会にとけこむために、フィランソロピーに取り組むようになるのである。そして、日本国内の本社も同調するようになった。そういうわけで、日本では「企業財団」が先で、「企業フィランソロピー」が後れて始まり、内容も異なるのである。しかしお互いに日本のフィランソロピーの発展を考えれば、共有できるものも多くなり、両者の関係はおのずと調整されるものであろう。

財団が尊重しているさまざまな考え方、愛他、多元、変革、市民自治といったものは、ただ民間非営利セクターにだけにあればよいというものではない。できるだけ多くの人たちの共感を得たい。そうでないと日本のフィランソロピーに発展はなく、狭いセクターのものに終わってしまう。財団は、専門性に磨きをかけ、常に社会に向けてのアンテナを高くし、企業をはじめ社会各層との対話を忍耐強く心がけていく必要がある。

(注)米国財団協議会編、(財)日本国際交流センターの監訳による報告書「企業による公益活動——その理論と実践」より引用。

研究助成プログラム見直しの視点

——財団リエンジニアリングの進め方について——

トヨタ財団 理事

黒川千万喜

●議論の出発点

トヨタ財団のプログラムのなかで、「研究助成」は最も大きなプログラムであり、発足当初より社会的課題をテーマに掲げて優れた研究への助成を目標としてきた。

具体的にいえば、分野別を越えた学際的な研究、先進的で社会の問題を鋭くあるいは幅広くとらえる研究への助成を心がけてきたわけだが、豊田会長のことばを借りれば、トヨタ財団は本当に優れた助成対象者に恵まれてきた。研究者の努力はもちろん、多くの選考委員の先生方のたいへんなお尽力に支えられてきた成果である。

この間プログラムの中味にも数多くの改良が加えられており、精緻なシステムが出来上がっていた。

他方、そうはいっても財団の外の世界も大きく動いており、後に述べるように、部分修正の積み重ねではいささか手詰まりの感じが出てきていたことも事実である。

昨年1月、豊田会長のところにかがった折に豊田会長から「20周年は1つの節目だから、変えるにしろ変えないにしろ、1度現状の見直しをシッカリやったほうがよい」というご示唆をいただき、飯島理事長も同じご意見であったため、思い切った見直し作業に入ったのである。

振り返ってみると結局議論は、財団のあるべき姿、役割についての考え方にかかわる点を中心であったといえる。この点は最近の Philanthropy に関する議論においてもあまり積極的に明らかにされていないように感じられる。すなわち、今日の複雑化、流動化する社会状況に対応するうえで、財団や NGO という第3セクターがどのように有効・有用であるか、具体的に説得力のある提案が必ずしも十分でないように思われる。その結果として日本の社会においては第3セクターのすわりが悪く、法

制も税制もきわめて不十分になっている。第3セクターの主要メンバーたる財団は、現代社会においてどのような社会的任務を果たすべきなのかという大前提を探りながら、「研究助成」のあるべき姿を構築していくことが求められているのであろう。

総体としてみた場合、日本の財団の活動は「初めに研究助成ありき」というスタイルが圧倒的に多いのは事実である。これは日本の企業財団の多くが昭和30年代後半から40年代にかけて設立され、欧米の科学技術に追いつくことを主眼としてきたという歴史をみれば至極当たり前の話である。しかし時代は変わった。文部省の巨大な科学研究費の存在もさることながら、日本の社会が当面している環境、教育、通商等の問題を考えれば、時代を切り開くことを使命とする財団がいつまでも研究助成を絶対視する考えにとどまっていた問題がないのか？ 財団の社会における役割のなかで研究助成がなぜ大切なのか？ をもう1度原点から考え直すことが必要ではないか。トヨタ財団は当初から人文科学、社会科学を中心とするきわめて先進的、野心的な試みでスタートしその路線を貫いてきたのだが、現状を率直にみれば、残念ながらトヨタ財団も前述した問題と無縁であるとはいえない。

しかし、いざ研究助成のあり方の抜本的な検討を始めると、意識のうえでも理屈のうえでもまた組織の力学上も、想像以上に困難なプロセスであった。一方で「継続は力なり」的な論も強いなかで、結局はこのプログラムはなんのためにやっているのかという根元的な問いに立ち返ることを再三繰り返さざるを得なかったこと自体が、後で触れるように財団の運営そのものに忍びよる硬直化を感じさせるものでもあった。皮肉でもなんでもな

く、財団がそのプログラムのなかで目指していることと、自身の現実の姿との落差に気がついたことは、この見直し作業のなかで得られた最大の収穫であったといえる。この結果をあくまで謙虚に受け止め、財団の事務局自身の変革能力を高めていくことを今後の最大の課題として institutionalise していくべきであろう。

ある意味では先に述べたように、現在の日本社会における財団のおかれている曖昧模糊とした環境からすれば、これはどの財団にも起こりうることであり、それだけに programme-review に際しては、根本的な問題意識をはっきりさせてかからないと、単なる現状追認や細かいテクニック論に終始する誘惑のとりことなりがちである。

●問題の発見

このように研究助成の見直しにあたっては、ほんとうの問題はなんであるのかという泥沼的な謎解きの議論に終始したが、当初、問題として感じられていたのは次の点であった。

- ①巨大化する文部省の科学研究費予算との競合
- ②新財団のプログラムとの競合
- ③国際化への対応
 - ④国際共同研究の実状がよく分からない
 - ⑤英文申請への対応
- ④研究成果の社会化不足

これらの問題について外部講師 10 数人を招きお話をうかがった。いずれもトヨタ財団のよき理解者であり、これからの財団のあり方について率直な提言をいただいた。内容は多岐にわたるが、最も重要と思われたのは次の点であった。

- 1) 現在の研究助成のテーマでは漠としすぎていて財団の問題意識がどこにあるのか分からない。上述の①、②の事態に対応するために財団の取り組む課題をテーマのうえで明確に commit すべきである(このことは社会の財団に対する認知度合いが低い原因の1つが、財団の姿勢のあいまいさに発しているという見方への回答を迫られていることとも重ねて考えるべきであろう)。
- 2) グローバルな諸問題に関する積極的な情報の収集

と解析(政府、官庁による政策提案の独占を打破し、柔軟で活力ある社会システムをつくる鍵……いわゆるオルタナティブスを提案する力の源泉としての情報能力)。

- 3) 情報発信力の強化:これは、現実的には④の研究成果の社会化を積極的に行うことであるが、それを通して財団の活動が世の中で評価される機会でもある。現状では財団自身が厳しい評価にさらされる機会が少なく、プログラム運営に対する厳しい問題意識が醸成される環境とはいえないのではないか。

このような財団内部での検討と並行して、山田圭一先生(筑波大学)を代表とするチームにプログラム・レビューをお願いし、国際共同研究の実情や「研究者からみた研究助成」等につき広範、かつ有意義な御示唆をいただきたいへん参考になった。

●新しいプログラム構築の視座

ここまできてようやく研究助成を再構築する視点は定まってきた。

(1) 第1が関心テーマの明確化であることはすでに詳述した。単なることばの遊びではなく、財団の *raison d'être* をかけたものでなければそもそも社会に相手にしてもらえないことを財団に身をおく者として肝に銘ずるべきである。「なぜか?」理由は簡単明瞭である。第1セクターも第2セクターもそもそも社会的に公共性を担保された存在であるのに対し、残念ながら日本の財団の現実はそこまでいっていないといわざるを得ない。財団がこれを乗り越えることはかなり緊急性の高い課題であるが、そのためにまずなすべきことは、自らの社会における有用性を、自らの問題意識を明確にして社会に問いかけることから始めるべきではないだろうか?

われわれの先達であるフォード財団やロックフェラー財団のプログラムをみると、驚くほどストレートに社会の課題と向かい合っている。「まず研究助成ありき」のスタイルとは社会との関わり方、社会に対する責任感が天と地ほども違うといわざるを得ない。

このままでは日本社会における財団の認知度は、極論

すれば100年たっても変わらないと考えるのが私だけの取り越し苦労であれば幸いである。

(2) それではテーマを変えれば、問題は解決するのだろうか？ 財団の運営を考えるうえでの最大の問題がここにあると思われる。その生い立ちからみて、財団そのもののあり方にはどうしてもstaticなイメージがつきまといがちで、プログラムとか運営のあり方について不断の見直しを前提とするダイナミズムを欠く体質であることを率直に認め、激動する社会に先駆けるべく自らを不断に変革し続ける体制を財団の中核組織に組み込まなければならぬのではないのだろうか。

どのような組織にも自己革新のメカニズムが必須であるが、財団こそその社会において果たすべき先進的役割のゆえに、最もこれを必要としているのである。

1つの解決策は、より具体化したテーマを軸に、それぞれ企画、展開能力をもった担当スタッフがいわば事業的な形で運営にあたり、その活動のなかで不断に見直しのサイクルを回す体制をつくるのが大切だと思われる。組織体としてはまったくオーソドックスなシステムであるが、これが意外に機能していないケースが多いのである。

(3) プログラムの運営ステップについての検討：次に、プログラムをその運営ステップに分けて、各ステップの意味と相互の関連を検討してみたい。どのプログラムにもあてはまることであるが、研究助成を運営するステップは次のように分けられる。

- ①企画（見直しを踏まえて）
- ②実施；公募，選考
- ③成果の活用（シンポジウム，出版）
- ④評価

この①～④までのサイクルを不断に意識して回すことが大切であるが、現状では③の「成果活用」が特に困難で、不十分であることは先に述べたとおりである。テーマの設定段階から成果の社会化を念頭においた組み立てをしていくべきなのである。その意味でもねらいをもった一貫性のあるプログラム運営を図っていきたいものである。ますます複雑化する社会の諸相に対する研究者の鋭い視点が、いまほど社会に求められているときはない。

貴重な研究成果を世の中に向けて適切な形で送り出すことは、助成財団の大切な使命であり、義務である。

●クロージング

以上、研究助成の見直し作業を通して財団のあり方を論じてみたが、事の性格上、大部分が私の理解であり、必ずしも財団全体のまとまった考えにはなっていないことをtake noteしておかなければならない。

肝心の新しいテーマについては、応募要項に詳しく述べられているように各セクションでの問題意識をできるだけはっきり打ち出すことに努めた。これもある意味では入り口であり、今後の展開のなかでより深く耕されるべきペースなのである。

最後に国際化対応であるが、まず英文による申請を受け付けることになった。この件についてもいろいろ議論があり、特に次の2点が実際上の問題点であった。

- ①英文申請が殺到した場合、処理能力が絶対的に不足する。
 - ②申請者のcredibilityのcheckが難しく、このプログラムが食い物にされるおそれがある。
- いずれも十分ありうる問題である。

しかし、一方で財団の基本精神としてできるだけ世界に開かれたプログラムを提供したいという考えがあること、および日本のおかれている国際的立場を考えると、たとえ困難があろうとも、財団として英文申請には取り組むべきであり、そのための工夫は財団自身の試練として受け止めるべきではないだろうか。ここは財団としての踏ん張りどころであり、これを逃げていては財団の成長もないと思うのだが、楽観的すぎる見方であろうか。

以上ややくどい書き方になったが、いたかったことは、財団自身が不断に自らのプログラムを評価し直していくためのフレームをしっかりとつくるのが重要だということであり、これは企業でも行政でも研究所でも、およそ組織体であれば必須の自己革新能力である。財団の性格上、たいへん重要な機能であるにもかかわらず、人材・組織・意識等の面で現状は問題があるという率直な認識に基づき、これを改善していきたいものである。

I . 研究助成

I-0. 研究助成の概要と活動結果

研究助成の概要

研究助成は、「新しい人間社会の探求」を基本テーマとし、その下に「高度技術社会への対応」と「多文化社会への対応」の2つの重点課題をおいて実施した。

研究種別には、第I種研究(個人奨励研究)、第II種研究(試行・準備研究)、第III種研究(総合研究)の3種があり、それぞれ表I-1に示す内容となっている。

4月1日から5月31日にかけて一般公募を行ったが、この研究助成プログラムは日本の研究者を主な対象としたものとはなっているが、申請書が日本語で書かれており、研究内容がなんらかの点で日本と関係していれば、申請者の国籍、居住地および所属を問わず受け付けることとしている。

選考は、第II種、第III種研究については飯島宗一委員長ほか9名の選考委員、第I種研究については飯島委員長と6名の専門委員による委員会それぞれ行い、選考基準としては、

- ①発想の獨創性
- ②社会に対する先見性
- ③研究実施の適時性
- ④民間助成の必要性
- ⑤計画の実現性

の5項目があり、研究種別に応じて表I-1の「選考の重点」の欄に示すような適用のしかたとなっている。

研究助成の活動結果

本年度の応募総数は表I-2に示すように757件で、前年度の681件に比べ増加したが、ここ10年でみればほぼ平均値(=747件)である。種別にみると、第I種研究が397件(平均329件=過去10年平均、以下同様)、第II種研究が318件(平均366件)、第III種研究が42件(平均42件)であった。ちなみに第I種の397件は1982年

度に研究種別を設定して以来の最高値を記録した。

選考は6月から8月にかけて行われ、第I種研究については6人の専門委員、第II種・III種研究については10人の選考委員が分担して個々の申請の評価と、第I種で2回、第II種・III種では3回にわたる委員会での審議にあたった。各委員は大部の申請書のみならず、継続案件については過去の報告書も精読し、さらに7月末に行われた経過報告会での報告内容も加味して個別の評価を行った。委員会の審議では、各委員の評価結果を踏まえながらも、単純に合計点のみに依るのではなく、1人の委員でも推薦があればその案件については丹念に議論し、必要とあれば保留扱いとし再評価を経たうえで採否を詰めていった。

第I種の個人奨励研究で採択されたものの特徴をみると、海外の大学・大学院に所属する日本人の申請が25件中10件で昨年に比べ倍増している。反面、在日・在外の外国人の採択は5件で昨年を下回った。これらの申請者はいずれも日本の公的な補助金などを得にくい立場にある方々である。個々の申請についてはもっぱら内容本位に選考が行われたが、結果としてこうした立場の方々の申請が多く採択されることとなった。また、例年に比べ継続申請が多かったのも今年の特徴で、これらについては特に継続の必要性も評価に加味したうえで、5件を採択とした。

第II種・III種研究では例年同様、採択課題のほとんどが国際共同研究となっている。またそのうち5件は外国人を代表とするものである。昨年から登場した旧ソ連との共同研究についても、3件が第III種研究として継続採択となったほか、新たに第II種で2件が採択となった。中国との共同研究も数年来コンスタントに採択されてきたが、本年度も第II種で5件、第III種で2件がそれぞれ採択となった。

トヨタ財団の国際共同研究はこれまでも欧米先進国よ

表 I-1 研究種別と助成の概要

研究種別	第I種研究（個人奨励研究）	第II種研究（試行・準備研究）	第III種研究（総合研究）
研究の性格	若手研究者による萌芽的な個人研究 （個人研究に限る）	学際的・国際的・職際的な研究グループによる試行・準備研究 （共同研究に限る）	第II種研究からの展開による総合研究 （共同研究に限る）
1件当たり助成額	概ね 50～200 万円/件	概ね 100～400 万円/件	概ね 200～2,000 万円/件
助成予定総額	約 4,000 万円 （約 25～30 件）	約 5,000 万円 （約 15～20 件）	約 1 億円 （約 10～15 件）
助成期間	1993 年 11 月 1 日より 1 年間	1993 年 11 月 1 日より 1 年間	1993 年 11 月 1 日より 1 年間または 2 年間
選考の重点	選考基準①③項を特に重視	選考基準①②④項を特に重視	選考基準①～⑤のすべての項目を総合して

表 I-2 研究助成の申請・助成結果集計

（金額は万円単位）

	年度	全 体		第I種研究		第II種研究		第III種研究		
		申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成	
申請・助成件数	1993	757	53	397	25	318	19	42	9	
	1992	681	56	327	27	309	19	45	10	
申請・助成金額	1993	240,632	19,026	72,174	3,986	116,642	6,870	51,816	8,170	
	1992	220,628	19,940	57,287	4,410	109,486	6,800	53,855	8,730	
1件当たり平均 申請・助成金額	1993	318	359	182	159	367	362	1,234	908	
	1992	324	356	175	163	354	358	1,197	873	
海外および 外国人からの 申請*	F/F	1993	31	5	11	1	17	2	3	2
		1992	34	6	13	4	16	2	5	0
	F/J	1993	51	5	43	4	6	0	2	1
		1992	41	7	34	7	7	0	0	0
	J/F	1993	45	10	39	10	4	0	2	0
		1992	47	5	39	4	5	0	3	1
	計	1993	127	20	93	15	27	2	7	3
		1992	122	18	86	15	28	2	8	1
代表者平均年齢	1993	40.5	42.5	33.5	32.7	47.7	48.9	53.0	55.9	
	1992	41.6	44.8	33.2	33.7	48.6	55.2	53.8	55.1	

（注）F/Fは、代表者が海外在住の外国人，F/Jは、代表者が日本在住の外国人，J/Fは、代表者が海外在住の日本人を示す。

りいわゆる途上国との共同が多く、相手国が抱える問題に対する研究協力という性格が強かった。そこでは対先進国共同とは異なる共同研究の進め方が模索されてきたが、さらに中国や旧ソ連など社会体制の異なる国々との共同研究ではそれぞれの国情を踏まえて、また新たな共同の枠組みが考慮されねばならないものと思われる。

財団では昨年度から研究助成評価プロジェクトを実施し、山田圭一氏（筑波大学教授）を代表に、ほか3名の専門家に依頼して研究助成のこれまでの実績の評価を行

ってもらった。本年度はこのプロジェクトの一環として、4月上旬に、研究助成の1984年度以降の助成受領者の方々を対象にアンケート調査を実施し、助成研究のその後の展開や、財団の活動方針に対する意見など、多数の回答をいただいた。また、6月下旬には、これまでに東南アジアとの国際共同研究で助成を受けたプロジェクトの、現地側共同研究者の意見を聞くため、山田教授に財団のスタッフも同行して、タイとインドネシアで7件のプロジェクトを選び現地でのヒアリング調査を行った。

I - 1. 第 I 種研究 (個人奨励研究)*

助成対象一覧

助成番号下の (継 2) は継続 2 回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の () は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
1	93-I-001 北部タイの日系企業で働くタイ人労働者の社会人類学的研究——文化衝突とその後の社会 変容—— 平井 京之介 ロンドン大学社会人類学部 院生 28 歳	1,700,000
2	93-I-025 痴呆老人家庭介護者の人生における介護経験の意味——生きがいと介護経験の関わりにつ いての日本人・日系米国人・米国人 (白人) 間の比較研究—— 山本 則子 カリフォルニア大学サンフランシスコ校看護学部 院生 29 歳	1,200,000
3	93-I-053 中国少数民族地域の都市化に伴う物質循環の構造的変化と都市・集落環境の変容 菅野 博貢 東京大学大学院工学系研究科 院生 30 歳	1,600,000
4	93-I-097 他者との共存へ向けて——中東の多宗派都市アレppoにおける紛争と共存のメカニズムの 歴史学的解明—— 黒木 英充 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 助手 32 歳	1,700,000
5	93-I-116 フィリピンにおけるスペイン人コミュニティの役割とその衰退——アメリカ・日本体制期 を通じて—— (スペイン) ロダオ・フロレンティーノ 東京大学大学院総合文化研究科 院生 33 歳	1,700,000
6	93-I-131 日本人の異文化適応——アメリカ多文化社会における日本人移住者の老後—— 金本 伊津子 オレゴン大学大学院人類学部 院生 34 歳	1,700,000
7	93-I-132 医療と宗教、協調の試み——カトリックの聖地ルルドにおける医療事業の歴史と展望—— 寺戸 淳子 日本学術振興会 海外特別研究員 31 歳	1,800,000
8	93-I-140 途上国の開発に伴う社会紛争の解決における NGO の役割——マレーシアの事例を中心 として—— 大石 幹夫 ブラッドフォード大学平和学部 院生 37 歳	1,500,000
9	93-I-151 森林伐採がヤクシマザルの食性、分布、遊動にもたらす影響の評価による、猿害の発生機 構の解明——人とサルとの共存の論理にむけて—— (イギリス) デヴィッド・エイ・ヒル エジンバラ大学 客員研究員 35 歳	1,800,000
10	93-I-196 難民問題に関する国際政策決定過程の力学——カンボジア難民に対する政策決定及びその 実施の再考—— 當麻 英子 サウスハンプトン大学政治学部大学院 院生 34 歳	1,800,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
11	93-I-201 紙からみた日韓両国の家族原理形成過程——昭和 15 (西暦 1940) 年、「創氏改名」を中心とした戸籍と族譜の社会技術史—— 坂元 真一 東京大学大学院総合文化研究科 特別研究員 30 歳	1,260,000
12	93-I-209 アルゼンチンにおける日系人社会 (アルゼンチン) ——80 年代以降の日本への出稼ぎ移住とそのインパクト—— ヒガ・マルセーロ 東京大学大学院総合文化研究科 院生 30 歳	1,200,000
13	93-I-225 非永住型在日外国人のコミュニケーションと機動的コミュニティ形成過程に関する調査 高梨 成子 (財)未来工学研究所 主任研究員 42 歳	1,500,000
14	93-I-228 日本における受療者による医療評価の指標化とその臨床応用に関する研究——韓国・米 (継 2) 国・日本の臨床現場の内容分析をふまえて—— 今中 雄一 日本医科大学医療管理学教室 助手 32 歳	2,000,000
15	93-I-294 朝鮮の内政改革と井上角五郎 (韓国) 鄭 光燮 上智大学法学部 非常勤助手 37 歳	1,500,000
16	93-I-309 パキスタン北西辺境州ブネール地方における古代仏教寺院遺跡群の考古調査に基づくガ ンダーラ文化複合現象の比較研究 藤原 達也 慶應義塾大学大学院文学研究科 院生 29 歳	1,500,000
17	93-I-310 生殖医療技術と文化・社会の相関関係 (継 2) ——不妊治療技術と胎児診断技術における「選択」—— 柘植 あづみ お茶の水女子大学大学院人間文化研究科 院生 33 歳	1,500,000
18	93-I-314 ベトナム北部における村落と都市の文化人類学的研究——戦争と社会主義と海外企業進出 (継 2) が人々の生活に与えた影響—— 高岡 弘幸 ハノイ総合大学ベトナム研究協力センター 研修員 32 歳	1,200,000
19	93-I-330 アマゾン河下流における民間医療パジェランサの医療人類学的研究——映像による治療 者・被治療者の相互関係の分析を中心として—— 松岡 秀明 カリフォルニア大学バークレー校人類学科 院生 36 歳	1,800,000
20	93-I-346 植民地下朝鮮における公娼制度研究 山下 英愛 梨花女子大学校女性学科 院生 33 歳	1,400,000
21	93-I-353 ブエノスアイレスにおける多文化言説のネットワーク——1900 年から 1930 年まで—— 石井 康史 スタンフォード大学スペイン・ポルトガル語学科 院生 33 歳	1,800,000
22	93-I-384 アジアにおける西洋人の建築活動とその変遷に関する基礎的研究——ポルトガル・スペ (継 2) ンの旧植民地関係資の比較をととして—— (日本/ブラジル) 西山 宗雄 マルセーロ 東京大学生産技術研究所 院生 28 歳	1,800,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
23 93-I-385 (継2)	日本の看板文化の特質を考える——アジア諸国の看板文化との比較を通して—— 立部 紀夫 神奈川県立神奈川工業高等学校デザイン科 教諭 42歳	1,600,000
24 93-I-387	インドにおける大規模水利事業の展開とその水管理に関する実証的研究 南埜 猛 ジャワハルラル・ネル大学国際関係学部大学院 院生 29歳	1,600,000
25 93-I-394	古アッシリア期商人の交易活動におけるクレジット及びデポジットシステムの研究 ——アナトリア文明博物館蔵未公開キュルテベ文書の分析を通じて—— 川崎 康司 早稲田大学大学院西洋史学科 院生 34歳	1,700,000
小 計 (第I種研究) 25 件		39,860,000

* 1994年度より「研究助成A」と改称。

研究概要 (第I種研究)

1. 北部タイの日系企業で働くタイ人労働者の社会人類学的研究 ——文化衝突とその後の社会変容 (平井 京之介)

近年、トランスナショナルカンパニーによる労働集約型工場の建設が、アジア、中南米地域を中心に盛んとなっている。それらの工場では、外国企業と現地労働者とのさまざまな衝突が報告されている。

当研究では、こうした衝突の多くは文化や価値観の差違からくる誤解が原因であると考え、それらの文化衝突とその後の社会変容を考察する。タイ北部新工業地帯にある日系企業とその労働者が生活する村落において社会人類学的調査を行うというものである。

2. 痴呆老人家庭介護者の人生における介護経験の意味 (山本 則子)

痴呆をもつ老人が日本内外を問わず急増している。今後の高齢化社会では、痴呆の老人を家庭内で世話する人々の主観的経験を基に、その生活の質を支える観点から各種サービスを計画することが重要であろう。

当研究では、痴呆老人における家庭介護者の主観的経験を説明する理論的枠組みの構築を目的とする。具体的には、老人の嫁、娘を対象にインタビューを行うが、その際、老人介護は文化規範を反映するという仮説に基づき、日本人、日系アメリカ人、アメリカ人(白人)という3集団間での分析結果の比較考察という形をとる。

3. 中国少数民族地域の都市化に伴う物質循環の構造的変化と都市・集落環境の変容 (菅野 博貢)

多くの開発途上国では、国家的な近代化政策の下に都市形態や集落形態が急激に変化しているが、その背後では、かつて自然の物質循環の下に維持されていた生活環境が、その物質循環の構造的破壊とともに根本的な変化にさらされていると考えられる。

当研究は、中国少数民族地域を対象として、都市・集落環境の変容を都市化に伴う物質循環の構造的変化としてとらえ、そのメカニズムを解明することで、今後の開発途上地域における環境保全と地域開発のあり方について考察していくものである。

4. 他者との共存へ向けて——中東の多宗派都市アレppoにおける紛争と共存のメカニズムの歴史学的解明 (黒木 英充)

中東地域の都市、シリアのアレppoではユダヤ教徒、キリスト教徒、ムスリムの3宗派が共存というきわめて多元的な社会を構成してきた。長い歴史のなかで摩擦、紛争を生じさせることはあっても相互に「浄化」し合うことはなかった。

当研究では、社会機構と規範のなかに他宗派存在を必要とする論理がビルト・インされていた18世紀以降のアレppoでの分割に対抗するメカニズムを、マイノリティとしてのキリスト教徒人口の動向から明らかにするものである。

5. フィリピンにおけるスペイン人コミュニティの役割とその衰退 (ロダオ・フロレンティーノ)

16世紀後半から始まったスペインによるフィリピン支配は、19世紀末に起きた革命によって、支配権をアメリカに譲ったことにより衰退したとされている。しかし、その支配期に培われたキリスト教文化は、フィリピンの国民文化として依然存続していたといわれている。

当研究では、オーラルヒストリーおよび史料調査によって、こうしたスペインの残存文化がアメリカのフィリピンにおける植民地支配にどのような影響を与えたかについて、日本軍制期との比較等を通して十分な評価、位置付けを行うものである。

6. 日本人の異文化適応——アメリカ多文化社会における日本人移住者の老後 (金本 伊津子)

高齢者の急増は日本社会だけの問題ではない。アメリカ日系社会も同様な問題に直面している。ロサンゼルス日系人社会は、異文化で老後を迎える日本人移住者のための老人福祉施設を設立、文化的特徴のある福祉サービスを提供してきた。現在、これらの施設によせる日系老人の期待は大きく、新しい施設設立への要請も高い。

当研究は、アメリカという異文化に「うまく」適応してきたと考えられている日系人の老後の日常生活に焦点をあて、老いの過程におけるエスニシティと文化適応の問題に文化人類学的な考察を与えるものである。

7. 医療と宗教、協調の試み——カトリックの聖地ルルドにおける医療事業の歴史と展望 (寺戸 淳子)

19世紀に成立したカトリックの世界的聖地ルルドは、奇蹟的治癒によって知られる「病む人々の聖地」である。教会は迷信のそしりを避けるため早くから医療従事者との協調に努めてきたが、近年医療サイドも聖地への巡礼が病人に与える心理的効果に注目するようになってきた。

当研究は、ルルド巡礼を病院の年間プロジェクトの一環としている病院、および癌患者が組織する巡礼団の対面・同行調査を通して、この近代的聖地における病の意味・位置付け、科学と宗教の協調の問題を、歴史人類学的視点から考察するものである。

8. 途上国の開発に伴う社会紛争の解決におけるNGOの役割——マレーシアの事例を中心として (大石 幹夫)

アセアン型の経済開発は開発のモデル・ケースと考えられている一方で、各国内部では、開発に伴い犠牲を強いられた社会集団が存在し、彼らをめぐってさまざまな社会紛争が生じている。また、そのような社会紛争を平和的に解決しようとするNGOの活動も近年活発である。

当研究では、マレーシアにおいてNGOがかかわった事例のうち、新都市建設計画における小作人の地所からの締め出し等、4つの事例を現地調査し、NGOの紛争解決における役割を分析・評価する。

9. 森林伐採がヤクシマザルの食性、分布、遊動にもたらす影響の評価による、猿害の発生機構の解明 (デヴィッド・エイ・ヒル)

屋久島の森林は大規模な伐採によって攪乱を受け、現在、伐採跡地は杉の植林地を含むさまざまな二次林植生になっている。その結果、本来天然林を生息地とするニホンザルは多様な環境への適応を余儀なくされている。

当研究では、サルを天然林とさまざまな回復状況にある二次林とで比較し、伐採とその後の森林の回復がサルの分布、食性および遊動パターンに与える影響を評価することにより、こうした生息環境破壊がサルによる農作物被害のあり方に与える影響を知るうえでの基本的なデータを提供するものである。

10. 難民問題に関する国際政策決定過程の力学——カンボジア難民に対する政策決定及びその実施の再考 (當麻 英子)

国際レベルにおける難民問題に関する政策立案および政策決定の力学については、ほとんど研究されていない。世界的規模の広がりを見せる難民問題へのグローバルな視野からの取組みが叫ばれる昨今、国際レベルにおける政策決定過程に関する知識欠如は著しい。

当研究では、国連システムという枠組みで難民問題の政策決定過程をとらえ、利害関係をもつアクターの役割およびそれらの相互作用を決定する政治的、経済的、社会的、組織的、構造的要因等について考察する。

11. 紙からみた日韓両国の家族原理形成過程

(坂元 真一)

戸籍技術は、個人籍技術に比して効率面で圧倒的な優位を誇る国民書記技術である。それゆえ、東亜地域の諸国では国運営の基礎的装置として編纂されてきたが、従来の研究では、この書記物を過去の家族形態を再現するための資料としてのみ扱う傾向がきわめて強かった。

当研究では、戸籍なる書記物自体が有する強い社会的機能に注目することにより、日本列島・朝鮮半島地域で編纂されてきた戸籍およびその補助書記物としての族譜が、この地域の家族原理形成過程に果たしてきた役割について分析を行う。

12. アルゼンチンにおける日系人社会——80年代以降の日本への出稼ぎ移住とそのインパクト (ヒガ・マルセーロ)

近年、日本における「外国人労働者問題」に関する学術研究も発表されてきてはいるが、その多くは日本における行政ないし経済的な側面を主な対象としている。このため、労働者を送り出す側の事情についての、労働者個人の視点からの研究はあまりなされていない。

当研究では、アルゼンチンから来日した日系出稼ぎ労働者を対象に聞き取り調査を行い、移民を送り出す社会の視点から日本における外国人労働者問題を考察する。既存の受入側を中心に行われている研究を補完し、移住という現象の双方向的、総合的な把握を目指すものである。

13. 非永住型在日外国人のコミュニケーションと機縁的コミュニティ形成過程に関する調査 (高梨 成子)

日本における外国人は、本国の家族や友人とのコミュニケーションを密にし、親睦を深めたり情報交換をすることが多い。こうした生活や経済の支えとしての「機縁的コミュニティ」は、出身国・地域によって形成過程および活動内容、機能が異なっている。

当研究は、コミュニケーションの側面に焦点をあて、「機縁的コミュニティ」の実態等を可能な限り出身国別に比較することにより、緊要な課題である「グローバルな情報を含む地域・生活情報の提供」を目指した、地域や国際間をも含めたメディアの役割を検討する。

14. 日本における受療者による医療評価の指標化とその臨床応用に関する研究 (今中 雄一)

受療者による医療評価の指標を医師にフィードバックすることは、医療の質を体系的に向上させる1つの原動力となると考えられている。

当研究では、昨年度からの継続研究として患者側の要素や医療提供およびその結果に関する客観的データを照合しその指標の特性を質的に解析し、患者の満足度形成や受療行動のメカニズムを探る。今年度は、異文化圏で得たデータとの比較も行い、患者の性質や価値観による受療者評価指標に及ぼす影響を探ることにより、より精度の高い受療者による評価指標の開発を進める。

15. 朝鮮の内政改革と井上角五郎

(鄭 光燮)

近代の日・韓関係において、その時代区分上最も論争されるのは近代史の起点であり、これは両国における起点に対する認識の違いから生じているものと思われる。このため起点のより精緻な解釈については、再び日韓関係史を紐解くことが重要であろう。

当研究では、1882年に来鮮し朝鮮の内政改革に関与した井上角五郎を対象に、彼と朝鮮官僚、日本為政者・在野人との関連性に着目することにより、井上の国家観や対韓観から当時の日韓関係および朝鮮内政改革の真意を明らかにする。

16. パキスタン北西辺境州ブネール地方における古代仏教寺院遺跡群の考古調査に基づくガンダーラ文化複合現象の比較研究 (藤原 達也)

「ガンダーラ」は、特にわが国では、仏像の起源なる問題とのみ結び付いて宣伝され、もっぱら美術史の対象領域となってきた。しかし、仏像は仏寺という全体から恣意的に切り取られた一要素にすぎず、ガンダーラ地方の仏寺群も、古代北西インドで生じた人類史上稀有な大文化複合の担い手の1つにすぎない。

当研究は、各地方の仏寺址の様相を考古学的に把握し、その相互比較によって当文化の構造の一翼を解明せんとするもので、前世紀末のスタイン卿の踏査以来の空白地であるブネール地方での考古調査を主体とする。

17. 生殖医療技術と文化・社会の相関関係——不妊治療技術と胎児診断技術における「選択」 (柘植 あづみ)

昨年度の研究で、生殖医療技術の発達がさらなる技術の発達を要請するような意識を強めていること、生殖医療技術を拒否する理由となっていた従来の価値観が、多様化によって歯止めにならなくなったこと、逆に技術を受容する理由となっている従来の価値観は内容が変化しつつも強まっていることを導き出した。

今回の継続研究では、果たして不妊治療技術と胎児診断技術の受容と拒否の態度が同一人のなかで変化するのか、その変化の要因は何か等についてを継続的に調査することで明らかにする。

18. ベトナム北部における村落と都市の文化人類学的研究 (高岡 弘幸)

ベトナムは、日本にとって現在最重要位置を占める国の1つでありながら、相次いだ戦争などにより、これまでフィールドワークを行うことが不可能であり、相変わらず、われわれにとって未知の国のままである。

当研究は、ベトナム北部の村落と都市において、社会構造を中心とした文化人類学的調査研究を昨年からの継続で行い、戦争・社会主義・海外企業進出による伝統的社会文化の変容過程を把握し、現在の人々の暮らしを明らかにすることにより、これからのベトナム社会・文化研究の基礎を確立することを目指すものである。

19. アマゾン河下流における民間医療バジェランサの医療人類学的研究 (松岡 秀明)

西洋医学のあり方が問われている現在、西洋医学を相対化する視点を提供する医療人類学は重要な意義もっている。また、治療者・被治療者の相互関係は、西洋医学と非西洋医学では異なり、主要な研究課題の1つとなっている。

当研究は、アマゾン河流域で行われている民間医療バジェランサの実態を映像として記録し、西洋医学における医師・患者関係と比較することにより、治療者バジェと被治療者の関係を分析することを目的とする。

20. 植民地下朝鮮における公娼制度研究 (山下 英愛)

日本が植民地下朝鮮で実施した公娼制度は、女性を従属的な地位に法的に規定したばかりでなく、性に対する統制を通して従来の社会的・性的慣習と意識をも支配、改編しようとするものであった。

当研究は、このように植民地支配政策の重要な一部分であった公娼制度の実施目的、過程、実態について明らかにすることを目的とする。これらの考察を通して公娼制度が社会の諸側面に及ぼした影響を明らかにするとともに、日本の朝鮮植民地支配の歴史的意味を女性の視点から問い直す端緒としたい。

21. ブエノスアイレスにおける多文化言説のネットワーク——1900年から1930年まで (石井 康史)

20世紀初頭のブエノスアイレスは、膨大な労働移民、過度の経済成長、先端科学技術の徹底した導入によって、現代先進国諸都市の問題点をも先取りしていた。

当研究はこの時期のブエノスアイレスを短期に出現した多文化社会としてとらえ、当時の最富裕国の1つアルゼンチンの最先端のメディア・テクノロジーを基盤・媒体とすることで、異種・多様な言説を生産していった事例として扱う。当時の様々な言説を一次資料で再構成することによって、当地の社会システムの断面図を描くことを目的とする。

22. アジアにおける西洋人の建築活動とその変遷に関する基礎的研究 (西山 宗雄 マルセーロ)

現在のアジア諸都市の基本的構造となったヨーロッパ植民地政策上の建築行為に関する研究は、特にイベリア人の遺業についていまだ希少な段階である。また本国でも建築史の分野における体系的な整理は、特に当該対象地域では希少若しくは途上の段階にある。

当研究は、本国における文献調査、様式の抽出、および分析を目的としている。また作業対象の中心は、ポルトガルおよびスペインであり、特にポルトガルでの各地域ごとの主要関係建築物調査とその総覧の作成を目指す。当研究は、昨年度からの継続助成である。

23. 日本の看板文化の特質を考える——アジア諸国の看板文化との比較を通して (立部 紀夫)

日本の看板文化は、江戸時代には一定の形式が確立していたと考えられるが、居留地が設けられた横浜・長崎などの開港場において、幕末から明治の初期にかけて洋風意匠が見られ始めるが、これはその背景にある香港・上海を経て来日した貿易商人の洋館建設や商業活動にかかわりがあることが、昨年度の助成研究を通して明らかになってきている。

今年度はさらに、看板意匠の「洋風」なるものが主として香港経由であることに着目し、香港における中国的なものや西洋的なものの融合過程について考察する。

24. インドにおける大規模水利事業の展開とその水管理に関する実証的研究 (南埜 猛)

インド政府による独立後の大規模水利事業は、農業の発展のみならず広く社会・経済の各方面に多大な恩恵をもたらしてきた。しかし、一方では水資源の有効利用がなされていなかったり、開発による環境破壊といった問題も発生させている。

当研究は、水管理のあり方が問題であると考え、独立後の水利開発の展開のうえで、特に重要だと考えられるチャンバル計画を事例として取り上げ、水管理の観点から事業が地域に与えた影響や問題を実証的に明らかにするものである。

25. 古アッシリア期商人の交易活動におけるクレジット及びデポジットシステムの研究 (川崎 康司)

紀元前2000年期第一四半期のアッシリア商人が残した記録「キュルテペ文書」は、彼らの交易活動が「原始的な市場システムを前提とし、複雑な制度と組織を駆使する私企業」という枠のなかで解釈されるべきことを示す。

当研究は、アッシリア商人の活動に関して私企業としての複雑さ、国家から受ける制約の程度について、より詳細に明らかにする。考古学的発掘によって得られた2つの「商会」の未公刊文書約300枚の経済史的分析を通して、その「商会」の実態を定義する1つの試みである。

I - 2. 第II種研究（試行・準備研究）*2

助成対象一覧

助成番号上の*印は国際共同研究を示す。
助成番号下の(継2)は継続2回目を示す。無記入は新規。
助成番号下の()は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
26 93-II-041 (中国)	水上栽培法による河川、湖沼の水質改善に関する研究 宋 祥甫 中国水稻研究所 助教授 37歳 ほか9名	3,500,000
27 93-II-045	東カリマンタンのオランウータンの分布調査と生態管理の方法——低地フタバガキ林地域での総合開発の中での伝統的生業・文化の役割—— 鈴木 晃 日本・インドネシア・オランウータン保護・調査委員会 54歳 ほか3名	3,500,000
28 93-II-050	オセアニア小島嶼居住民の異文化受容と文化形成に関する研究 印東 道子 ファイス島史研究会 40歳 ほか4名	3,600,000
29 93-II-051 (継2)	幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究——民衆の情報収集・分析・活用に関する研究—— 宮地 正人 絵画情報史研究会 49歳 ほか7名	3,900,000
30 93-II-052	人口と家族構成にみるユーラシア諸社会の比較研究——日本・中国・トルコ・ベルギー・スウェーデン社会の基層—— 速水 融 国際日本文化研究センター 教授 63歳 ほか8名	3,900,000
31 93-II-053	現代中国農村社会の地域史的研究——海寧市村落資料の整理・分析と実地調査による多角的な研究—— 上田 信 現代中国農村社会研究会 35歳 ほか4名	3,700,000
32 93-II-068	ブラジルにおける沖繩シャーマニズムの展開——移民のエスニック・アイデンティティと宗教—— 大橋 英寿 東北大学文学部 教授 54歳 ほか2名	3,400,000
33 93-II-072	ロシアの炭化水素地層における微生物生態の研究 清水 潮 炭化水素微生物生態研究会 62歳 ほか13名	3,600,000
34 93-II-085	多文化音楽教育の方法論研究——ピース・ストラテジーとしてのワールド・ミュージック(日本音楽を含む)教材共同開発—— 滝沢 達子 ワールド・ミュージック教育研究会 47歳 ほか11名	3,500,000
35 93-II-089	非開発国モンゴルにおける環境保全と国家形態——低開発国にならないために—— 鳥越 皓之 モンゴル環境研究会 49歳 ほか4名	3,800,000

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
36	93-II-093* 民衆の視点より見た中国農村変革の研究——華北における村と家族の50年史—— 三谷 孝 中国農村慣行調査研究会 47歳 ほか10名	4,000,000
37	93-II-094* 国連・地域的国際組織・NGO（非政府組織）による選挙支援活動に関する研究——政治文化の多様性と民主化概念の再検討—— 大芝 亮 国際的選挙支援研究会 39歳 ほか2名	3,600,000
38	93-II-114* (イギリス) 日本語を母国語とする、英国在住の児童の英語習得過程の解明——統語習得を中心に、英語を母国語とする児童の英語習得過程との比較—— ポール・フレッチャー レディング大学言語学部 教授 50歳 ほか4名	3,600,000
39	93-II-149* (継2) 「大陸の花嫁」策の社会的基盤と戦後日中社会に与えた影響——日中戦争期における青年女子移民政策の経緯と具体的展開に関する研究—— 久保 義三 「大陸の花嫁研究会」 66歳 ほか6名	3,800,000
40	93-II-176* アフリカ熱帯森林における人と動植物の共存メカニズムを解明する国際共同研究——地域主体型の森林保護モデルの構築を目指して—— 丹野 正 弘前大学人文学部 教授 47歳 ほか4名	3,600,000
41	93-II-179* アジア地域における教育協力の現状と課題——多文化共生社会に向けての教育協力理念の構築をめざして—— 赤石 和則 アジア教育協力研究会 44歳 ほか10名	2,800,000
42	93-II-191* アフリカゾウと地域住民の共存を図る緩衝地帯のモデル策定に関する基礎的研究 小原 秀雄 女子栄養大学 教授 66歳 ほか12名	3,800,000
43	93-II-260* チェルノブイリ原子力発電所4号炉事故による放射能放出量と事故直後の被曝線量評価に関する研究 瀬尾 健 京都大学原子炉実験所 助手 52歳 ほか4名	3,300,000
44	93-II-318* 漢字文化圏諸言語間における漢語語彙の比較——日本語教育をはじめ国際間で利用可能な言語教育用基礎資料—— 鈴木 武生 ポリグロット外国語研究所 日中英語教師 32歳 ほか3名	3,800,000
小 計 (第II種研究) 19 件		68,700,000

* 2 1994年度より「第II種」「第III種」を統合して「研究助成B」と改称。

研究概要（第II種研究）

26. 水上栽培法による河川、湖沼の水質改善に関する研究 （宋 祥甫）

広大な自然水域の水面に発泡スチロール製のいかだを浮かべ、そこで農作物を栽培し食糧生産の増強を図るという目的で中国水稻研究所が開発した水上栽培法は、食糧生産、水面緑化に有効であり、同時に水中の塩類除去を通じて水質改善に寄与する新技術として期待されている。

当研究は、水上栽培による農作物の収量向上と水質改善およびそれに伴う淡水魚の種類と生産の増大の可能性を立証し、その科学的根拠を総合的に解析する。それらを基礎に自然水域での食糧生産、淡水魚生産と水質改善とを調和させるための水上栽培法を提示する。

27. 東カリマンタンのオランウータンの分布調査と生態管理の方法 （鈴木 晃）

インドネシア東カリマンタン州のオランウータン生息地に大規模総合開発計画が推進されつつある。これらの開発計画は、オランウータンの生息に壊滅的な打撃を与えるだけでなく、先住焼畑民の生活基盤を失わせ、彼らの生活を大きく変容させるものである。

当研究は、先住民の森林利用にかかわる伝統的生活様式を文化遺産として継承することが、ひいてはオランウータンの保護に有効であるとの考えから、彼らの生態と先住民の伝統的生業および開発の間の相互関係を多角的に把握し、共存のためのシステムづくりを目指す。

28. オセアニア小島嶼住民の異文化受容と文化形成に関する研究 （印東 道子）

オセアニアには島の大小にかかわらず、人間が広く居住してきた。海に囲まれた島嶼環境に居住する人間集団が、どのように外界との接触を保ってきたかを知ること、人間集団の異文化認識や異文化受容の様子を理解することの一助となる。

当研究は、ミクロネシアのファイブ島の伝統文化が形成された過程を、総合的に理解しようとするものである。具体的な研究資料は古人骨、花粉遺存体、先史遺物、口頭伝承などで、島民がどのように外界とかわりながら自文化を形成したかをさまざまな視点から検討する。

29. 幕末・維新期の風聞集等にみられる瓦版・錦絵類の基礎的研究 （宮地 正人）

近年画像資料の重要性が指摘され、歴史学分野においてもその利用方法が検討されている。

当研究は、先年度に引き続き、第1に幕末・維新期に流通した錦絵・瓦版・風聞集類を広く収集し、第2にこれらの資料を日本史や日本文化の研究者が利用し得るデータベースにまとめる。その作業にあたっては、調査対象機関を拡大してデータの収集を図るとともに、どのようにすれば多目的検索が容易になるかを工夫する。将来は、絵画史料の総合目録データベースを公開することを目指すものである。

30. 人口と家族構成にみるユーラシア諸社会の比較研究 （速水 融）

人口構造と家族構造は、社会を考察する際、最も基本となる構成要素である。ミクロのデータにさかのぼり、工業化以前について、これら2つの観察が全面的に可能な社会は、日本・中国・トルコ・ベルギー・スウェーデンの5つしかない。

当研究は、歴史人口学と家族社会史の研究者が共同して、文化的背景を異にする上記の社会について、近代化・工業化によって変貌する以前の、それぞれの社会のプロトタイプ、その特徴と共通性を明確にし、比較研究を行い、本格的な国際共同研究に備えるものである。

31. 現代中国農村社会の地域史的研究——海寧市村落資料の整理・分析と実地調査による多角的研究（上田 信）

近年、中国は急激な経済・社会の変容にさらされている。その変容の方向を見極めるためには、社会の基層である農村における変化を理解する必要があるが、従来は研究の基礎となる現地資料を利用することが困難であった。

当研究は、浙江省の村落レベルの行政文書、会計帳簿、日誌などの資料（1950～80年代）を、中国人研究者の協力を得て、整理・分析するものである。さらに、当該の村落において聞き取り調査を行い、農村社会の変容過程を立体的かつ細密に描き出す。

32. ブラジルにおける沖縄シャーマニズムの展開——移民
のエスニック・アイデンティティと宗教 (大橋 英寿)

南アメリカにおける日系移民は移住先社会に同化を遂げていく一方で、言語や宗教など固有文化を根強く継承してエスニック・アイデンティティを保持している。

当研究は、ブラジルにおける沖縄系移民社会に存続するシャーマン「ユタ」の活動の実態を、土着宗教と習合した特異な「心霊教会」の事例を中心に精査する。この知見を基に、エスニック・アイデンティティの維持と変容における宗教の機能という普遍的でかつ今日的な課題を探究すると同時に、沖縄文化の異質性・独自性・創造性を、移民の適応過程の解明を通して明らかにする。

33. ロシアの炭化水素地層における微生物生態の研究
(清水 潮)

広大なロシアには世界の埋蔵量の7%の石油、44%の天然ガスが埋蔵されている。これらの炭化水素のさまざまな、また変動しつつある自然環境での転換・分解・無機化は、将来の地球環境にも大きな影響をもつ。これらの過程は主として微生物によって行われるが、これまで、その研究はロシアにおいて独自の展開をしてきた。

当研究は、従来異なる学問的体系・方法によってきた日本・ロシアの研究者の共同によって、この過程にかかわる多様な微生物の生態を系統学、生理学、生化学、分子生物学の方法を用いて解明しようとするものである。

34. 多文化音楽教育の方法論研究——ピース・ストラテジーとしてのワールド・ミュージック教材共同開発 (滝沢 達子)

音楽は世界共通語ではなく、各国各様の文化を背景として成り立つものであり、それぞれの音楽の類似・相違の認識は、広く人間の相互理解にもつながるものである。しかしこれまでの音楽教育のなかで民族音楽は、断片的な鑑賞教材とされるにとどまっている。

当研究は、日・米・英・豪・フィリピンの研究者の共同体制の下、民族音楽学と音楽教育を国際理解教育という観点より統合し、自文化・異文化を音楽を通して理解するための新しい教材開発を目指す。体験教材を作成し、実験データを収集するという実証的アプローチを試みる。

35. 非開発国モンゴルにおける環境保全と国家形態
——低開発国にならないために (鳥越 皓之)

モンゴルは、社会主義体制から市場経済に移行したばかりである。この国は、いま工業化を目指しているが、他方、環境保全に対する熱意を国の内外に表明している。特に、遊牧や農業を支えているモンゴルの草原は気候変動に弱く、たいへん注意深い開発が要求されている。

当研究は、モンゴルにとって不可欠な環境保全と国民の生活維持のためのデータの作成と農牧畜をも視野に入れた環境政策の形成を意図している。環境政策、遊牧生活、基幹産業と環境破壊との関連、気候観測網づくりと測定、などを行おうとする。

36. 民衆の視点より見た中国農村変革の研究——華北における村と家族の50年史 (三谷 孝)

日中戦争中に満鉄調査部を中心として行われた『中国農村慣行調査』の調査村を再調査し、革命以前の村の状況と現状とを比較することを通して、この50年間の農村変革の意義を考察する。

当研究では、個々の農家の家計や家族構成に及ぶ詳細な調査資料の残された村を訪問し、村民からの聞き取り調査・世帯別アンケート調査と現地での文献資料の収集を行って、村民の生活の変化を中心に村の歴史を再構成するとともに、土地改革以降の諸変革の実情および人口と家族構成・村民の社会意識の変化を明らかにする。

37. 国連・地域的国際組織・NGO (非政府組織) による選挙支援活動に関する研究 (大芝 亮)

冷戦後、国際組織は、非先進諸国の「民主化」を応援するために、選挙行政に関する技術援助や選挙実施中の監視活動に、本格的に取り組むようになった。

当研究は、国連・地域的国際組織・NGOによる選挙支援活動を分析することにより、「民主化」概念の普遍性と多義性を明らかにし、多元的な政治文化への国際社会の対応を考察することを研究目的とする。カンボジアおよびアフリカにおける国際選挙監視団の活動を事例として分析する。

38. 日本語を母国語とする、英国在住の児童の英語習得過程の解明 (ポール・フレッチャー)

近年増加の一途をたどる日本企業の海外進出に伴って、多くの日本人子弟がイギリスに滞在している。これら子弟の語学教育について、日英両国側で関心が高まっている。英米児の英語習得については、詳細、かつ、膨大な研究があるが、日本人児童の英語習得については、断片的にしか分かっていない。

当研究は、イギリス滞在中の複数の日本人児童の英語習得過程を記録し、統語を中心に分析する。日本人児童の傾向を抽出し、それを、英米児の傾向と比較し、類似点、相違点を明らかにし、日本語との関連を考察する。

39. 「大陸の花嫁」策の社会的基盤と戦後日中社会に与えた影響 (久保 義三)

1930～40年代、日本政府は対外侵略・植民地支配の尖兵たる「満州移民」「青少年義勇軍」の配偶者送出政策として「大陸の花嫁」策を打ち出したが、その政策経緯と確保・訓練・送出の実態、戦後への影響は明らかではない。

当研究は、文献発掘、面接調査、生活実態調査等の方法により、①「大陸の花嫁」策の政策意図と具体化の経緯、②各地域の教育会・男女青年団・婦人会・各種民間団体等の関与の実態、③渡航後の「花嫁」の現地への適応と自己形成の経緯、④「中国残留婦人」「残留孤児」等帰還者や家族の再適応問題、を経時的に考察する。

40. アフリカ熱帯森林における人と動植物の共存メカニズムを解明する国際共同研究 (丹野 正)

アフリカ、コンゴ北部の熱帯森林は、現在でも大規模な人為的改変を被っていない世界でも希有な森林帯である。しかし、最近になって周辺地域へ商業伐採や銃猟による動物の乱獲が浸透し始めており、森林と森林に居住する人々の生活が脅かされる恐れが生じている。

当研究はコンゴ研究者と協力して、森林の動植物、人の共存の実態を明らかにし、また森林居住民族が培ってきた価値観を理解して、森林を総合的に捉え直す。そして、森林の保全と開発が一部有用資源に重点をおいた「木を見て森を見ない」ものとならない方途を探る。

41. アジア地域における教育協力の現状と課題——多文化共生社会に向けての教育協力理念の構築をめざして (赤石 和則)

教育に対する国際協力は、1970年代以降にその活動規模を飛躍的に拡大してきた。日本でも ODA による教育援助、奨学金供与を中心とした NGO の教育協力の規模は拡大するばかりだが、理念と方法論が未確立であるため、さまざまな問題の芽を内包しているといえる。

当研究は、教育や国際協力の研究者と官民の教育協力実践者が協力して、アジア地域での教育協力の現状と課題を理論と実践の検証から洗い出し、「教育協力とは何か」を問いながら、これからの教育協力理念を構築し、望ましい教育協力を提案していくための第一歩である。

42. アフリカゾウと地域住民の共存を図る緩衝地帯のモデル策定に関する基礎的研究 (小原 秀雄)

アフリカゾウ (以下、ゾウ) は、地域および地球生態系において重要な役割を占める種である。密猟者や地域住民によるゾウの生活場所への侵入の増加が、ゾウのポピュレーションを激減させてきている。ゾウの保護および住民との共存策推進のためには、優れた緩衝地帯の設置が重要である。

当研究は、緩衝地帯具体例と、その理論モデル化などに至る基礎として、従来、対象としてきたツァポ国立公園のゾウの生態学的研究を基盤として、地域生態系研究および住民の実態などについての基礎的研究を行う。

43. チェルノブイリ原子力発電所4号炉事故による放射能放出量と事故直後の被曝線量評価に関する研究 (瀬尾 健)

チェルノブイリ原発事故に関する調査報告はこれまで多く行われてきたが、最も重要な問題である放出された放射能の総量と、住民の被曝線量についての、最終的な結論はいまだに得られていない。

当研究は、日本側メンバーが独自に続けてきたこれまでの研究を、最も被害の大きい当事国ベラルーシの研究者との共同作業を通じていっそう拡大深化させ、事故の影響の全貌を明らかにすることを目指している。第一歩として、ベラルーシに蓄積されている膨大なデータを吟味、整理し、それに日本側の独自の解析手法を適用する。

44. 漢字文化圏諸言語間における漢語語彙の比較——日本語教育をはじめ国際間で利用可能な言語教育用基礎資料（鈴木 武生）

漢語系語彙は東アジア諸言語の語彙体系で大きな位置を占めるが、音韻的・意味的側面において歴史・地理、文化的要因から大きな差異が生まれており、これら言語間における意志疎通の弊害となるばかりか、各対象言語の学習者に対しても大きな負担となっている。

当研究はこれら諸言語で用いられている漢語系語彙について、中国語普通話＝日本語間をはじめに、計量言語学の技術とコンピュータを駆使し、音韻・意味的差異と共通点を明らかにし、教育用基礎資料として複数方向間で利用可能なデータベースの構築を行うものである。

I - 3. 第III種研究 (総合研究)*2

助成対象一覧

助成番号上の*印は国際共同研究を示す。
助成番号下の(継2)は継続2回目、(継3)は継続3回目を示す。
助成番号下の()は研究者の国籍を示す。無記入は日本国籍。

助成番号	研究題目 代表研究者 所属	助成金額 (円)
45 93-III-003 (継2)	* チェルノブイリ核被災の後障害に関する総合研究——医学的調査と社会変動に伴う心理的 対応について広島との相補的比較—— 佐藤 幸男 広島大学原爆放射能医学研究所 教授 60歳 ほか8名	9,300,000
46 93-III-004 (継2) (中国)	* 中日流通比較研究——日本の経験とこれからの中国の流通革命—— 馮 昭奎 中国社会科学院日本研究所 副所長, 教授 53歳 ほか11名	8,500,000
47 93-III-007 (継2)	* 混迷続く旧ソ連邦における科学研究機関の活動状況と今後の動向に関する調査研究 市川 芳彦 旧ソ連邦学術研究機関動向調査研究会 64歳 ほか4名	7,500,000
48 93-III-008 (継2) (オーストラリア)	* オーストラリアのアジア系移民に関する国際共同研究——アジア系移民を通じて見る多文 化社会の動態—— デビッド・F. イップ アジア系移民研究プロジェクト・チーム 45歳 ほか4名	7,500,000
49 93-III-014 (イスラエル)	* 計算辞書学に基づく包括的漢字情報データベースシステムの構築 春遍 雀來 漢英字典編纂所 所長 46歳 ほか2名	7,000,000
50 93-III-021 (継2)	* 中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響 石田 紀郎 カザフ研究会 53歳 ほか12名	15,500,000
51 93-III-031 (継2)	* サハラにおける高度技術移転に伴うオアシス社会の変容過程の研究 小堀 巖 サハラ研究会 69歳 ほか15名	16,000,000
52 93-III-033 (継2)	* インドネシア伝統工芸に関する日本・インドネシアの共同研究——ジャワ更紗を中心とす る歴史・意匠・技術の総合調査—— 小笠原 小枝 日本女子大学 助教授 51歳 ほか9名	4,400,000
53 93-III-039 (継3)	* 中国・四合院民居地区における集住空間の保存再生モデル開発に関する日中共同研究 大西 國太郎 都市景観計画研究会 64歳 ほか13名	6,000,000
	小 計 (第III種研究) 9 件	81,700,000
	研究助成合計 53 件	190,260,000

*2 1994年度より「第II種」「第III種」を統合して「研究助成B」と改称。

研究概要（第III種研究）

45. チェルノブイリ核被災の後障害に関する総合研究 (佐藤 幸男)

チェルノブイリ原子炉事故が発生し1993年で7年目を迎えた。これまで放射線による急性障害はすでに明らかにされたが、その後障害は、研究方法や調査対象の差異によって得られた結果も同様ではない。

当研究はベラルーシの医師・研究者との協力の下に後障害の全体像を把握する手がかりを得ようとするものである。昨年度はウクライナ、ベラルーシにおいて専門基幹病院でのカルテ、病理組織標本の検証、および小児甲状腺癌をめぐって高汚染地区の小児約200例と対照として軽汚染地区の30人の検診、超音波診断、穿刺吸引細胞診、血中ホルモン、尿中ヨード値測定等を行い、一定の成果を得た。今後さらに地域集団あるいは個人被曝線量を可能な限り発掘するほか、被災地の生活問題を含めた心理的ストレス等に対して社会的対策樹立に寄与できる提案を図ることも目指す。

46. 中日流通比較研究——日本の経験とこれからの中国の流通革命 (馮 昭奎)

今日の中国は、社会主義市場経済への移動と経済高度成長を背景に「流通革命」へと向かっている。中日両国の経済関係の進展という観点からも、双方の流通システムに対する相互理解の必要性が高まりつつある。

当研究は、中日の研究者が日本の流通整備の過程を明らかにするとともに、最近の日本企業の中国流通市場への進出の状況なども踏まえて相互のシステムの比較を行うものである。昨年度の第II種研究では中国側が日本の多数の研究機関や流通企業を訪問見学し、官民両面にわたり全体像をほぼ把握した。本年度はさらに日本側共同者も加えて研究体制を拡充し小売業の近代化と組織化、卸売機構の比較、流通基盤整備、政府の流通政策、中国の流通革命と中日経済関係などの項目について調査と検討を行う。

47. 混迷続く旧ソ連邦における科学研究機関の活動状況と今後の動向に関する調査研究 (市川 芳彦)

1991年末のソ連邦の解体へと一気に進んだ世界史上の一大変革の真っ只中で、伝統のある旧ソ連邦の文化・学術は崩壊の危機に瀕している。旧ソ連邦の科学の崩壊は、全世界の文化にとって大きな損失になる。また、改革を断行しようとしている旧ソ連邦の社会にとって、科学・技術の健全な維持、発展はその目的を達成するために必要な原動力である。

当研究は、物理学の先端分野の研究者の視点から、ロシア、ウクライナ、その他の地域の科学研究機関の状況を調査することにより、混迷続く旧ソ連邦における科学・技術の将来への動向を把握しようとするものである。昨年度実施した試行準備研究によって得られた調査結果を基に、本年度はさらに、応用物理学、電子工学、脳機能生理学の諸分野の状況調査を進め、日本と旧ソ連邦の間の学術交流のために有用な基礎的データベースを構築する。

48. オーストラリアのアジア系移民に関する国際共同研究 (デビッド・F. イップ)

オーストラリアでは1980年代以降、アジア系移民が増加する傾向にあり、このアジア系移民の増加がオーストラリアの国是であるマルチカルチュラリズムの議論を再燃させている。アジア系移民は、オーストラリア社会の今後のあり方にきわめて重要な要素になると考えられるが、一方で、これらの議論の背景には、オーストラリア人のもつアジア観、アジア認識が深くかかわっていると思われる。

当研究は、このようなアジア系移民をめぐり、①アジア系移民はオーストラリア社会でいかに認識されているか、②アジア系移民はオーストラリア社会をいかに認識しているか、を中心テーマとして、オーストラリアの5大都市（ブリズベン、シドニー、メルボルン、アデレード、パースの5市）で計1,250人の住民を対象に面接調査を行い、アジア系移民を通じて、多民族・多文化社会の動態を明らかにすることを目的としている。

49. 計算辞書学に基づく包括的漢字情報データベースシステムの構築 (春遍 雀來)

当研究の代表者により1990年に刊行された「新漢英字典」は数多くの特長を有する斬新な字典である。16年にわたる漢字の機能の徹底的な研究と計算辞書学を生かして編纂された同字典は漢字研究の基礎的文献であるとともに、「多文化社会」のニーズにこたえるものである。

当研究では最新のコンピュータ技術を駆使して同字典のデータを基礎とした「包括的漢字情報データベースシステム」を構築する。現代日本語における漢字の各種情報や造語機能を網羅する。作業は4段階に分かれ、①データ変換・文字セット(外字等)の整備、②システムの分析と設計、③プログラム開発、④応用および試運転を行う。漢字情報兼字典用データベース作成の基礎的研究として、多数の発展的字典や教材の効率のよい編纂を可能にするほか、「漢外」字典(たとえば漢独・漢西)の基本的システムの枠組みを提供するものである。

50. 中央アジア乾燥地における大規模灌漑農業の生態環境と社会経済に与える影響 (石田 紀郎)

今世紀最大の人為的な環境変化と呼ばれる中央アジア一帯の大規模灌漑農業は、アラル海やバルハシ湖の急激な水位低下、湖水面積の縮小、湖水の塩分濃度上昇を通して人間をも含めた周辺の生態環境に多面的な影響を与えており、世界的な注目を浴びている。

当研究会は、1990年以来カザフスタン共和国農業科学アカデミーおよび科学アカデミーと、当該地域の環境問題について共同研究を進めており、灌漑地の塩類蓄積、飲料水源としての地下水への塩分や農薬の混入、貧血をはじめとする健康障害等に対して早急な対策が必要であることを確認している。昨年度の助成により、灌漑用水を取水している水稲栽培ソホーズでの多面的な環境調査により基礎的資料を得ている。今回は、さらに畑作農業における水利用等の調査を開始し乾燥地における農業と水との関係を考察し、環境再生と今後の持続的農業生産を可能にする手法開発を目指す。

51. サハラにおける高度技術移転に伴うオアシス社会の変容過程の研究 (小堀 巖)

サハラ砂漠のオアシス集落は、アルジェリア政府による大規模灌漑装置の導入や、太陽光発電施設の設置などの高度技術移転の影響によって、自然環境や伝統的オアシス農業、さらには社会システムの面で大きな変容を遂げつつある。

当研究は、サハラ南部のオアシス群のなかで、従来代表者の蓄積のあるInBelbelに重点を絞り、その地域の基本地図を作成して、それをベースに社会・経済調査を行い、さらにオアシス社会全体の変容をここ数年のスケールで記録し、今後の発展への問題点を明らかにするものである。昨年度の第II種研究で、日・仏・アルジェリアの共同研究者の間の協力体制を固め、本格的継続調査に向けての準備が行われた。

52. インドネシア伝統工芸に関する日本・インドネシアの共同研究 (小笠原 小枝)

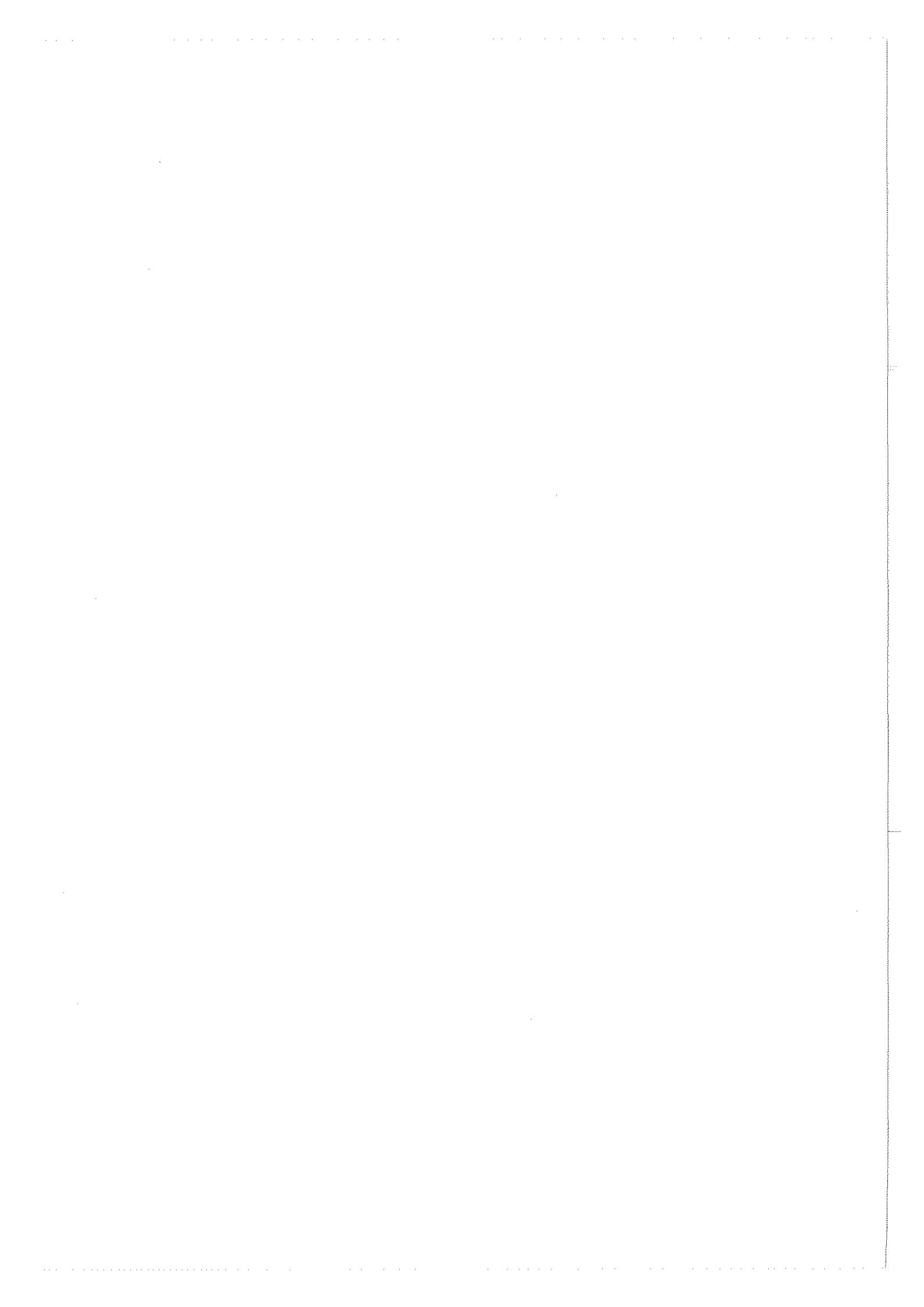
インドネシアのバティック(ジャワ更紗)は、世界でもまれな独得の蠟染である。しかし近代化に伴う工業化によって、化学繊維・染料のバティック柄のプリントが安く、かつ大量に生産されるようになった現在、伝統バティックは急速に衰微している。このためジャワ人においても、プリントと伝統バティックとの識別すらできなくなる傾向にある。したがって、手工芸としての伝統バティックを保存していくためには、現時点で可能なかぎりの総合資料を作成する必要があると考える。

当研究では1991年度助成金によって得られた成果を踏まえ、①国立博物館および個人所蔵のバティックの写真資料の収集と整理、②各地の工程見本・染料見本の充実、③インドネシア側に基礎資料の作成方法を指導し、今後の継続化を図る、④資料が活用され、より充実するように研修セミナーを積み重ね、伝統バティックに関する知識交換のネット・ワークをより強固なものとする。

53. 中国・四合院民居地区における集住空間の保存再生
モデル開発に関する日中共同研究 (大西 國太郎)

前回の第III種研究では、西安市の歴史的な中心地域におけるケーススタディの1つとして、徳福巷四合院民居地区の保存再生計画を立案した。この計画のなかで、住環境を改善するため、四合院民居の機能やデザインの特徴を生かしつつ、現代生活にも適合する低層高密の新共同住宅群のあり方を提案している。

当研究は、この低層高密の新共同住宅群のモデルを開発するため、まず、既存の各種共同住宅団地と四合院民居群との間で、機能性や保健性、地域景観やコミュニティへの貢献度等、多面的な分析比較を行う。次に、住環境への要求や四合院民居との比較評価など、団地居住者の意向調査を行い、上記の調査結果と重ね合わせて分析する。さらに、徳福巷地区で得た新共同住宅群のあり方(仮説)を検証し、これらの分析と総合のなかから、基本モデルを構築する。このモデルを応用し、徳福巷地区における新共同住宅の基本設計を行う。



II. 市民活動関連プログラム

II-0. 市民活動関連プログラムの概要と活動結果

市民活動関連プログラムの概要

● 2つの市民関連プログラムについて

トヨタ財団の助成の特徴の1つに、「市民研究コンクール」と「市民活動助成」といった2つの市民関連プログラムの存在が挙げられる。前者は「研究」を通して個人の創造性の開拓に寄与し、後者は目前にある社会的問題や課題に対処しようとする活動や試みを支援することをそれぞれ直接的な目的としている。

しかし、これによって目指すところは、いずれも、「地域」に根ざしつつ、草の根の視点から個人や社会のあり様に迫ることにより、結果として、社会の自己革新につながる契機とならんとすることである。

● 市民研究コンクール

このコンクールは、「身近な環境をみつめよう」をテーマに、それぞれの地域の生活に密着した長期的な研究活動を促進することを目的としている。

地域の住民を主体としたグループによる「身近な環境」を対象とするアイデアに対して助成を行い、その助成による研究成果について表彰するものである。公募は隔年に行っている。

研究テーマは応募者が「身近な環境」と認識したものであること、しかも「環境」を幅広くとらえ毎日の暮らしのなかから問題や課題を発見することによって、地域をみつめ、社会のあり様を考えていけるような内容が期待されている。研究方法については、テーマに見合った、日常生活のなかで取り組めるような独創的な方法が望まれる。

本年度は、昨年度末に決定した第6回の本研究助成対象7チームのフォローを行うとともに、第7回の公募(1993年10月15日～1994年1月15日)を行った。その結果、70件の応募があり、1月から2月にかけての2回の選考委員会での選考を経て、3月開催の第69回理事

会にて、13件：700万円(注)の予備研究助成対象を決定した。第7回の事業については、以後、次のような段階によって進められる予定である。

[予備研究の実施]	1994年4月～12月
[本研究助成対象の決定]	1995年3月
[本研究の実施]	1995年4月～1997年3月
[最優秀賞・優秀賞の決定]	1997年10月

なお、第7回の選考委員会の構成は以下のとおりである。

<敬称略、50音順>

委員長：日高敏隆

委員：赤瀬川原平、延藤安弘、嘉田由紀子、

北村節子、柴田敏隆、土井陸雄、米本昌平

● 市民活動助成

この助成は、昨年度に準じ、市民活動の分野における活動全般の発展・向上に役立つことを主な目的に、「活動の交流や促進の契機となるプロジェクト」に対する助成を行うことをその主旨としている。

助成の対象とした主な内容は、以下のとおりである。

- ①一定の地域や分野における活動拠点、および、これに準ずる団体の基盤整備等
- ②他の分野の活動を一定期間にわたって体験するための人的交流(経験交流)
- ③複数の活動団体相互の連携による集会等の開催・運営、および、その成果のとりまとめ等
- ④多くの活動団体を対象とした情報紙(誌)の編集・発行。海外(へ)の市民活動情報の翻訳・出版等
- ⑤これまでの活動に関する「記録」の作成
- ⑥すでに作成された活動記録等の「出版」
- ⑦市民活動全体の支援を目指した調査や研究
第1期の公募(4月1日～6月20日)の結果、122件の応募があった。これについては、7月から8月にかけて

の選考委員会（委員長・栗原彬ほか4名）での選考を経て、9月下旬開催の第68回理事会にて、9件；1,530万円の助成対象を決定した。助成期間は、11月より1年間である。また、第2期の公募（10月15日～12月15日）においては、147件の応募があった。これについては、1994年1月から2月にかけての同選考委員会での選考を経て、3月開催の第69回理事会にて、10件；1,560万円の助成対象を決定した。助成期間は、1994年4月より1年間である。

なお、市民研究コンクールや市民活動助成における貴重な体験を踏まえて、こうした活動に対する理解と支援に向けた論議を多角的な視野から幅広く行うことを目的とした「市民活動リンクアップフォーラム」を各地で開催することとした。その第1回を下記のとおり実施した。

「市民活動をもっと元気にする方法」

（1993年11月27日(土)、於：広島県民文化センター）

また、トヨタ自動車との共催により下記の環境フォーラムも実施された。

「都市と自然——うらおいのある環境を求めて」

（1993年6月18日(金)、於：アムラックス東京、池袋）

市民研究コンクール

“身近な環境をみつめよう”の活動結果

●第6回市民研究コンクールの経過について

昨年度末に本研究助成対象チームに選ばれた7件は、以下のとおりである（カッコ内は主な活動対象地域）。

- 6C-009 石打の子どもと地域づくりを考える会(新潟)
- 6C-017 大島間隙生物研究会(愛媛)
- 6C-031 オオセッカの生育環境研究グループ(青森)
- 6C-034 蒲生野考現倶楽部(滋賀)
- 6C-037 天竜村ギフチョウ研究会(長野)
- 6C-058 野外活動研究会(愛知)
- 6C-062 豊島の地域文化を見直す会(広島)

以上7チームは本年度4月1日より本研究を開始し、1995年3月まで研究活動を実施する予定である。

1994年11月20日には本研究経過報告会が開かれ、研究の進捗状況とその内容についての発表が行われた。これに対し選考委員から研究内容への質疑応答や今後の研究活動の進め方などについてのアドバイスがあった。遠方のチームのメンバーも多数参加し、活気あふれる報告会となった。1994年4月から8月にかけて、選考委員による本研究助成対象チーム現地インタビューが行われる予定である。

●第7回市民研究コンクールの選考結果について

応募状況については、地域的に東京がこれまでと同様多かったが、過去1件もなかった地域からの応募、あるいは、少なかった地域からの応募の増加など、全国的な広がりがみられた。また過去6回の研究コンクールで予備研究あるいは本研究に進んだチームが、その後の継続的な活動を発展させ、新たなテーマで再度応募してきたところが数チームあったことは今回の特徴として挙げるができる。

テーマについては、最近注目されているエコ・ミュージアム、リサイクル活動、農村環境、農業問題に関連するもの、環境教育など、時代の流れを反映したものが目立った。全体として熱意は感じられるものの、焦点が絞られていないもの、具体性に乏しいものも多く、日常生活の視点から地域社会を見直し、問題点を掘り下げようとする社会的な視点や意識を兼ね備えた研究が少なかったことが選考の過程で指摘された。また「環境」を、自然保護、水質浄化など自然環境の側面からのみとらえる傾向の研究がまだ多くみられた。コンクールの主旨からみてもさまざまな要素の絡み合った「環境」に対するアプローチ、視点の幅広さをもった研究テーマが今後強く求められる。

今回助成の対象となった13件(注)については、これまで見落とされていた対象に注目している点、重要な視点が含まれている点、今後の研究活動の発展性、地域への広がりの可能性が評価された。各チームとも地域社会との関係性を常に視野に入れた研究活動を進めていかれることを期待したい。

(注)その後チームの都合により1件が辞退となった。

市民活動助成の活動結果

選考結果について

●本年度の応募の特徴

本年度の応募全体に関する特徴としては、まず、応募数が過去最多を更新したことが挙げられる。そして、単に数の増加だけではなく、それらの内容からも、最近の市民活動の質的向上をよりいっそう感じ取ることができ、社会における市民の新たな胎動を暗示するものとしてたいへん興味深い。ただし、地域別にみたとき、応募数の増加に寄与したのは、やはり、東京を主とする関東地域149件(昨年度は125件)であり、この種の分野にも、ある意味で一極集中の影響が確実に及んでいることを実感する。とはいうものの、大都市圏以外に拠点をおく団体からの応募も序々にではあるが着実に増えつつあり、一方で、地域的な拡大傾向も見取れる。いまこそ、地域に根ざし、地域の問題から社会全体のあり様を問うような活動の広がりに期待したいものである。

テーマや内容の面からは、環境保護・保全に関連したもの、障害者や高齢者の自立の支援に役立つことをねらいとしたもの、東南アジアやアフリカをはじめとする開発途上国の支援や協力を目的とするもの、地域およびまちづくりにかかわるものなど、従来から比較的良好に取組まれているパターンは依然として多い。今回は特に、PWA(Person with Aids)、在日外国人、女性などの人権擁護を目指した内容、および、市民活動全体の発展・向上に役立つために、この種の活動を支援していこうとする試みなど、社会状況の変化に敏感に対応した新たな傾向も散見され出した。

●応募にみる最近の市民活動

こうした点からも、最近の市民活動が、もう1つの社

会的主体としての存在を意識し始め、自身の活動の基盤を確立することを目指しながらも、一方で、個別の活動を越え、社会全体的な視点から提言的な試みに挑戦していこうとする状況がうかがえる。また、これに関連して、市民性と専門性とを結び付けることによって、活動をよりインパクトあるものにしていこうとするプロジェクトがみられるようになり、行政や企業なども視野の範疇におき、それらをも意識したネットワーク形成型の活動を展開していこうとする傾向も増えつつある。これらは、地域や現場での問題の変容や深まり、および、団体自体の成熟・転換の双方を反映しているものと考えられる。

しかし、全般的には依然として問題対処に終始する場合が多く、その根本を成す個人や社会のあり様にまで踏み込もうとする状況にはいまだ至らず、という感もある。現在の社会状況からしてやむを得ないことかもしれないが、目前に迫る問題の根本を見据えようとする意識が、市民レベルから高まっていかなければ、真に成熟した市民社会を実現していくことは難しいのではないだろうか。今後応募される団体の関係者には、このような点をも考慮した活動と内容を希望したい。

●選考について

さて、選考については、応募全般にわたり質的な向上がみられたこともあって、いずれの委員会でも計画内容を中心に熱心な議論が展開された。また、それらの過程では、都市圏以外の地域からの申請、および、活動歴は浅くても将来性のある活動にも注目していこうとする配慮が委員全員におしなべてみられた。反面、にわかアンケート調査や他団体の活動評価に向かう傾向などについては、多くの厳しい意見も出された。

助成の対象となった多くは、地域や社会における現実問題に対処していくなかで、「草の根」の視点から個人と社会のあり様を考えようとする示唆的な内容を伴ったものであり、これからの展開と成果の波及を期待したい。

II-1. 第7回市民研究コンクール予備研究助成

助成対象一覧

助成番号	研究題目 応募団体名 代表者	対 象 都道府県 人 数	助成金額 (円)
1 7C-004	飛騨高山ふるさと散歩道の植生と自然度調べ 飛騨高山ふるさとを歩こう会 小野木 三郎	岐 阜 26	550,000
2 7C-006	生活の中の花環境を探る 花環境を考える会 野田 春彦	東 京 8	500,000
3 7C-007	白根山周辺の硫黄鉱山廃鉱緑化に関する調査——植生実験と強酸性土壌 に適した植物の探索—— 白根火山研究会 下谷 昌幸	群 馬 6	550,000
4 7C-013	山村における地域資源の利用および保全に関する研究——長谷村におけ るマイクロ水力発電の利用を通して—— 南アルプス研究会 小沢 陽一	長 野 9	550,000
5 7C-017	諫早湾干潟の賢明な利用の実証的研究 諫早湾干潟研究会 富永 健司	長 崎 9	550,000
6 7C-020	烏山川緑道に野鳥を呼び戻そう——都市住民と野鳥の共存を目指す研究 と実験—— 烏山川緑道愛鳥の会 橋本 一雄	東 京 11	500,000
7 7C-023	東京都多摩西部地域における中型獣の生息状況と、市民生活とのかかわり 東京野生生物研究所中型獣研究グループ 神田 栄次	東 京 12	550,000
8 7C-029	中山間地農村の生き残り戦略としてのエコミュージアムづくりの推進 ——岩手の大地にイーハトーブ建設を目指して—— 東和町空山川総合研究所エコミュージアム研究会 菊池 哲	岩 手 41	550,000
9 7C-039	京都にやさしい修学旅行プログラム——エコツーリズムから修学旅行を 考える—— 京都エコツーリズム研究会 枚本 育生	京 都 18	550,000
10 7C-044	人里とため池のビオトープ研究——京都乙訓地方の農のある風景の保全 をめざして—— 京都乙訓の自然研究会 森 豊彦	京 都 5	500,000

助成番号	研究題目 応募団体名 代表者	対 象 都道府県 人 数	助成金額 (円)
11 7C-045	岩見沢の鉄道とまちと人のかかわりを見つめなおす研究 (岩見沢の機関車トーマスをさがせ) 岩見沢の鉄道復興を考える会 山崎 恭徳	北海道 21	550,000
12 7C-051	鶴見川流域における妖怪と神様の研究——妖怪や神様のいる場所の環境特性と社会的意義について—— 鶴見川妖 (怪) 会 並木 直美	神奈川県 7	550,000
13 7C-060	出雲の水文化——過去と現在—— 出雲の水文化を語る会 川上 誠一	島 根 6	550,000
	合 計	13 件	7,000,000

(注) 助成期間：1994年4月1日～12月20日
7C-044は、チームの都合により辞退となった。

II-2. 市民活動助成

助成対象一覧（第1期）

助成番号下の（継2）は継続2回目を示す。

助成番号	テーマ 代表者 所属	助成金額 (円)
1 93-K-027	南アジアの NGO によるネットワーキングとアドボカシーに関する研究——インドの NGO を中心として—— 斎藤 千宏 南アジア NGO 研究会 代表 39歳 ほかに9名	1,700,000
2 93-K-029	外国人女性のためのシェルター活動に基づく社会的提言活動 三木 恵美子 女性の家“サーラー” 代表 36歳 ほかに24名	1,600,000
3 93-K-047 (継2)	登校拒否・不登校の児童・生徒に対する教育援助の一環としてのホームスクーリング活動——調査・研究の深化とホームスクーリング活動普及のための土台づくり—— 奥地 圭子 東京シューレ 代表 52歳 ほかに10名	2,000,000
4 93-K-069	持続的森林利用と国内紙パルプ消費削減のための市民ネットワークづくり 黒田 洋一 熱帯林行動ネットワーク 事務局長 39歳 ほかに8名	1,700,000
5 93-K-097	大野の地下水を蘇生させる総合的プランの提言 津郷 勇 大野市の地下水を蘇生させるプロジェクトチーム 代表 62歳 ほかに24名	1,800,000
6 93-K-100	市民公共セクターの担い手のための実験的・研修プログラムづくり 早瀬 昇 市民公共セクターをつくる会 事務局長 38歳 ほかに10名	1,700,000
7 93-K-108 (継2)	米国市民活動の日本向け情報誌“GAIN”の発行と同誌をテキストにした連続セミナーの開催 柏木 宏 日本太平洋資料ネットワーク (JPRN) 理事 39歳 ほかに10名	2,000,000
8 93-K-110	日本の HIV 感染者が必要とする情報の収集と提供 井上 洋士 HIV と共に生きる会 代表 31歳 ほかに9名	1,600,000
9 93-K-112	市民参加で検証するふるさとの海の現状と未来への展望 中村 勝彦 唐津の海を守ろう市民の会 会長 56歳 ほかに11名	1,200,000
市民活動助成・第1期計 9 件		15,300,000

助成対象一覧（第2期）

助成番号下の（継2）は継続2回目、（継3）は継続3回目を示す。

助成番号	テーマ 代表者 所属	助成金額 (円)
10 93-K-141	「筑摩工芸研究所の活動」に関する記録の出版 新井 俊雄 筑摩工芸研究所 48歳 ほか9名	1,000,000
11 93-K-163 (継2)	チェルノブイリ原発事故被災地における治療対策のための市民報告会と専門家会議の開催 鎌田 實 日本チェルノブイリ連帯基金 45歳 ほか5名	1,700,000
12 93-K-178	北海道における女性の人権侵害に関する実態調査——被害者救済・支援の組織づくりに向けて—— 近藤 恵子 女のスペース・おん 47歳 ほか10名	1,000,000
13 93-K-180	東アジアの渡り鳥フライウェイ（飛行経路）における湿地保護のためのNGOネットワーク 鈴木 マギー 地球の友・四国 42歳 ほか8名	1,700,000
14 93-K-181	アフリカの開発に関わるNGOと研究者を中心とした市民ネットワークづくり 尾関 葉子 アフリカ日本協議会 35歳 ほか20名	1,500,000
15 93-K-183	日独下町のまちづくりに関する市民活動と行政対応の比較——東京・向島とハンブルク・オッテンゼンを例に—— 山田 勝巳 まちづくり才団・川の手倶楽部向島オッテンゼン交流委員会 67歳 ほか18名	1,500,000
16 93-K-188 (継3)	山形県に激増する外国人花嫁への支援事業に関する基盤整備 武田 節子 日本国際ボランティアセンター・山形 48歳 ほか10名	1,600,000
17 93-K-196	HIV感染者・AIDS患者のニーズに応えられる医療ネットワークづくり 池上 千寿子 HIVと人権・情報センター東京 47歳 ほか6名	1,800,000
18 93-K-245	「SVA15年の歩み」に関する記録の作成 松永 然道 曹洞宗国際ボランティア会 58歳 ほか9名	1,800,000
19 93-K-252	多角的市民ネットワークを通じての、日本—カンボジアのパートナーシップの形成と実践 熊岡 路矢 カンボジア市民フォーラム 47歳 ほか12名	2,000,000
市民活動助成・第2期計 10 件		15,600,000
市民活動助成 第1期・第2期合計 19 件		30,900,000

助成対象概要

1. 南アジアの NGO によるネットワーキングとアドボカシーに関する研究——インドの NGO を中心として (斎藤 千宏)

日本の NGO の多くがアジア地域で活動しているが、インドが「NGO 大国」と呼ばれ、南アジア地域で先進的な役割を果たしているという事実を知る関係者は意外に少ない。

当プロジェクトは、インドにおける NGO が、国内的・国際的にどのようなネットワーキングを実践し、そのなかから、どのような政策提言等を通じて地域住民の福祉向上に成果を上げてきたかを、現地の活動家たちとともに探ることをねらいとしている。

2. 外国人女性のためのシェルター活動に基づく社会的提言活動 (三木 恵美子)

法治国家といわれる日本社会において、性暴力・売春などの人権侵害を受けている外国人女性たちは多い。そして、被害者であるはずの彼女たちだが、さまざまな理由から、必要な保護を受けられない状況にある。

当プロジェクトでは、彼女たちの緊急避難所 (シェルター) としての同団体の活動のなかからみえてきた日本人の意識や日本社会の問題点を、より多くの人々と見据え、共有することによって、それらのあり様を見直していくための種々の提言活動を行おうとするものである。

3. 登校拒否・不登校の児童・生徒に対する教育援助の一環としてのホームスクーリング活動 (奥地 圭子)

増加の一途をたどる不登校の児童・生徒への教育援助の一環として、同団体では、昨年度の助成によりホームスクーリング活動に関する調査と準備を進めてきた。

当プロジェクトでは、前回調査のいっそうの深化と社会的認知の拡大をねらいとして、①全調査サンプルの集計・分析を行い、ホームスクーリング活動へ生かす、②国内の関心を有する人々とのネットワークの形成を図り、海外の実践家を招聘した国際シンポジウムを開催すること、などを通して、社会的な理解と普及のための諸活動を行うことを目的としている。

4. 持続的森林利用と国内紙パルプ消費削減のための市民ネットワークづくり (黒田 洋一)

日本は紙の大量消費国であるが、その原料の多くを海外に依存しており、これに伴う社会・環境への影響に対する責任が問われている。

当プロジェクトは、海外の森林保護運動と国内のリサイクル運動にかかわるグループの相互理解と協力関係を促進するとともに、国内の紙消費を早期に削減するための共通の具体案を模索していくネットワークづくりを目的に、消費者団体、古紙回収業者、製紙業界、自治体、省庁などと研究会や協議を重ねることによって、森林資源の持続的利用に向けた試みを行おうとするものである。

5. 大野の地下水を蘇生させる総合的プランの提言 (津郷 勇)

福井県大野盆地の地下水環境は、1955 年頃からの開発によってその涵養源が破壊され、1985 年からは小規模ながら化学物質による汚染も始まり、その対応に迫られている。しかし、その具体策をめぐり、住民と行政の間には意見の一致をみていない。

当プロジェクトでは、市民・行政・専門家三者の協力の下、これまでの資料を整理しながら、さらに必要な調査・研究 (飲料水の確保、生活・農業排出の処理、湧水の枯渇対策など) を実施し、これに基づく総合的なプランを提言することとしている。

6. 市民公共セクターの担い手のための実験的・研修プログラムづくり (早瀬 昇)

わが国でも、市民社会を形成していくうえで、市民を主体とした公共活動の果たす役割の大きさが、近年注目され始めている。同時に、その専従スタッフの未成熟さがそうした活動の伸び悩みの一因であることも意識されるようになってきた。

当プロジェクトでは、市民活動団体の専従スタッフを対象とした体系的な「研修プログラム」の創出をねらいに、そのための実験的試みを行うこととしている。同時に、これらの試みを通して、この種の団体の支援を目的とする機関開設の可能性なども模索する予定としている。

7. 米国市民活動の日本向け情報誌“GAIN”の発行と同誌をテキストにした連続セミナーの開催 (柏木 宏)

アメリカでは、多様な民族的・文化的背景をもつ人々が平等に生きていくための取組みや、成熟した市民社会における消費者や生産者、生活者としてのユニークかつ影響力のある運動が広がっており、こうした運動が、今後の日本社会に示唆するところは大きいと考えられる。

当プロジェクトでは、こうした運動をはじめとしたアメリカのグラスルーツの動きを日本語で伝えるための情報誌“GAIN”を発行するとともに、同誌をテキストとしたセミナーを定期的に開催(東京と大阪)していこうとする計画である。

8. 日本の HIV 感染者が必要とする情報の収集と提供 (井上 洋士)

エイズの発症に関連して、HIV 感染についての事の重大さはしだいに認識されてきているとはいえ、感染性に対する基本的な誤解などは依然として根深く、そのため、感染者への社会一般の援助活動は遅れがちである。

当プロジェクトは、感染者の生活や医療についての最新情報を国内外から広く収集して翻訳、医療チェックを行い、ライブラリーとして整えることにより資料閲覧に応じられる体制をつくとともに、特に重要な情報を、ボランティアやさまざまな機会を通して、感染者をはじめ広範囲の人々に積極的に提供しようとするものである。

9. 市民参加で検証するふるさとの海の現状と未来への展望 (中村 勝彦)

日本の近海では、特にこの 30 年の間に、さまざまな開発に伴う埋め立てや水質汚染の影響などによる環境変化が、全国各地で進行しつつある。

当プロジェクトは、全国各地で進行する海浜環境の悪化の一例として、佐賀県唐津湾を対象に、海岸線の変遷の分析と人工海浜の調査を行い、自然と人間との共存のあり方を考えることを目的としている。また、これらを基に、より自然に近い人工海浜づくりに向けた検討なども行う予定としている。

10. 「筑摩工芸研究所の活動」に関する記録の出版

(新井 俊雄)

障害者のための民間の作業所として 1981 年に発足した同研究所では、さまざまな障害をもった人々がそれぞれの家庭から通いながら仕事を行っている。ここでは、おのおの障害に合わせて仕事ができるよう職種の開拓を進めるなかで、多くの市民の支援を得てきた。

当出版は、その 13 年間に及ぶ活動の経緯や事例を紹介しながら、自らの今後の方向性などを展望することにより、共生社会のあり方に向けた 1 つの指針を提供することを企図している。

11. チェルノブイリ原発事故被災地における治療対策のための市民報告会と専門家会議の開催 (鎌田 實)

日本チェルノブイリ連帯基金では、1991 年 1 月以来、19 回にわたって「チェルノブイリ原発事故」による被災地を訪れ、現実的な支援活動を展開する一方、専門家による医学的・物理学的調査をも実施してきた。

当プロジェクトでは、一昨年度の助成結果も含み、これまで 3 年間にわたる調査や支援活動の成果を、被災地域に還元することを目的とした報告会を開催することとしている。併せて、現地の科学者といっしょに専門家会議も行うことにより、被災者への実効的な治療対策を提供する予定である。

12. 北海道における女性の人権侵害に関する実態調査

(近藤 恵子)

北海道在住の女性たち、特に外国人女性の直面する人権侵害の実態は多様かつ深刻なもので、ジェルター増設を柱とした救済・支援の組織づくりが急がれている。

当プロジェクトでは、道内の日本人女性労働の実態はもとより、農村花嫁、風俗営業等に従事する外国人女性労働、観光地における外国人女性労働、および、これらに対する具体的救済措置に関する実態についての調査を実施し、関係行政機関へ提言するための報告書を作成する予定である。また、同報告書は 1995 年に開催される「北京国際女性会議」へも提出することとしている。

13. 東アジアの渡り鳥フライウェイにおける湿地保護のための NGO ネットワーキング (鈴木 マギー)

干潟や湿地の開発によって、鳥をはじめとする多くの生物が絶滅の危機にさらされている。なかでも、渡り鳥の保護については、飛行経路に基づく湿地帯の保全が必要であり、開発の波が著しい中国、朝鮮半島など東アジアの NGO との協力関係は緊急を要するものがある。

当プロジェクトは、東ロシアを含む東アジア NGO との国際シンポジウムを実施することにより、不足していた情報の集積とネットワークづくりを促進することをねらいとしている。同時に、当該諸国の関係者等との連携も図ることとしている。

14. アフリカの開発に関わる NGO と研究者を中心とした市民ネットワークづくり (尾関 葉子)

累積債務、慢性的飢餓、環境破壊、等々、アフリカの状況は 1990 年代に入っても一向に改善されず、むしろ悪化の傾向にある。このような状況下、さまざまな活動を通してアフリカに対する世論を喚起し、将来に向けての市民レベルの協力体制を形成していくことを目的に同協議会は結成された。

当プロジェクトでは、そうした協力活動を適正に実施していくための基礎となる、日本国内での関係者・関係機関との有効なネットワークを構築していくための試みを積極的に展開することとしている。

15. 日独下町のまちづくりに関する市民活動と行政対応の比較 (山田 勝巳)

近年、まちづくりに関する市民活動がさまざまな成果を上げており、都市計画のパラダイム・シフトの下、改めて市民活動とその公的支援のあり方が問われている。

当プロジェクトは、ドイツで最も市民活動の活発な地区として知られ、新たな共同居住のあり方を模索しているハンブルクの下町・オッテンゼンと、伝統的な地域社会システムを残しつつ、住民を主体とした新たなまちづくりを進めている東京の下町・向島を対象に、双方の市民活動とその行政対応を比較し、わが国における今後の市民活動とその公的支援のあり方を考察する予定である。

16. 山形県に激増する外国人花嫁への支援事業に関する基盤整備 (武田 節子)

近年の農村地域では、農業の不振、過疎化、農家の「嫁不足」などを背景に、いわゆる「外国人花嫁」が急増しつつあるが、同時に、これに伴うさまざまな問題も表面化してきている。

当プロジェクトは、毎年増え続ける山形県内の外国人花嫁を対象に、これまでの助成によって整備・充実してきた「日本語教室」や「外国人医療情報センター」のレベル・アップを図るとともに、ボランティアの養成や専門家との連携をさらに強化・拡充していくことを主眼としている。

17. HIV 感染者・AIDS 患者のニーズに応えられる医療ネットワークづくり (池上 千寿子)

現在、PWA (HIV 感染者および AIDS 患者) の受入医療機関は、一部の「専門医療機関」に限定されており、身近な地域医療機関で受診できる機会はきわめて少ない。そのため、彼らは経済的にも、心理的にも大きな負担を強いられている。

当プロジェクトでは、AIDS 医療に経験のある専門医や医療機関と一般開業医が PWA 診療のための医療ネットワークをつくることで、彼らの多様なニーズに応じた医療サービスを提供することに役立つ試みを行うこととしている。

18. 「SVA15 年の歩み」に関する記録の作成

(松永 然道)

SVA=曹洞宗国際ボランティア会は、1980 年に発足以来、タイ、カンボジア、ラオスの 3 か国を中心に、現地の人々の自立を支援することを目的に、教育や人材育成を主体としたさまざまな分野で活動を展開している。

当プロジェクトは、同会の 15 周年を迎えるにあたり、これまでの活動のすべてを記録保存すると同時に総括も行い、今後の展望を切り開く契機とする活動記録を作成する予定である。これにより、NGO の行うプロジェクトおよび NGO そのもののあり方をみつめるための 1 つの視点を提供することも併せてねらいとしている。

19. 多角的市民ネットワークを通じての、日本-カンボジアのパートナーシップの形成と実践 (熊岡 路矢)

20年ぶりに「和平」を獲得したカンボジアは、多くの深刻な問題を抱えながらも、「復興」へと大きく前進しつつあり、同時に、人々は急激な社会変化に直面している。カンボジア市民フォーラムは、1980年代から、さまざまな分野で協力活動を行ってきたNGOと市民が主体となり、同国との相互理解を深め、その自立的復興への協力を主な活動目的としている。

当プロジェクトでは、「市民提言」シンポジウムの開催を通して、援助する側-される側の関係を越えた「市民協力」の可能性を追求することとしている。

III. 東南アジア関連プログラム

III-0. 東南アジア関連プログラムの概要と活動結果

東南アジア関連プログラムの概要

●国際助成の概要

国際助成プログラムは1976年度に開始され1993年度は18年目を迎えた。国際助成の対象地域は、東南アジア諸国に焦点を絞っており、関心分野は各地域の固有文化(indigenous culture)の保存と振興を目指すプロジェクト等に重点をおいている。具体的には、古文書、歴史、考古学、伝統文化、伝統建築・芸術、言語・辞書、百科事典、文学、近代化と伝統、東南アジア研究等の分野で助成をしている。

また、助成対象の選考にあたっては、以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

- ①東南アジア諸国の人々の発想になり、東南アジア諸国の人々によって行われるプロジェクトである。
- ②政府や国際機関のプロジェクトであるよりも、大学や民間のプロジェクトである。
- ③具体的な成果が期待でき、社会的なインパクトの大きいプロジェクトである。

申請は1年中受け付けるが、申請プロジェクトの具体性およびプロジェクトについての情報の多寡によって、審査に要する時間が異なる。ほとんどの申請プロジェクトについて、審査前および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問し調査を行う。継続プロジェクトであっても毎年申請が必要である。

●国際助成：マレーシア東南アジア研究奨励助成の概要

当プログラムは、1992年度より国際助成の枠内で新たに開始した。その目的は東南アジアの若手の研究者による東南アジア研究の促進を図ることを目的として、マレーシアの大学院に所属する35歳以下の東南アジアの大学院生が、修士・博士論文執筆のために自国以外の東南アジアの国・地域に関して社会・人文系分野で行う研究に助成する。

●インドネシア若手研究助成の概要

当プログラムは、1987年度から開始した。研究資金の乏しいインドネシアの社会・人文科学分野の若手研究者に、自由で独立した研究を行う機会を提供することを目的としている。その趣旨に鑑みて、対象とする研究は原則として36歳以下の若手研究者の個人研究とし(例外あり)、大学の研究者だけでなく、NGOの若手研究者、大学以外の研究機関の研究者、ジャーナリストなどにも広く門戸を解放している。このため、国際助成とは異なり一般公募制をとっている。

基本テーマとして、「固有の文化や歴史の再考」と「急激に変化する社会の学術的な分析」を掲げ、これに関連する研究テーマであれば個々の研究のテーマは問わない。選考の基準は、①発想のオリジナリティ、②研究の社会的意味、③助成金を受けるのが研究者の成長にとってよいタイミング、④ほかからの資金の得にくさ、⑤研究の実現性、の5点である。

●「隣人をよく知ろう」プログラム：日本向け翻訳出版促進助成の概要

当プログラムのねらいは、日本の人々が隣人である東南アジア・南アジア諸国の人々の文化・社会・歴史等についての認識を深めることを推進することである。そのために、東南・南アジア各国の人々が書いた文学作品や文化・社会・歴史などについて日本の一般読者へ紹介することがふさわしいと思われる本を、相手国の人々の意見を反映しつつ選び出し、それらの本の日本語版を制作するときの翻訳費、および出版経費の一部を助成する。

●「隣人をよく知ろう」プログラム：アジア相互間・翻訳出版促進助成の概要

当プログラムは、日本・東南アジア・南アジアの国々の間での相互理解を促進するために、他の国の文学作品や文化・社会・歴史についての学術書などをそれぞれの

国のことばに翻訳・出版する事業で、日本以外で実施されるものを助成する。また、日本人によるこれら地域の研究成果を還元する目的で、研究成果を研究対象となった国の言語に翻訳・出版する事業も助成対象とする。

東南アジア関連プログラムの活動結果

1. 国別レポート

●ビルマ

現在ビルマへの直接助成を行うことは不可能であるため、海外にいるビルマ人への助成を変則的に行っている。またビルマに住んでいても、近隣国の研究者が協力する場合には、その近隣国の研究者を通して助成を行うこともある。ビルマについてはこれまでもこのような形で助成を行ってきており、ビルマの状況が変化しない限り、当面は変則的な関わり方を続けるしかないようである。

本年度は、1件のプロジェクトが助成対象となった。「コンバウン中期(1782~1846年)のビルマ農村社会の社会経済状態」のプロジェクトを行うウー・トゥン・イーは日本に住むビルマ人である。この時代のビルマの農村社会についての史料は少ないが、そのような文書は貝葉文献の形でビルマ各地に散らばっている。そのなかにはすでにマイクロフィルムに収集されているものもある。本研究はこれらの文献を日本人の研究者と協力して収集し、コンピュータ・データベースに入力し、英文の概要をつけて、編纂・出版することを目的としている。これまでの東南アジアの歴史研究で抜けていた植民地化される前の社会、さらにはその文化的ダイナミズムを知るうえで大きな手がかりとなる文献は貴重であり、東南アジア史研究の新しい流れに役立つ史料である。

●カンボジア

カンボジアへの助成は、1992年に開始され、本年度で2年目となる。本年は4件が助成対象となったが、そのうち2件は辞書の出版である。カンボジアでは、ポル・ポト政権による知識人弾圧、書物の廃棄によってそれまでに出版されていた本がまったくなくなり、今日、厳しい書物の欠乏の状況が続いている。そこで、ポル・ポト以

前に出版された本の復刻、および新しい本の出版が緊急のニーズとなっている。

辞書のうち1点は、ポル・ポト以前(1962年)に、プノンペンにある仏教研究所から編纂・出版されたパーリ語クメール語辞書の再版である。全国の寺や学校に配布される予定である。もう1冊は、フランス在住のカンボジア人知識人が設立した研究所の発行する古代クメール語辞書である。現在、この研究所はプノンペンに移っている。

本年度で2年目となるケオ・ナロム(芸術大学)の研究は、各地でさまざまな機会に行われる民族音楽を記録しようとするものである。内戦によって、地域コミュニティが破壊され、民衆のなかに生きていた音楽は、断絶と消滅の危険性をはらんでいる。カンボジア文化のなかで音楽や舞踊の占める意味は大きく、急いで記録する必要がある。

プノンペン大学のソーン・サムナンの研究は、博士論文執筆を目的とするものである。サムナンは将来のカンボジアの歴史学を担っていく立場にあり、大きな期待がかかっている。

●インドネシア

インドネシアではその社会の状況に照らし合わせて、国際助成の基本テーマを、多様な文化のおのおのを尊重しつつ国全体をまとめるインドネシア文化を創り出していくかがあると解釈し、そのなかでも特に軽視されがちな地方文化や地方史の研究への助成を重視してきた。

今年度新規の研究では、先住民文化の文化人類学的研究として、エリサ R.の「マルク諸島タリアブ島のマゲイ族の農耕文化」、アフマッド R.の「南スマトラの未開部族クブ族の民俗誌研究」、そしてムディヨノの「西カリマンタン、サンガオ県のリブン・ダヤック族の伝統医療にみられる知識体系」の3件がある。地元の研究者でなければ実施できない研究として成果が期待される。

地方史研究では、バンバン P.の「南スマトラの鉱業史」、そしてスダルトの「シンカワンの伝統陶器：その歴史と文化遺産としての意味」がある。前者は、同研究者が将来南スマトラの包括的な経済史を執筆するための一

環として行われる意欲的な研究である。また後者は、ほとんど研究されていないポンティアナックを中心とした西カリマンタン州の歴史を、そこで製作されてきた陶器に焦点をあてて解明しようというものである。

また、上記のような文化や歴史の研究に欠かせない史・資料の集成にも重点をおいており、継続研究では、ヘリウス S.の「ビマ文化の保存：ビマ年代記、テキストおよび口承伝統の翻字と翻訳」やI.G.N.R.ミルシャの「バリの貝葉文献のマイクロフィルム撮影」がある。今年度の特徴としては、古文書のみでなく、新たに大衆演劇などの現代社会の文化的様相の記録・研究も加わった点が挙げられる。プティ S.の「クトプラック：現代ジャワにおける過去の政治学」やウマル K.の「現代ワヤン芝居：ジャワにおけるその発展と分布」である。

さらに、急激な開発がもたらすひずみが大きな社会問題となっていることに鑑み、近代化のなかでの伝統文化の変容過程、近代化への文化的、社会的対応も重点テーマとしている。ムハマド G.I.の「プサントレンの指導者：アチェにおける伝統と近代のはざままで」などがある。

助成対象者の所在地は8都市にわたり、新たにポンティアナックとパレンバンが加わった。

インドネシア若手研究助成は、1987年度から開始したがほぼ毎年申請件数が増えてきている。本年度は、ジャカルタにある社会科学財団のなかに当プログラムのリエゾン・デスクを設けたため、申請件数はさらに増えて1,144件（昨年度815件）となった。

本年度の助成対象となった研究のなかで、最近インドネシアで問題となっている労働争議などを含む労働問題の研究、また開発における女性の問題をテーマとするものが目立った。

なお、本年度の助成対象者の中間報告会と前年度の助成対象者の最終報告会が、インドネシアのボゴールで開催された。

●ラオス

ラオスでは、ここ数年間継続してきたいくつかのプロジェクトが完了する。第1に、情報文化省のダラ・カンラニヤを代表とする貝葉文献の目録作成である。ラオス

の数多くの寺に残されている貝葉文献を調査し目録づくりを行う当プロジェクトは、情報文化省としても全国規模のプロジェクトとして、大きな社会的インパクトを与えてきた。調査と同時に、僧や村人に貝葉文献の重要性を訴え、一部の寺では村人の募金によって貝葉文献の保存箱がつくられるなど、コミュニティからも好意的に迎えられている。ラオスでは、伝統的に寺がコミュニティの文化的活動の中心の役割を果たしてきたが、その機能が昨今では見失われてきていた。しかし、このプロジェクトによって見直す気運が出てきている。当プロジェクトは、タイのチェンマイ大学が中心となった北タイの貝葉文献の記録・保存・研究をモデルとしており、チェンマイ大学の協力も得て行われた。今後は、ドイツ政府の援助によって、貝葉文献のマイクロフィルム撮影が行われることになっている。

貝葉文献の目録づくりに合わせて、貝葉文献のなかから慣習法に関する文献を現代ラオ語に翻字して出版するサムリット・プアシスヴァのプロジェクトも3年目を迎え、すでに3冊の本が貝葉文献からおこされて出版されている。そのうちの1冊は、法律学校での教材に使われるなど活用され始めている。ラオスでの本の出版はきわめて少なく、ラオスの伝統文化の蓄積である貝葉文献をソースとしたラオス固有の内容の出版物が今後とも多く出版されることが必要である。

マハ・カンパンのクメール語ーラオ語辞書の編纂も最終段階を迎えている。今年度は、東京外国語大学の峰岸真琴氏を中心とするグループによるクメール語とラオ語のバイリンガルのパソコンプログラムが完成する予定である。これによって、辞書の印刷が飛躍的に正確かつ容易になることが期待される。このソフトウェアは、当プロジェクトのみならず今後幅広くラオスとカンボジアで利用されると思われる。

情報文化省のネン・サイヴァンのフモン族の伝説・民話・歌謡の収集と出版はラオスの若手の仕事として期待される。フモン族出身のネンによる本は、ラオ語、フモン語で出版される。フモン族の人々のため、またラオ人のフモン族理解のため役立つ本となると思われる。

●マレーシア

マレー系、中国系、インド系などの民族からなる複合民族国家であるマレーシアでは、固有文化の保存に関するテーマはネイション・ビルディングに微妙な影響を与えることから非常に慎重な取組みがなされている。したがって当財団でも国際助成のテーマを人文・社会科学の分野全般の研究へと広げて助成を行ってきた。しかし、マレーシア国内を対象とした研究への助成は、国内で充実していることから当財団の助成件数は他の東南アジアの国々への助成件数と比較してあまり多くはない。

そのような状況のなかで今年度は、アブドゥラー Z. b. G. の「マレー文書」とアブ・ハサン M. S. の「マレー古典文学に登場する外国人のビブリオグラフィ」が助成対象となった。前者は、これまでタイやインドネシアなどで助成を行ってきたプロジェクトと同様のもので、マレーシア各地に散逸している古文書の所在を確認し、カタログを作成してマイクロフィルム撮影を行おうというものである。マレーシアでは個人所有の文献を対象としたものは実施されてこなかったため、このプロジェクトを契機に古文書への関心が高まることが期待される。

一方、マレーシアは地理的に東南アジアのほぼ中央に位置するため他の東南アジア諸国への関心が高いにもかかわらず、そのような研究への助成が国内では獲得しにくい状況にある。そこで、マレーシア以外の東南アジア諸国の研究、および他の東南アジア諸国との共同研究などへの助成を積極的に行う方針をこの3~4年とってきた。今年度もタン S. B. の「東南アジアの学校および高等教育機関での音楽のプロセス」およびモハマド・ラドゥアンの「スルー海の漁業」が助成対象となった。

このような東南アジア研究の促進の一環としてマレーシアでは1992年度より東南アジア研究奨励助成を実施している。今年度は、マレーシア人以外に、フィリピン、インドネシア、ヴェトナムからの留学生も助成対象となった。

過去10年間の助成はクアラルンプール在住の研究者であったが、今年度はペナンの研究者も助成対象となり、マレーシアでの東南アジア研究への助成の展開においても今後重要な位置を占めていくことが期待される。

●フィリピン

フィリピンでは地方史をフィリピン人の視点から書くという気運が高まっているため、地方史の研究、また地方史研究の基盤整備が1つのプライオリティとなっている。また、いままであまり知られていない地方文化を国レベルで紹介し、共有するというプロセスへの助成も重視している。さらに、フィリピンの伝統的体質と現在の社会体制の関係についての研究が新しく試みられている。また、東南アジアの他の国との比較研究や東南アジア全体に発展できるようなテーマを扱う研究も近年少しずつではあるが増えている。

地方史の分野において M. R. タワゴンによる「モロとフィリピンのナショナリズム：歴史学的検討」のプロジェクトは、スペインに植民地化されることのなかったモロ（イスラム化された民族）がフィリピンの歴史に果たした役割を、モロ自身の視点から歴史的に分析しようとするものである。

E. K. アルブーロによる「ヴィサヤ3言語の文学・学術用語辞書」のプロジェクトはセブアノ語、ワライ語（レイテ・サマー）、ヒリガイノン語の文学評論を行う道具としての辞書を編纂する。過去20年フィリピンでは地方文学の研究が盛んになったが、文学について語る固有の語彙が使われないため、思想のパターンや情緒がゆがめられている。この辞書によって、ヴィサヤの美学を再構築しようという試みである。

東南アジアとの比較研究の分野では M. S. I. ジョクノによる「輸出経済における外資会社の役割：1920年から1949年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して」のプロジェクトで、植民地の輸出経済の発展に外資会社が果たした役割を比較研究している。東南アジアを1つの地域としてみる視野から行われる研究である。さらに E. T. クリャマールの「フィリピン人のディアスポラ：移住とインドネシア北部への定住」ではインドネシア北部に住んでいるフィリピン人を調査して、民族の流れに関して歴史的に探求するものである。ディアスポラは近年移民から定着した少数エスニック・グループで、祖国と情動的、物質的につながりをもつ人々を意味するようになったことばである。

東南アジア全体に発展できるようなテーマの研究としては、S.D.マヒウォによる「生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イフガオ族のライス・テラスの事例」のプロジェクトがある。イフガオ族のライス・テラスは、人間の物質的および非物質的側面を混合した希有な生きている文化遺産である。人間とその環境の相互関係を、理性的・社会的・精神的存在である人間と自然の要素との相互作用を研究することにより、理解しようとする試みである。本研究者はイフガオ族の精神的指導者の家に生まれ、彼らの世界観を熟知しているが、内部の者の視点からの研究はまれである。また、ライス・テラスは東南アジア各地にみられるもので、将来それらの比較・共同研究に発展する可能性も秘めている。

●タイ

1978～84年の間、国際助成はタイにおける固有文化の保存と振興に重点をおいて行われた。これ以降、助成対象国が多様化した。タイにおいては現在、第2段階を迎えていると考え、タイの文化と近隣諸国の文化とのつながりを考えるという、国際的な広がりをもつプロジェクトを重視している。

ソンサク P.による「タイ・ルー族の織物の比較研究」のプロジェクトでは、タイ、ラオス、ビルマに住んでいるタイ・ルー族の織物がタイ・ルー社会でどのような役割を果たしているかについて記録し、すべて失われてしまう前に織物の識別をすることを目的としている。現在、アンティークの織物はどんどん外国へ売られてしまっている状況のなかで、そのデザイン、パターン、技術の保存の一助となることをねらっている。同時にプロジェクトに協力しているラオスの研究者の養成も行う。

ナロン T.が代表となっている「チャオ・プラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の状況と歴史的発展」のプロジェクトは、タイとヴェトナムの研究者の比較・共同研究を行うという、意欲的な試みであるが、特にヴェトナムでのフィールド調査をめぐって、初期の段階で問題に直面している。しかし、たとえこのプロジェクトが当初の目的を果たせなかったとしても、国際共同研究の問題点を提示してくれるものと思われる。

●ヴェトナム

1985年から助成を開始したヴェトナムは、以降着実に助成件数、金額ともに増え、国際助成における1つの中心的な対象国になっている。当初は社会科学院傘下の研究所のプロジェクトへの助成のみであったが、徐々に大学やその他の研究機関への助成も増やしてきた。近年は、地方の研究者への助成、および新しい分野の研究への助成を手がけつつある。

地方展開としては、1992年度から中部ヴェトナムのダナンとフエの研究機関への助成を開始したことが挙げられる。本年度の23件の助成のうち、8件が中部の研究者への助成である。中部地方は、サーフィン遺跡などの先史文化、東南アジアの有力な古代王国の1つであるチャンパ、最後のヴェトナム統一王朝の阮朝の中心地であり、また中部高地には多くの少数民族が居住し、歴史的にも今日的にも豊かな文化をもった地域である。一例を挙げれば、ダナン近くの古い港町ホイアンでのサーフィン遺跡の発掘への助成を行った。この地域が古代チャンパ王国の中心であった8世紀頃から、ホイアンは東南アジアでも有力な港湾都市であったが、それより古く紀元前から大型の甕棺で知られるサーフィン文化が知られている。今年度の試験的発掘では、初めて人骨が発見されるなど成果が出ており、サーフィン文化と後に続くチャンパとの関連など多くの学術的問題に一定の貢献が期待されている。

新しい傾向の研究としては、ホーチミン市社会科学研究所女性研究センターのブイ・ティ・キム・タイの女性労働者の研究と、社会経済地理研究センターのグエン・ゴック・トゥアンの研究が挙げられる。前者はホーチミン市を中心とする南ヴェトナムの女性の雇用機会創出のための前提となる女性労働者の実情調査である。後者は、少数民族が多く居住する地域での環境保全と社会経済発展のモデルづくりを目指した研究である。いずれも、市場経済化に伴って生じた新しいタイプの社会問題に対して、新しい方法論と概念を用いて政策提言につながる研究成果を目指している。ヴェトナムでは、従来と異なる新しい方法論と概念を用いた研究を幅広く進めていく必要がある、こうした傾向の研究が今後も増えていくと思

われる。

●その他（南アジア）

南アジア（バングラデシュ、インド、ネパール、パキスタン、スリランカ）では、主として「隣人をよく知ろう」プログラム・アジア相互間の活動を行っている。ネパールとスリランカでは国際助成のプロジェクトを若干助成してきたが、本年度は国際助成の対象はない。

「隣人をよく知ろう」プログラムの活動は、ネパール（1984年）とスリランカ（1985年）でほかより早い時期から開始したが、バングラデシュ、インド、パキスタンでは1990年から開始された。1993年末までに、バングラデシュ3冊、インド6冊、ネパール41冊、パキスタン2冊、スリランカ4冊が翻訳出版されている。

本年度の特徴としては、バングラデシュとパキスタンで、インドネシアの作家モフタル・ルビスの作品各1点が翻訳出版されることが挙げられる。今後とも、こうした東南アジアの作品を南アジアに紹介する活動、あるいはその逆を進めていくことが考えられる。

もう1点挙げれば、パキスタンとスリランカで日本の絵本の翻訳を開始したことである。これは1991年にインドのNational Book Trustの日本の絵本の翻訳出版に助成したのに続くものである。子ども向けの本のニーズは国を問わず高く、この分野での取組みも今後も必要と思われる。一方で、従来から中心としてきた日本の文学や社会・経済・歴史についての関心も高く、この分野についても続けていく必要が感じられる。

2. 1993(平成5)年度その他の活動

●第2回国際助成研究報告会

第2回国際助成研究報告会が、1993年11月1～2日にジャカルタのインドネシア科学院で開催された。国際助成研究報告会は、国際助成プログラムの助成対象プロジェクトの成果発表の機会を提供し、また助成対象者間の交流を促進し、あわせて同プログラムの評価を行うことを目的に、3年に1回開催され、第1回の報告会は1990年にバンコクで開催された。この第1回報告会で東南アジアを1つの地域としてみる研究の重要性が指摘

され、今回はその指摘を受けて、助成対象のなかでも東南アジア研究をいっそう促進するアイディアを提供するようなプロジェクトを選んで成果発表の機会を提供した。また、当財団が助成したインドネシア科学院主催の国際会議「東南アジアにおける東南アジア研究の促進」も引き続き開催され、両会議の出席者の交流も行われた。

第1日目は、東南アジアに国境を越えて広がる固有文化に焦点をあてた研究の発表が行われた。それらは、チェンマイ大学のシャラチャイ・ラミッタノン教授による「北タイ、ビルマのシャン州およびインドのアッサム州のタイ語族の文化・社会の国境を越えた共同研究から得た経験と感想」、ラオスの情報文化省文学部長のトンカム・オネマニソン博士の「ラム・シタンドン歌謡の研究」、フィリピン大学アジアセンターのシルヴァノ・D・マヒウォ助教授による「生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イフガオ族の棚田の事例」、そしてヴェトナム国立社会人文科学センター民族学研究所研究員のファム・クアン・ホアン博士による「共同体結合の観点からみたヴェトナムのフモン族の固有の宗教信仰」であった。

2日目は、外来文化がどのように東南アジア地域に広まっていったかをテーマとした研究の発表が行われた。インドネシア科学院社会文化研究センター上級研究員のタウフィック・アブドゥラー博士の「もし歴史と布教が分類できるならば：東南アジアのイスラム」、マレーシアの歴史学者オマール・ファルク・バジュニド博士の「東南アジアにおけるアラブ人の役割：概観」、およびホーチミン市社会科学研究所所長のマック・ズオン博士の「開発過程におけるホーチミン市と華人」である。各発表後質疑応答があり、最後に包括的な討論が行われた。

討論のなかから東南アジア研究を行う視点として、以下の2つが炙り出されてきた。

- ①東南アジアを現在の各国の国境内に限定して研究することは、国境を越えて自由に往来する人々が存在している現実を見失うことになる。研究者は、東南アジアを1つの地域としてみる視点で研究する必要がある。
- ②東南アジアは政治的に分断され、特に冷戦終結後、

それまでほとんど交流のなかった資本主義経済圏と共産主義体制圏の相互交流も盛んになりつつあり、東南アジア諸国間でお互いを研究し、相互理解を促進すべきである。

今後の東南アジア研究の発展に寄与する種が当報告会の研究発表のなかに多く確認されたが、東南アジアにおける東南アジア研究がより効果的に進展するよう、研究基盤整備を中心とした10年計画を策定する提案がこの報告会を契機に提出され、計画助成での助成が決定した。

●「隣人をよく知ろう」プログラム、「メセナ大賞'93」の「メセナ特別賞」を受賞

トヨタ財団の「隣人をよく知ろう」プログラムが、企業メセナ協議会が主催している1993年度の「メセナ大賞」の「メセナ特別賞」を受賞した。このメセナ大賞は、企業・企業財団の優れた芸術・文化支援活動に対して贈

られるもので、1991年に創設され、1993年度で3回目となる。1993年度は、全国各地の110の企業・企業財団から寄せられた145件の芸術・文化支援活動の案件の中から、9件のメセナ賞、3件のメセナ特別賞、1件のメセナ大賞が選ばれた。

「日本向け」は、1978年から開始され146冊がすでに翻訳出版されている。また、「アジア相互間」は1982年度から開始され、229冊の日本やアジアの隣国の本が各国で翻訳出版されている。今回の受賞は、こうした地味で息の長い活動が評価されたものである。

今回の受賞を記念して、近年急増している在日のアジアの人々を支援している機関・グループを対象として、「隣人をよく知ろう」プログラムの助成を受けて翻訳出版された図書を寄贈することとした。地方の国際交流協会、市民グループなどからの応募27件があり、選考の結果27件、総額100万円分の図書を寄贈した。

III- 1. 国際助成

(継 2)：継続 2 年目
 (継 3)：継続 3 年目
 (継 4)：継続 4 年目
 (継 5)：継続 5 年目
 (継 6)：継続 6 年目
 (継 8)：継続 8 年目

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
1	コンバウン中期 (1782 年-1846 年) のビルマ農村社会の社会経済状態 ウー・トゥン・イー 愛知大学大学院 客員研究員 (ビルマ)	17,200
2 (継 2)	音楽とクメール人の生活 K. ナロム 芸術大学 教員 (カンボジア)	9,000
3 (継 2)	パーリ語クメール語辞書の再版と配布 O. ケム 仏教研究所 所長 (カンボジア)	25,000
4	両世界大戦間 (1919 年-1940 年) のカンボジア社会の発展 S. サムナン プノンペン大学歴史学部 学部長 (カンボジア)	7,000
5	古クメール語辞書の出版 N. ナラン クメール文明ドキュメンテーション・研究センター 所長 (カンボジア)	21,000
6 (継 4)	『スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培とブスキのブスキ・タバコ栽培：その地域社会への影響, 1860-1960 年』の出版 スギヤント P. ガジャマダ大学文学部歴史学科 講師 (インドネシア)	5,000
7 (継 2)	西ジャワ, タゲランのチプタット地域の宗教・社会変化に関する研究 アミヌディン R. シャリフ・ヒダヤトゥラ国立イスラム高等学院 講師 (インドネシア)	2,500
8 (継 2)	ビマ文化の保存：ビマ年代記, テキストおよび口承伝統の翻字と翻訳 ヘリウス S. バンドゥン教育大学社会教育学部歴史学科 上級講師 (インドネシア)	8,000
9 (継 4)	スンダ文化百科事典 アイップ R. 作家 (インドネシア)	4,600
10 (継 2)	バリの貝葉文献ロンタルのマイクロフィルム撮影 I.G.N.R. ミルシャ バリ州立バリ文化記録局 局長 (インドネシア)	9,900

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
11	バリのクレジット組織の発展：1859-1937年	
(継2)	I.B. シデマン ウタヤナ大学文学部歴史学科 講師 (インドネシア)	2,600
12	インドネシアの老人のライフスタイルと生きがいに関する研究	
(継2)	クンチャラニングラット インドネシア大学社会人類学 名誉教授 (インドネシア)	27,000
13	フローレスの地方語 (リオ語, シッカ語, ンガダ語) の機能	
(継3)	アロン M. ムベテ ウタヤナ大学文学部 講師 (インドネシア)	3,900
14	歴史ジャーナル『歴史：思想, 再構築, 認識』の発行	
(継2)	イブス Q. インドネシア科学院 研究員 (インドネシア)	3,900
15	マルク諸島タリアブ島のマゲイ族の農耕 (バセル) 文化	
	エリサ R. パティムラ大学教育学部 講師 (インドネシア)	4,100
16	プサントレンの指導者：アチェにおける伝統と近代のはざま	
	ムハマド G.I. シャクアラ大学教育学部歴史学科 講師 (インドネシア)	3,900
17	クトブラック：現代ジャワにおける過去の政治学	
	ブディ S. リアリノ研究所 所長 (インドネシア)	7,500
18	南スマトラの未開部族クブ族の民俗誌研究	
	A. ロムサン スリウィジャヤ大学調査センター 社会文化調査プログラム主任 (インドネシア)	7,400
19	インドネシア語の語彙アクセントとそのスピーチ上の実現	
	ラハユ S.H. インドネシア大学調査研究所人文社会科学センター 研究員 (インドネシア)	5,600
20	南スマトラの鉱業史 1890年-1940年	
	バンバン P. ガジャマダ大学文学部歴史学科 講師 (インドネシア)	3,300
21	現代ワヤン芝居：ジャワにおけるその発展と分布	
	ウマル K. ガジャマダ大学文化研究センター 所長 (インドネシア)	6,000
22	西カリマンタン, サンガオ県のリブン・ダヤック族の伝統医療にみられる知識体系	
	ムディヨノ タンジュンプラ大学社会政治学部 教授 (インドネシア)	7,000

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
23	スンダ貴族メナックに対する西欧教育のインパクト ロフィアティ W. バンドゥン教育大学社会教育学部歴史学科 講師 (インドネシア)	4,700
24	シンカワンの伝統陶器：その歴史と文化遺産としての意味 スタルト ポンティアナク教育高等学院 上級講師 (インドネシア)	4,000
25 (継 2)	ラム・シタンドン歌謡の研究 トンカム O. 情報文化省文学局 局長 (ラオス)	11,700
26 (継 3)	ラオ慣習法貝葉文献の翻字 サムリット B. 情報文化省ワンナシン雑誌 顧問 (ラオス)	8,700
27 (継 5)	カンボジア語ーラオ語辞書の編纂 マハ・カンパン V. カンボジア語ーラオ語辞書編纂委員会 委員長 (ラオス)	70,800
28 (継 2)	民話, 格言, 歌謡にみられるフモン族の伝統の研究 ネン X. 情報文化省ワンナシン雑誌 副編集長 (ラオス)	4,700
29 (継 6)	貝葉文献のインヴェントリー作成 ダラ K. 情報文化省ワンナシン雑誌 所長 (ラオス)	39,500
30	東南アジアの学校および高等教育機関での音楽教授のプロセス タン S.B. マレーシア科学大学芸術センター 所長 (マレーシア)	15,100
31	マレー古典文学に登場する外国人のビブリオグラフィー アブ・ハサン M.S. マラヤ大学人文社会科学部マレー研究学科 助教授 (マレーシア)	5,600
32	スルー海の漁業 モハマド・ラドゥアン M.A. マラヤ大学人文社会科学部東南アジア研究学科 助教授 (マレーシア)	10,500
33	マレー文書 アブドゥラー Z.b.G. マラヤ大学マレー研究アカデミー 助教授 (マレーシア)	18,600
34 (継 2)	イロイロ州の 20 世紀の経済史 H.F. フンテッチャ フィリピン大学ヴィサヤ校西ヴィサヤ研究センター 所長 (フィリピン)	5,300

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
35 (継 5)	スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査, 翻字, 翻訳, 出版 V.B. リクアナン フィリピン歴史文化保存ナショナル・トラスト 副会長 (フィリピン)	18,700
36 (継 3)	エリオ・コレクション: ミサミス・オリエンタルの地方史のための資料 F.R. デメトリオ セイヴィヤー大学博物館 館長 (フィリピン)	16,400
37 (継 2)	マギンダナオ族の慣習と信仰 E.R. デイツマ ミンダナオ州立大学社会・人文学部 準教授 (フィリピン)	3,000
38 (継 2)	輸出経済における外資会社の役割: 1920年から1949年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して M.S.I. ジョクノ フィリピン大学社会科学・哲学学部歴史学科 準教授 (フィリピン)	12,700
39 (継 4)	フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査 M.B.D. アランパイ デ・ラ・サル大学歴史学部 準教授 (フィリピン)	11,700
40 (継 4)	フィリピンのイスラム芸術と建築: 土着と現代 R.N. カニエータ ミンダナオ研究所 ディレクター (フィリピン)	2,700
41 (継 4)	ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習 H.K. グロリア アテネオ・デ・ダバオ大学社会科学部歴史学科 教授 (フィリピン)	900
42 (継 3)	モロランドの20世紀の民族史 F.V. マグダレーナ ミンダナオ州立大学マミトゥア・サベール研究センター 所長 (フィリピン)	12,800
43 (継 8)	フィリピン諸語辞書 E. コンスタンティーノ フィリピン大学社会科学・哲学学部言語学科 教授 (フィリピン)	4,600
44 (継 3)	生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ: イフガオ族のライス・テラスの事例 S.D. マヒウォ フィリピン大学アジア研究所 準教授 (フィリピン)	14,700
45 (継 2)	ヒガンテス島の民族誌: 人間活動のシステムとエコロジカル・セル C.N. ザヤス フィリピン大学社会科学・哲学学部人類学科 助教授 (フィリピン)	11,900
46	アルシーナ文献(ヴィサヤ地方についての歴史書)の現代表記への書き換え, 翻訳, 注釈作成, 出版 R.B. ハヴェリャーナ アテネオ・デ・マニラ大学文理学部コミュニケーション学科 講師(フィリピン)	18,400

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
47	ヴィサヤ 3 言語の文学・芸術用語辞書 E.K. アルブーロ サンカルロス大学セブアノ研究センター 研究員 (フィリピン)	6,700
48	モロとフィリピンのナショナリズム：歴史学的検討 M.R. タワゴン ミンダナオ州立大学歴史学科 教授 (フィリピン)	2,300
49	フィリピン憲法の発展, 1935 年—1987 年：歴史と法的注釈 J.G. バルナス アテネオ・デ・マニラ大学法学部 教授 (フィリピン)	8,000
50	フィリピン南部のモロの人々の土地利用, 資源利用の固有のパターン M.L. フィアンザ ミンダナオ州立大学 助教授 (フィリピン)	11,900
51	フィリピン人のディアスポラ：移住とインドネシア北部への定住 E.T. クリヤマール アテネオ・デ・マニラ大学歴史・政治学部 準教授 (フィリピン)	12,300
52 (継 3)	チェンマイ—ランブン盆地の古代集落 サラスワディー O. チェンマイ大学人文学部歴史学科 助教授 (タイ)	2,800
53 (継 2)	タイ・ルー族の織物の比較研究 ソンサク P. チェンマイ大学芸術文化センター 助教授 (タイ)	16,800
54 (継 3)	東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷 タダ S. コーンケーン大学建築学部 講師 (タイ)	20,800
55 (継 2)	ビルマにおけるタイ (シヤン) 文字の歴史と発展 サイ・カム・モン アユタヤ歴史研究センター 上級研究フェロー (タイ)	21,500
56 (継 2)	チャオ・プラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の状況と歴史的発展 ナロン T. チュラロンコン大学理学部地理学科 準教授 (タイ)	2,000
57	ヤオ族の漢字の読み書きの社会的インパクトと宗教に関する国際会議：その儀礼の起源と歴史 テラパン L.T. ヤオ研究国際協会タイ支部 実行委員会 メンバー (タイ)	7,900
58 (継 2)	ヴェトナムの編年学, 永久暦および累積暦 L.T. ラン ヴェトナム国立科学センター, システム・経営研究所 教授 (ヴェトナム)	7,900

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
59	ヴェトナムの伝統演劇, ハップボイの辞典	
(継 2)	N. ロック ホーチミン市大学文学・言語学科 学科長 (ヴェトナム)	17,200
60	フエ美術館所蔵美術品の研究とカタログの出版	
(継 2)	T.C. グエン フエ歴史的建造物保存センター 所長 (ヴェトナム)	9,200
61	カオダイ教	
(継 2)	D.N. ヴァン ヴェトナム国立社会人文科学センター-宗教研究センター 所長 (ヴェトナム)	8,500
62	大学レベルの東南アジア研究の教授カリキュラムの改善	
(継 2)	P.D. ズオン ヴェトナム国立社会人文科学センター-東南アジア研究所 所長 (ヴェトナム)	9,900
63	「国際会議：現代生活における伝統的祭」のプロシーディングスの印刷	
(継 3)	L.H. タン ヴェトナム国立社会人文科学センター 副所長 (ヴェトナム)	2,000
64	フエの伝統工芸	
(継 2)	N.H. トン フエ大学考古学・民族学科 学科長 (ヴェトナム)	5,800
65	ヴェトナムのジャーナリズムの歴史：1965年-1990年	
(継 2)	H.M. ドウック ハノイ大学ジャーナリズム学部 学部長 (ヴェトナム)	4,800
66	クアンナム・ダナン省ホイアンのサーフィン壙棺文化の考古学発掘	
(継 2)	N.D. ミン ホイアン史跡管理事務所 副所長 (ヴェトナム)	25,000
67	現代チャム語-ヴェトナム語, ヴェトナム語-現代チャム語辞書	
(継 3)	B.K. テ ホーチミン市大学ヴェトナム・東南アジア研究センター 所長 (ヴェトナム)	8,000
68	ヴェトナムのフモン族	
(継 2)	P.Q. ホアン ヴェトナム国立社会人文科学センター-民族学研究所 研究員 (ヴェトナム)	9,900
69	ヴェトナムの地簿コレクションの詳細な検討	
(継 2)	N.D. ダウ ホーチミン市社会科学委員会 メンバー (ヴェトナム)	20,700
70	ブル語-ヴェトナム語-英語辞書	
	V.H. レ フエ大学言語学科 学科長 (ヴェトナム)	4,700

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
71	ヴェトナムの文化と文明の研究への貢献：グエン・ヴァン・フエンの全作品の出版 N.D. ジェウ ヴェトナム国立社会人文科学センター出版局 局長 (ヴェトナム)	7,500
72	ヴェトナムのラグライ族の文化と社会 P.X. ビエン ヴェトナム国立社会人文科学センターホーチミン市社会科学研究所 教授 (ヴェトナム)	6,800
73	戯作者・演出家、グエン・ヒエン・ディンとクアンナム・ダナン省の伝統演劇トゥオンの発展 H.H. ホック クアンナム・ダナン省文化情報部 部長 (ヴェトナム)	7,400
74	ヴェトナムの少数民族、チュ族 N.V. マイン フェ大学歴史学部民族学科 講師 (ヴェトナム)	1,900
75	古代チャンパ王朝の芸術と文明の研究 T.K. フオン チャンパ彫刻博物館 学芸員 (ヴェトナム)	20,100
76	17世紀から1975年までの南ヴェトナムの仏教 T.H. リエン ヴェトナム国立社会人文科学センターホーチミン市社会科学研究所 研究員 (ヴェトナム)	2,800
77	北ヴェトナム中部の自然環境の再生と保護を伴いながら社会経済開発を行ういくつかの典型的モデルの構築 N.N. トゥアン ヴェトナム国立社会人文科学センター社会経済地理センター 所長代理 (ヴェトナム)	7,800
78	村神に関する文書の保存とドキュメンテーション L.V. トアン ヴェトナム国立社会人文科学センター社会科学情報研究所 所長 (ヴェトナム)	8,500
79	ホーチミン市の女性労働者の雇用問題の実情と雇用創出のためのいくつかの基本的方向性 B.T.K. クイ ヴェトナム国立社会人文科学センターホーチミン市社会科学研究所 教授 (ヴェトナム)	5,700
80	フェの民間信仰 T.D. ヴィン フェ教育大学文学部 助教授 (ヴェトナム)	3,600
	小 計 80 件	837,800 ドル (98,663,832 円)

助成対象概要（国際助成）

1. コンバウン中期(1782年-1846年)のビルマ農村社会の社会経済状態 (ウー・トゥン・イー)

ビルマのコンバウン時代についての歴史的資料は、支配層についてのものが中心であるため、農村社会についての資料は少ないが、これらは貝葉文献の形でビルマ各地に散らばっている。そのなかには、すでにマイクロフィルムに収集されているものもある。これらを日本人の研究者と協力して収集し、コンピュータ・データベースに入力、英文の概要をつけて編纂し、出版することが、当プロジェクトの目的である。申請者と日本人協力者はそれぞれの所有する文献を比較することにより、欠落している情報を補い合うことができる。

2. 音楽とクメール人の生活

(K. ナロム)

当プロジェクトでは、クメール人の生活のさまざまな機会に行われる儀礼に伴う音楽を記録、採譜し、本にまとめることを目的とする。クメールの庶民生活のなかで、多くの伝統的な音楽が発展してきたが、今日その多くが消滅の危機に瀕している。

第1年度は、シエムリエップ州を中心にフィールド調査を行った。第2年度は、引き続きその他の地方で、音楽をよく知る人にインタビューを行い、また実演してもらって録音、採譜といった記録作業を行う。最終的には報告書として出版する予定である。

3. パーリ語クメール語辞書の再版と配布

(O. ケム)

カンボジアの仏教研究所は、多くの仏教関係およびカンボジアの文化伝統に関する蔵書を有する著名な研究機関であったが、ポル・ポト時代(1975~79年)に破壊された。ようやく今日、仏教研究所は復興され、散逸した図書の一部も回復された。

仏教研究所では、ポル・ポト時代に弾圧された仏教の復興のために、仏書再版の事業を行うことを計画している。当プロジェクトはその一環として、仏教研究が以前に出版したパーリ語クメール語辞書の再版と、全国の寺への配布を行うものである。

4. 両世界大戦間(1919年-1940年)のカンボジア社会の発展 (S. サムナン)

当研究は、両大戦間のカンボジアの歴史についての研究である。この時期は、アジア各国で民族主義運動が高まり、やがて独立へと向かっていった重要な時期であり、カンボジアのその後の歴史にも大きな意味をもつ。

方法として、カンボジア国内での史料研究、重要事件の起こった場所への訪問、バンコク、東京、コーネル大学、フランスでの史料研究と、論文の執筆を行う。申請者は、ポル・ポト時代の生き残り知識人の1人で、現在プノンペン大学歴史学部長として後進の育成にあたっている。

5. 古クメール語辞書の出版

(N. ナラン)

古クメール語は、東南アジアのモン・クメール語族の一員であり、6~14世紀の碑文の形で約1,500点が残されている。当プロジェクトは、パリ第3大学でクメール碑文学を専攻するカンボジア人、Pou氏が碑文の採本から語彙を編纂する古クメール語-仏語-英語の辞書の出版である。

辞書の原稿は、Pou氏によりほぼ完成している。出版を行うクメール文明ドキュメンテーション研究センターは、フランスに亡命したカンボジア知識人がつくった民間機関であるが、現在はプノンペンに戻っている。

6. 『スラカルタのフォルステンランズ・タバコ栽培とブスキのブスキ・タバコ栽培: その地域社会への影響, 1860-1960年』の出版 (スギヤント P.)

19~20世紀まで、ジャワの農村経済と農民生活は、オランダの植民地支配とプランテーション型産業の発展下で、きわめて大きな変容を被った。当研究は、そのプロセスを、スラカルタ王侯領とブスキ理事州の2つのタバコ産業を取り上げて解明しようという研究である。3年間の研究により、タバコ産業政策は、必ずしも農民に重い負担を強いたのみならず、土地を貸したり妻子が農園で働いて得た収入は農作物の商売、食品加工など非農業部門の発展にも寄与した。今年度はその成果を出版する。

7. 西ジャワ、タゲランのチプタット地域の宗教・社会
変化に関する研究 (アミスディン R.)

当研究は、ジャカルタ近郊のチプタット地域の住民の宗教・社会生活が、ジャカルタの発展、人口膨張に伴いどう変化したかを社会宗教学的に研究するものである。

チプタット地域は、プタウィ・オラ (ジャカルタとスンダ文化の中間の伝統的文化) を有しているが、1960年代初頭からジャカルタの発展に伴い、日伊合併企業の進出、スーパーや映画館などが建設され近代化が進む反面、イスラム学校も登場した。その住民の宗教意識を宗教学者が探る。本年度は、データの分析、インフォーマントへのインタビューを行い、報告書を執筆する。

8. ビマ文化の保存：ビマ年代記、テキストおよび口承
伝統の翻字と翻訳 (ヘリウス S.)

東インドネシアのスンバワ島に存在したスンバワ、ドンプそしてビマの3つのイスラム王国のうちドンプとビマ王国は、共通の民族や言語をもちビマ文化を形成していた。この地域は、17世紀初頭のイスラム到来以来、ゴワ (マカサル) との関係が緊密になり、なかでもロンタラと呼ばれるマカサル・ブギスの伝統的史料の影響を受けてボ (Bo) と呼ばれる年代記が編纂された。

当プロジェクトは、このボを収集・翻字し、注釈をつけて出版する一方、一般民衆の民俗等を扱った口承伝統を収集してインドネシア語に翻訳し出版するものである。

9. スンダ文化百科事典 (アイップ R.)

スンダ語は、ジャワ語に次いで約2,500万人に話されている地方語である。また、スンダ歴史は5世紀にさかのぼる。インドネシアの有力な地方文化であるが、これまで文化百科事典が編まれたことはない。

当プロジェクトは、スンダ語・スンダ文化に関するスンダ文化百科事典の編纂を目的としている。この事典は、スンダ地方の言語、文学、舞台芸術、歴史、宗教、哲学、社会習慣、考古学、経済、政治の分野を網羅したスンダ文化に関する3,500の見出し項目を扱う。第4年度は、これまでの原稿のチェックを行う。

10. バリの貝葉文献ロンタルのマイクロフィルム撮影 (I.G.N.R. ミルシャ)

バリ島やロンボク島には、その地域の歴史等を解明するために貴重な貝葉文献ロンタルが、1,604の題目について約900の個人や地方政府によって所有されていることが、当研究者が行った調査で明らかになった。これらのロンタルが近い将来所在不明になることを防ぐためにはマイクロフィルムに収めることが望まれる。

当プロジェクトは、第1年度に引き続き第2年度もセンター所蔵のロンタルを選定し、カタログを作成し、ジャカルタの科学記録情報センターでマイクロフィルムの撮影を行う。

11. バリのクレジット組織の発展：1859-1937年 (I.B. シデマン)

バリ社会では、昔から個人・組織から借金をする習慣がある。sekeha, banjar, desaなどの伝統的組織は、伝統的な方法で決められた金利を要求してお金を貸すクレジット銀行としての性質さえ有している。1900年以降オランダ植民地政府がdesabankとvolksbankを設立して以来、クレジット制度問題はより複雑化し、借金は、経済的考慮なしに行われることが多くなった。当研究では、この習慣が過去の伝統、植民地政策に根ざしていると考え、1859-1937年のバリにおけるクレジット組織の発展について史料を収集し、報告書を執筆する。

12. インドネシアの老人のライフスタイルと生きがいに関する研究 (クンチャラニングラット)

インドネシア人の平均寿命は年々延び、10年後には老人の数は高い割合を示すことが推測される。しかし、民族の構成が多様であることと、農村社会から工業社会への移行過程における工業化の度合いが地域によって異なり、老人のおかれている状況は一律には論じられない。

当研究は、インドネシアの2都市2農村を選び、2年間でのおのおの2地域ずつを対象に、そこに住む老人のライフスタイルを、その家族構成、日常生活、将来の生活設計、生きがい等に焦点をあてて研究するものである。第2年度は、西スマトラとスンバで調査を行う。

13. フローレスの地方語(リオ語, シッカ語, ンガダ語)
の機能 (アロン M. ムベテ)

ヌサ・トゥンガラ・ティムールのフローレス島には、リオ語、シッカ語、ンガダ語という少数派の地方語があり、同地域の固有文化の要となっている。しかし、国語のインドネシア語が普及するなかで使われる機会が減少している。当研究は、これらの言語が現在の社会文化のなかでどう使われているのか、社会言語学的に調査する。第1年度はリオ語、第2年度にはシッカ語、第3年度はンガダ語について農業儀礼や宗教儀式での使われ方、小中高校の教育現場や家庭での役割、民話等の収集を通して、機能を調査し、最終報告書を執筆する。

14. 歴史ジャーナル『歴史：思想、再構築、認識』の発行 (イブヌ Q.)

当ジャーナルは、1991年に創刊されたインドネシアでは唯一の歴史雑誌である。刊行の目的は、健全で創造的歴史研究コミュニティ形成を目指した歴史学者間および歴史学者と社会全般間のコミュニケーションの促進、歴史教育の強化、歴史学の性質や倫理に対する一般社会の理解の促進、にある。

当プロジェクトは、同ジャーナルの第3~8号(1992~94年)の刊行にあたり、編集費等の助成を得ることで、その後は自立した刊行を行うことを目的としている。第1年度に続き、第2年度は、第5号、6号を刊行する。

15. マルク諸島タリアブ島のマゲイ族の農耕(バセル)文化 (エリサ R.)

東インドネシアのマルク諸島の北部に位置するタリアブ島に住むマゲイ族は、一部すでに定住しているがその大半は焼畑農業を行っている少数民族である。彼らはバセルと呼ばれる農耕文化を有し、彼らの生活の根幹をなしているが、その実態が研究されたことはない。

当研究は、マゲイ族が自分たちを取り巻く環境を区分する方法や農作業を律している慣習法を明らかにし、またバセル文化を形而上的に支える宗教や信仰と農耕との関係を解明し、2年かけてマゲイ族のバセル文化の全容に迫る。

16. プサントレンの指導者：アチェにおける伝統と近代のはざままで (ムハマド G.I.)

インドネシアの西端アチェ地方には、13世紀からプサントレン(イスラム寄宿塾)がイスラム教育機関およびイスラム教布教センターとして存在していた。このプサントレンは、その後の西欧の教育システムの影響を受け、近代的・伝統的の2つの型に分かれた。

当研究は、このプサントレンが近代的教育制度をもつものと伝統的なものとに分かれた背景に、その教育制度の選択決定に大きな影響をもつプサントレンの指導者の世界観や彼らの社会関係に違いがあると考え、両方の指導者の思考様式を明らかにすることを目的としている。

17. クトブラック：現代ジャワにおける過去の政治学 (ブディ S.)

クトブラックは、ジャワで最も人気のある大衆演劇の1つであり、20世紀初頭以降ジャワの民衆の政治的講話として重要な役割を担うようになり、民衆の政治意識のあり様を表現しているといえる。

当研究は、クトブラックの分析を通して、現存の権力構造やエリートの行使する政治文化に対する民衆の講話のパターンが変化していることを明らかにし、その変化を現代インドネシア社会に位置づけることを目指す。新聞などを利用してクトブラックの変遷史を分析し、ジョクジャで上演されているクトブラックを記録、分析する。

18. 南スマトラの未開部族クブ族の民俗誌研究 (A. ロムサン)

南スマトラの森林地帯に居住するクブ族は、森林破壊が進むなかで絶滅の危機に瀕している少数民族である。クブ族に関する研究はこれまでも実施されてきているが、包括的な研究は行われたことがない。

当研究は、クブ族の居住地1か所を選び、そこに当研究者チームが住み込み、その地域のクブ族の人口のインヴェントリー化、人口成長率、人生のサイクル、慣習および社会組織制度などについて包括的な研究を行うことを目的としている。また、彼らの移動地図を作成する予定である。

19. インドネシア語の語彙アクセントとそのスピーチ上の実現 (ラハユ S.H.)

インドネシア語は、1928年に国語となっているが、文法や辞書に関する研究は行われているものの音韻学や音声学に関してはあまり行われていない。

当研究は、インドネシア語の単語のアクセントの位置およびそれが実際に話されるうえでのイントネーションや話し手の感情により、アクセントの位置が変化するかどうか、を明らかにすることを目的としている。

調査の対象は、全国各地の出身者が集まり、インドネシア語を日常語としているデボックとジャカルタの住人で、実験室で記録調査と質問表からデータを収集する。

20. 南スマトラの鉱業史 1890年-1940年 (バンバン P.)

当研究は、南スマトラにおいて鉱業が発展を始めた1890年から第2次世界大戦が勃発する1940年までの同地域における鉱業の発展史、および鉱業が同地域の経済および民衆の経済生活に与えた影響を研究する。石油、石炭、銀および金の鉱業を取り上げ、国内、イギリス、オランダでの文献調査を中心に3年間で研究を行う。

鉱業の発展は一般に、市場の拡大、所得の上昇、インフラの拡充などを通して地域経済に大きな利益をもたらすと考えられるが、その性質上必ずしも地域住民の経済への影響は大きくないと考えられる点も考慮する。

21. 現代ワヤン芝居：ジャワにおけるその発展と分布 (ウマル K.)

ジャワのワヤン（影絵芝居）は、本来ジャワの世界観を体現している田植えや収穫に関係した儀礼、子の誕生、結婚や死にまつわる儀礼と強く結び付いて上演されてきた。しかし開発が進み従来の世界観が大きく揺らいでいるにもかかわらず、依然として演じられていることに着目し、当研究では、①ワヤンを社会的文脈のなかで捉え直し、それが現代社会の娯楽儀礼へと移行しているプロセスを明らかにし、②ワヤンが現代も上演されている特定の地域の地図を作成する、ことを目指す。観劇者やダランなどへのインタビュー、演目の記録を行って分析する。

22. 西カリマンタン、サンガオ島のリブン・ダヤック族の伝統医療にみられる知識体系 (ムディオノ)

サンガオ島のリブン・ダヤック族の社会では、現在も伝統医療が大きな役割を担っているが、現代医療が導入され、その存在が忘れられる傾向にある。当研究は、その伝統医療に関する知識体系を研究する。

健康、疾患や病気の種類に関する概念、体の構造や機能に関する知識、治療に関するさまざまな事項、またドゥクン（伝統治療の専門家）の社会的役割と報酬などについて明らかにする。また薬として用いられる動植物のインヴェントリーも作成する。そして彼らの伝統医療知識の理論化、体系化が可能であるか探る。

23. スンダ貴族メナックに対する西欧教育のインパクト (ロフィアティ W.)

西ジャワのスンダ地方にはメナックと呼ばれる貴族階級が存在していた。彼らが学校への入学を許可されオランダ式教育を受け始めると、メナック社会では政治形態、家族生活や家族関係、支配者と民衆の關係に大きな変化が生じた。

当研究は、西欧教育の導入により家族や社会全体の価値観が大きく変動したことを、生存するメナックやその子孫へのインタビューを行い、個人蔵のメナック層の手記、記録、文書などの発掘を行い、実証的に明らかにすることを目的としている。

24. シンカワンの伝統陶器：その歴史と文化遺産としての意味 (スタルト)

当研究は、西カリマンタン州のシンカワンでつくられているシンカワン陶器について、西カリマンタンの歴史のなかでどのように生み出され、変遷していったのかを明らかにし、西カリマンタンの特に若い世代にその伝統的意義を認識してもらうことを目的としている。

シンカワン陶器は、その由来からも分かるように初め中国の陶器の強い影響を受け、後に徐々に土着化していったといわれる。その歴史を、ジャカルタなどの公文書館や博物館にある史料、シンカワン焼きの窯元でのインタビューを通して研究する。

25. ラム・シタンドン歌謡の研究

(トンカム O.)

ラオスおよび東北タイで最も有名な音楽はラムと呼ばれ、モーラムという1~2人の歌い手と、ケーンという楽器の伴奏によって歌われる。典型的なラムは、男女のモーラムの掛け合い歌である。このラムは、中国南部から東南アジア全域にみられる歌謡の1つの典型的なパターンである。

第1年度には、ヴィエンチャンとチャンパサックでフィールド調査を行った。第2年度には、フィールド調査を継続し、また地方でのセミナーを開催するほか、ビデオを使った歌謡の記録・分析も行う。

26. ラオ慣習法貝葉文献の翻訳

(サムリット B.)

当プロジェクトは、後記「貝葉文献のインヴェントリー作成」のプロジェクトによって発見されたラオ族の古い慣習法の文献から、特に重要と思われる3種類の慣習法文献を選定し、異本などの調査を行って翻訳の定本を定め、現代ラオ文字に翻字して出版する。3年間のプロジェクトで、各年度1点の慣習法を対象とする。第1年度は、Soi Sai Kham、第2年度はPha Thammasad Luangという慣習法について、研究と翻字を行った。最終年度である第3年度には、Suvannamukhaという文献を対象にする。

27. カンボジア語ーラオ語辞書の編纂

(マハ・カンパン V.)

ラオスとカンボジアは異なったことばを話しているが、地理的には隣国であり、両国とも仏教徒が大半を占める。現在、両国間に友好条約が結ばれ、双方多くの学生が相手国に留学し、また学者間の交流も進展している。

当プロジェクトは、これまでに編纂されたことのないカンボジア語ーラオ語辞典を編纂しようというものである。本年度では日本人とアメリカ人の言語学者、プログラマーが協力して、クメール語とラオ語のバイリンガルのコンピュータプログラムを開発し、これを用いて辞書の編纂・出版を一気に進める予定である。

28. 民話、格言、歌謡にみられるフモン族の伝統の研究

(ネン X.)

ラオスの高地に住むフモン(メオ)族は、中国南部、ヴェトナム、タイ等に広く住む東南アジアの代表的な山地少数民族の1つである。かつては中国雲南省に王国をつくっていたといわれ、独自の文化伝統を保持している。いままで、ヴェトナムやラオスのフモン族について研究を行うことはなかなか困難であった。

第1年度では、シエンコアン州とサムヌア州でフィールド調査を行い、古老からの聞き取り、祭りの参与観察などを行った。第2年度は、分析作業を行いラオ語とフモン語で報告書を執筆、出版する。

29. 貝葉文献のインヴェントリー作成

(ダラ K.)

当プロジェクトは、ラオスの寺院などに散在している貝葉文献の所在を明らかにし、僧侶などにそれらの文献を読むトレーニングを施し、コンピュータにデータを入力して貝葉文献のインヴェントリーづくりを行う。

第1、第2、第3年度には、ヴィエンチャン州とルアンプラバン州を対象に貝葉文献の調査とインヴェントリーづくりを行った。第4年度から3年間をかけて、南部の3州を対象に同様の作業を進めている。昨年度に引き続き、本年度もカムモウアン、サヴァンナケート、チャンパサックの3州で調査を行う。

30. 東南アジアの学校および高等教育機関での音楽教授のプロセス

(タン S.B.)

マレーシアでは近年、初等~高等教育でこれまで教授される機会がなかったマレーシアの伝統音楽や非西欧音楽の授業を学校教育に導入する重要性が認識されている。

当研究は、東南アジアのなかで伝統音楽や西欧音楽を上手にカリキュラムに統合しているフィリピン、タイおよびインドネシアの学校で行われている音楽教育の実施状況とその型を3年間で調査し、それを基にマレーシアの学校で利用できる教材を製作することを目的としている。特に、異なるタイプの音楽の教授方法を、音楽鑑賞、楽譜、演奏、作曲の要素から比較検討する。

31. マレー古典文学に登場する外国人のビブリオグラフィ
イー (アブ・ハサン M.S.)

当研究は、マレーの近代文学が登場する以前、1920年代までのマレー古典文学すべてを対象に、そこに描かれた外国人像、および外国へ行ったマレー人のそこの活動の描写部分を分析することにより、他国の人々と接触するマレー人の心情を明らかにすることを目的としている。

対象となるマレー古典文学は、マレーの歴史 (Sejarah Melayu)、ハン・トゥア物語 (Hikayat Hang Tuah) などの歴史書、文学作品等約 100 作品である。登場する外国人は、中東・ヨーロッパおよび東アジアの人々だけでなく、ジャワ人やアチェ人なども扱う。

32. スルー海の漁業
(モハマド・ラドゥアン M.A.)

当研究は、かつてのスルー王国を形成していたパラワン諸島、ジョロ島、ミンダナオ島および南部の島嶼を対象に、19世紀後半から現在に至るまで、その地域の海洋資源の利用をめぐる1つの経済圏が確立されていったプロセス、またその経済が20世紀の産業市場の要請に応じてどのように変容していったのかを学際的に3年間で分析することを目的としている。

これまで陸地を対象とした東南アジア史研究が中心であったが、当研究は海洋の歴史研究の重要性を意識したものであり、データは主にフィリピン南部で収集する。

33. マレー文書
(アブドゥラー Z.b.G.)

当プロジェクトは、マレーシアの各州で個人蔵となっている18~20世紀初頭にジャウィ文字で書かれたマレー文書の所在を明らかにし、そのカタログを作成、マイクロフィッシュに撮影し、マレーシアの研究者の利用に資することを目的としている。

これらの文書は、当時のマレー人の宗教・政治思想および社会・文化概念を映し出しており、この時代を研究する学者にとって、他の記録書類や口承史を補う重要な史料となる。第1年度は、マレーシア北部にある文書のカタログ作成を計画している。

34. イロイロ州の20世紀の経済史
(H.F. フンテッチャ)

フィリピンの歴史のなかで、フィリピン中部に位置するイロイロ州が、地域そして国家の発展に大きな役割を果たしていたことは明らかである。イロイロ市はフィリピン中部の女王の市といわれていた。現在、その女王の座はセブ市に譲ったものの、イロイロ市は西ヴィサヤ地方の中心であると考えられている。

当申請者は、1984年度と1985年度にトヨタ財団の助成を受けて「イロイロの史跡と歴史的建物の記録と研究」を行った。当研究はその延長線上にあり、イロイロ州の経済発展を歴史的に考察するものである。

35. スペイン植民地時代に関する未出版の古文書の調査、
翻字、翻訳、出版 (V.B. リクアナン)

当プロジェクトの目的は、フィリピンがマゼランに発見された1521年からスペイン植民地時代の終わりまでのフィリピン史についての古文書で、セビリアの古文書館に保存されているもののうち、未出版のものについて調査、翻字、英訳を行い、分類して出版することである。

4年間でBook I~Vまでが出版される予定である。第5年度からは読者の要請に応じて、英語だけでなく、オリジナルのスペイン語と対応する形で出版する計画である。

36. エリオ・コレクション：ミサミス・オリエンタルの
地方史のための資料 (F.R. デメトリオ)

1970年に95のフォルダーに納められたエリオ・コレクションがセイヴィヤー大学の博物館に寄付された。このコレクションは、ドン・ヴィンセンティ・エリオ (1863~1938年) が収集した雑誌や定期刊行物の切り抜きや、注意深く注のついたノートからなっている。その内容はホセ・リサールに関する資料、地方史に関する資料、文学と文化に関する資料である。

当プロジェクトではスペイン語とセブアノ語で書かれている資料を英語に翻訳し、オリジナルとともに出版することを目的としている。

37. マギンダナオ族の慣習と信仰

(E.R. デイソマ)

当プロジェクトは本研究者が当財団の助成を受けて行った「マラナオ族の慣習と信仰」と同じ方法論で、もう1つのモスLEM・グループであるマギンダナオ族を対象として同様の研究を行おうとするものである。マラナオ族についての研究成果は本として出版され、モスLEM自身によるモスLEMについての研究として高い評価を得ている。

モスLEM自身がその慣習と信仰を社会的、経済的背景を考えながら分析する当研究は成果が期待され、地方の研究者への刺激になるものと考えられる。

38. 輸出経済における外資会社の役割:1920年から1949年のビルマの米とフィリピンの砂糖に関して (M.S.I. ジョクノ)

ビルマ史においてもフィリピン史においても植民地時代の農業についての研究はなされているが、植民地の輸出経済の発展に外資会社がどのような役割を果たしたかについてはあまり研究がなされていない。当研究者はビルマの米とフィリピンの砂糖に関連してそのような会社の役割について比較研究するものである。

当研究者は博士論文で植民地下のビルマの米とチーク材についての研究を行っており、今回の研究はその延長線上にある。個人研究ではあるが、東南アジアを1つの地域としてみる新しいタイプの研究である。

39. フィリピンの地方史に関するスペイン語古文書の調査 (M.B.D. アランパイ)

当プロジェクトでは、フィリピン地方史研究促進の基盤づくりとして歴史学者に役立つ資料の質的および量的な概要を明確にするため、主な歴史公文書館の地方史に関連する文献目録を作成する予定である。第1年度は、ドミニコ会の古文書館、マニラ大司教区古文書館、国立古文書館所蔵の古文書、および各教派から出版されている古文書コレクションの調査を行った。第2年度は、スペインの6都市にある各教派の古文書館で調査を行った。第3年度には古文書目録をつくり、印刷する準備を行い、第4年度はデータの整理と印刷を行う予定である。

40. フィリピンのイスラム芸術と建築:土着と現代

(R.N. カニエーダ)

ミンダナオとスルーにはフィリピン土着のイスラム建築がみられるが、当研究はその地理的分布を調べ、民俗学的特徴を明らかにすることを目的としている。これらの建築物はフィリピンのオリジナルな要素とヒンドゥー、マレー、中国、中東の影響が混在する建築的・美術的特色を有する。第1年度の写真による予備的研究で、地理的分布が明らかになり、第2年度はフィールドワークを行い、作図、インタビュー、文献との統合を行った。第3年度には本の執筆と出版のための準備を行っている。第4年度には本の出版を行う予定である。

41. ミンダナオの山岳民族の環境保全に関する民族生態学的慣習 (H.K. グロリア)

フィリピンでは木材切出しによる森林伐採が問題となっているが、同時に山岳少数民族による焼畑農業も環境破壊の要因であると信じられている。しかし人類学者は、その土地土着の民族で焼畑を行う人々は、その土地の条件に適応した、環境を破壊しない焼畑の技術を作り上げてきたと主張している。当研究では、ミンダナオで焼畑を行うさまざまなグループの土着の環境保護の方法を明らかにすることを目的とする。本年度は研究成果をまとめ、本を執筆し、出版する予定である。

42. モロランドの20世紀の民族史

(F.V. マグダレーナ)

モロランドとは19世紀の終わり頃に、ミンダナオ島の3分の2の地域をカバーする、非キリスト教徒が居住していた地域を指している。スペイン支配、アメリカ支配、日本支配を受ける前に、モロランドには2つのグループ、すなわちモロ(イスラム化された民族)と山岳地に住む異教徒が住んでいた。第3のグループであるキリスト教徒は1990年代初めに移住してきた。

モロランドの民族史として20世紀の社会を再構築しようというのが当プロジェクトの目的である。歴史学と社会学のアプローチを併せて民族史を書く。

43. フィリピン諸語辞書

(E. コンスタンティーノ)

当研究者は過去 20 年間、さまざまなフィリピン言語の辞書を編纂してきた。当プロジェクトでは、研究者がこれまで蓄積したものを集大成し、105 の言語を対象とするフィリピン諸語辞書を編纂しようとするものである。辞書の見出し語は約 2 万語で、各見出しは英語でつくられ、その後にフィリピン諸語の同義語を示す。データ処理にはコンピュータを使い、各年度に約 35 言語を対象に作業を行っている。本年度は各言語の辞書を 1 つに合体させ、次年度に印刷を行うための、版下作成を行う。

44. 生態と環境の問題への社会・文化的アプローチ：イ

フガオ族のライス・テラスの事例 (S.D. マヒウォ)

イフガオ族のライス・テラスは、人間の物質的および非物質的側面を混合した希有な生きている文化遺産である。人間とその環境の社会・文化的側面の相互関係を理解するには、理性的・社会的・精神的な存在である人間とそれを取り囲む自然の要素との相互作用の総合的ダイナミックスを研究する必要がある。

当プロジェクトでは、イフガオ族のライス・テラスを研究することにより、文化と文明は物理的環境・生態と深く関連しており、環境の問題は物理的な問題だけでなく、精神的・文化的な問題でもあることを明確にする。

45. ヒガンテス島の民族誌：人間活動のシステムとエコ

ロジカル・セル (C.N. ザヤス)

フィリピンは島国でありながら、フィリピン文化・社会の研究において生産とコミュニケーションの場としての海岸コミュニティについての研究があまりなされていない。

当研究は人類学と環境問題の専門家が行うインターディシプリナリーな研究で、人間の生活の場である海岸コミュニティの全体像を、長期間の観察を基にとらえていこうとするものである。当研究者は日本の漁村の研究で博士号を取得しており、その経験をフィリピンで生かそうという試みである。

46. アルシーナ文献 (ヴィサヤ地方についての歴史書) の現代表記への書

き換え、翻訳、注釈作成、出版 (R.B. ハヴェリヤーナ)

イエズス会のフランシスコ・イグナシオ・アルシーナ神父は 30 年以上のサマーとレイテの布教活動の後、1668 年に *La historia de las islas e indios de Visayas* を書いた。Part I は自然・文化史について、Part II は 17 世紀初頭のサマーとレイテの植民地化について書いてある。1954 年にシカゴ大学のエガン教授等がこのアルシーナ文献の Part I の一部について翻訳原稿を作成したが、出版までには至らなかった。当研究はこの仕事を引き継ぎ、Part I に含まれる Book I ~IV のスペイン語文献とその英訳を出版する。

47. ヴィサヤ 3 言語の文学・芸術用語辞書

(E.K. アルブーロ)

当プロジェクトはヴィサヤ 3 言語、セブアノ語、ワライ語 (レイテ・サマー)、ヒリガイノン語の固有の文学・芸術用語の辞書を編纂することを目的としている。

過去 20 年フィリピンでは地方文学の研究が盛んになったが、文学について語るための道具がない。フィリピン文学評論は英語かタガログ語交じりの英語、若しくはヴィサヤ語交じりの英語でなされている。そのため思想のパターンや情緒がゆがめられてしまっている。ゆえに固有の語彙を取り戻すことが必要である。それによってヴィサヤの美学が再構築されることにもなる。

48. モロとフィリピンのナショナリズム：歴史学的検討

(M.R. タワゴン)

当プロジェクトはフィリピン・ナショナリズムをモロ (イスラム化された民族) の視点から見直すことを目的としている。モロはスペインに植民地化されることがなかったため、歴史的にいままでと違った分析をなされるべきである。しかるに、フィリピンの歴史にモロが果たした役割はスペイン人とアメリカ人によって書かれており、そのためモロの役割は否定的にみられている。しかし、近年やっとモロの歴史家が、自分たちの視点で歴史を書き始めた。当研究はフィリピン・ナショナリズムと対比して、モロの戦いの分析を試みる。

49. フィリピン憲法の発展, 1935年-1987年: 歴史と法的注釈 (J.G. ベルナス)

当プロジェクトはフィリピンの3つの憲法, 1987年憲法, 1973年憲法, 1935年憲法を歴史的に詳細に調べ, 第1次資料と憲法制定会議の記録のデータを基にして, 憲法のテキストの精神と意味を説明することを目的としている。さらに, これらの憲法についての総合的注釈を作成する。1986年に民主的な憲法が復活して以来, 憲法に対する関心は高まったが, 憲法制定に至るまでの委員会の仕事や会議での議論について注釈した研究は少ない。特に, 厳戒令で没収された1973年憲法の憲法会議の記録についての研究はなされていない。

50. フィリピン南部のモロの人々の土地利用, 資源利用の固有のパターン (M.L. フィアンザ)

当プロジェクトはフィリピン南部の13のモロ民族・言語グループの土地利用, 資源利用の固有のパターンについて調査することを目的としている。モロの伝統的土地利用, 資源利用の概念と外からの要因のインターフェースを調べる。スペイン人とアメリカの土地政策はモロの人々の自治的で先祖代々行われてきた固有の伝統, そして土地利用と所有に関連する世界観をむしばんできた。当研究者はフィリピン北部の少数民族, イゴロットの出身であるが, モロとコルディリェラ山岳地帯を比較的視点でみられるため, 興味深い。

51. フィリピン人のディアスポラ: 移住とインドネシア北部への定住 (E.T. クリヤマール)

当プロジェクトはインドネシア北部に移住しているフィリピン人の“ディアスポラ”を歴史的に研究することを目的としている。“ディアスポラ”は各地に分散したユダヤ人のことを意味するが, 近年は移民から定着した少数エスニック・グループで, 祖国と心情的, 物質的につながりをもつ人々を意味するようになった。インドネシア北部, 特に北スラウェシとその周辺には, フィリピン人が在住しているが, これらの人々については, フィリピン側からもインドネシア側からも調査がなされていない。当研究は民族の流れに関して歴史的に探究する。

52. チェンマイ-ランブン盆地の古代集落 (サラスワディー O.)

チェンマイ-ランブン盆地は8世紀にハリブンチャイ(ランブン)が最初の町としておこり, その遺跡は現在も城壁や堀として残っている。ハリブンチャイは13世紀に滅ぼされ, チェンマイを首都とするランナ王国が建設された。

当プロジェクトはチェンマイ-ランブン盆地の18の古代のコミュニティの歴史を対象とし, インターディシプリナリーなアプローチで研究する。方法論的には, 貝葉文献, サムッド・コイ(本), 碑文, 航空写真, 陶器等を利用して行われる。

53. タイ・ルー族の織物の比較研究 (ソンサク P.)

当プロジェクトは北タイ, ラオス, ビルマに住むタイ・ルー族の織物を研究しようとするものである。タイ・ルー族の織物が, タイ・ルー社会でどのような役割を果たしているか記録し, すべて失われてしまう前に織物の識別をすることを目的としている。現在, 大量生産された織物が手織物に取って代わりつつあり, アンティークの織物はどんどん外国へ売られてしまっている。当プロジェクトは, この失われつつある芸術を後世に残し, そのデザイン, パターン, 技術を村や美術館で保存することを促進する一助となることをねらいとしている。

54. 東北タイのクメール遺跡の土地利用と文化的変遷 (タダ S.)

8~13世紀までのタイの東北部はクメール王国の影響下にあり, 東北タイにはいままクメール遺跡が散在している。当研究ではこれらのクメール遺跡の歴史を明らかにしようとするものである。具体的には, それらの遺跡の起源, 発展, 放棄, 再生, 都市の変化の傾向について理解し, 遺跡のタイプと体系を明らかにし, クメール文化の保存と振興を図り, 東北タイにおけるクメールの歴史と文化的背景の理解を促進する。当研究者はタイ政府の芸術局で遺跡の保存の担当をしていた人物で, 現在はコンケン大学で研究を行っており, 適材を得ている。

55. ビルマにおけるタイ（シャン）文字の歴史と発展

(サイ・カム・モン)

当プロジェクトはビルマにおけるタイ（シャン）文字の起源と発展を研究し、新しいシャン文字を類似の文字から選び出すことを目的とする。ビルマのタイ系民族、シャン族の各グループは山岳地帯に孤立して生きてきたため、共通の文字が発展しなかった。シャン族の学校でもシャン文字は教育に使われていない。

シャン文字は北タイのランナー・タイ文字と中国南部の雲南に住むタイ族のユーナン文字に近いため、それらの文字から新しいシャン文字を選び出す。またシャン族の文化史研究促進のための新しいアプローチを模索する。

56. チャオ・ブラヤ・デルタとメコン・デルタの比較研究：土地の状況と歴史的発展

(ナロン T.)

第1回トヨタ財団国際助成研究報告会（1990年11月にバンコクで開催）において東南アジアの研究者による国際共同研究を行うことの重要性が認識された。当プロジェクトは、この報告に端を発するネットワークから生まれたものである。

東南アジア大陸部の3つのデルタ中の2つ、チャオ・ブラヤとメコンについては比較研究が可能である。第1年度はフィールド・スタディを行い、第2年度はさらに第1年度では詰め切れなかった調査の方法等について、さらに検討を重ねるための少額の助成である。

57. ヤオ族の漢字の読み書きの社会的インパクトと宗教に関する国際会議：その儀礼の起源と歴史

(テラパン L.T.)

当国際会議はヤオ族の研究に関する第8回会議で、中国、日本、ホンコン、台湾、ヴェトナム、ラオス、フランス、イギリス、オーストラリア、アメリカの専門家が参加する。ヤオ研究国際協会は1986年に設立され、2年に1度会議を開いてきた。

今回の会議はヤオ族の宗教、特に道教の儀礼についてのデータの比較を行う。ヤオ族はさまざまなサブ・グループに分かれているため複雑で、各サブ・グループの専門家が一堂に会して、初めて全体像を推し量ることが可能となる。

58. ヴェトナムの編年学、永久暦および累積暦

(L.T. ラン)

ヴェトナムには古来、太陽暦、太陽-太陰暦、週、24気候期、干支、星座の7種類の暦がある。このうち後3者は、これまであまり研究されていない。第1年度は、数学者を中心とする研究チームがパソコンを用いて、図と表で西暦を他の暦に変換する方式（永久暦）、1802~2010年までを4種類の暦で表した表（累積暦）を作成した。第2年度には、1~2000年までを少なくとも5種類の暦で表した累積暦とヴェトナムと中国の暦の編年法を比較した論文を作成、出版する。

59. ヴェトナムの伝統演劇、ハッポイの辞典

(N. ロック)

12~13世紀頃に生まれ、庶民に親しまれている伝統演劇ハッポイ（中国の京劇に似た演劇）のさまざまな側面を記録した辞典を作成するのが、当プロジェクトの目的である。内容としては、古典、現代の代表作品の紹介、典型的登場人物、秀作の抜粋、劇作者たち、著名な俳優たち、研究史、劇団、地方的変異、歴史の変遷などである。第1年度には、北部と中部の7省でのフィールド調査を行い、俳優のリスト、劇団や地方についての文献の収集、化粧方法の記録などを行った。本年度もフィールド調査・文献調査を継続し、3年間で辞典の完成を目指す。

60. フェ美術館所蔵美術品の研究とカタログの出版

(T.C. グエン)

1908年に阮朝のズイ・タン帝の命により、フェの王宮内に設けられた今日のフェ美術館は、仏領時代から大量の美術品、家具、彫刻、陶磁器、象牙などが収集され続け、またチャムの古美術品も収蔵された。当プロジェクトは、約1万点の収蔵美術品について、その種類、量、材質、製造方法、年代等を調べて収蔵品目録を完備させると同時に、代表的作品のカタログを出版することを目的とする。第1年度には、収蔵品のうち陶磁器について研究を行い、カタログとして出版した。第2年度は、織物を中心に研究とカタログ出版を行う。

61. カオダイ教

(D.N. ヴァン)

第1次大戦から第2次大戦の間に、特に南ヴェトナムを中心に新宗教が多数生まれた。カオダイ教もその一つで、政治的要素も含みつつ急激に成長し、一時は100万人以上の信者をもった。今日でも、ヴェトナム戦争前と変わらない信者がいる。宗教的には、仏教、儒教、道教、キリスト教、西欧神秘思想などの習合的な性格が強い。

第1年度では、文献調査と第1次フィールド調査を行った。第2年度には、文献調査とフィールド調査を継続して、報告書の執筆を行う。

62. 大学レベルの東南アジア研究の教授カリキュラムの改善

(P.D. ズオン)

ヴェトナムにおける東南アジア研究は、東南アジア諸国との直接の交流が、経済・文化などの面で深まるなか、既存の教育カリキュラムを改善するの必要に迫られている。当プロジェクトは、東南アジア研究所とハノイ教育大学が共同で、東南アジア諸国の民族、宗教、芸術、文学等と言語教育の新カリキュラムの開発を行おうとするものである。第1年度は、東南アジアの文学と経済発展およびラオ語とクメール語の教授カリキュラムを執筆、作成した。第2年度は地理、民族、宗教、歴史およびタイ語、インドネシア語のカリキュラム開発を行う。

63. 「国際会議：現代生活における伝統的祭」のプロシーディングスの印刷

(L.H. タン)

ヴェトナムには古来、さまざまな種類の祭りが行われてきた。戦争中は下火になっていたが、近年再び大変盛んになってきた。これらの祭りのなかには、農事儀礼、伝説上の英雄の祭り、宗教的な祭りなど目的、内容的にも異なるさまざまなものがあり、東南アジア周辺諸国での祭りとの類似性、相違点がみられる。

昨年度、タイ、インドネシア、フィリピン等の研究者の参加を得て会議を開催し、大きな成果を収めた。本年度は、会議のプロシーディングスを作成、印刷する。

64. フエの伝統工芸

(N.H. トン)

1802~1945年まで阮朝の首府であったフエには、皇帝の命令により、全国からさまざまな伝統工芸の名工が集められ、木像、金像、瓦などの種類別に公的工房が設けられた。当研究では、各職種の起源、創始者、技法の変化、各時期の代表産品、現状など職種ごとに工芸と工房の歴史を明らかにする。また、技術、生産過程、生産組織、分業、職業に関連した慣習や宗教も研究する。

第1年度には、阮朝の記録、職人の家の族譜、かま跡の調査等を行った。第2年度には、職人へのアンケート等の補足調査を行い、報告書を作成する。

65. ヴェトナムのジャーナリズムの歴史：1965年~1990年

(H.M. ドウック)

当プロジェクトは、100年以上に及ぶヴェトナムのジャーナリズムの歴史を研究し、本編と資料編として成果を出版することを目指す。研究のトピックスとしては、社会的傾向、内容分析とジャーナリズム文化、代表的ジャーナリスト、新聞の印刷部数等の統計的分析、社会的影響力などとなる。第1年度には、セミナーを開催して著名なジャーナリストの参加を得たほか、ヴェトナム国内の図書館等で文献研究を行った。第2年度には、海外資料も含めて文献研究を継続するほか、セミナーの開催、ジャーナリズム史資料集の出版準備を行う。

66. クアンナム・ダナン省ホイアンのサーフィン甕棺文化の考古学発掘

(N.D. ミン)

中部ヴェトナムで発見される推定2000年以上の甕棺文化は、東南アジアのいろいろな地域とのつながりがありそうなきわめて興味深い考古学的研究対象である。発見地にちなんでサーフィン文化と呼ばれる。

中部ヴェトナムの古い港町ホイアンの周辺では、サーフィンの遺跡から多数の甕棺が発掘されているが、本格的発掘調査はまだ手をつけられていない。

第1年度では、地表調査、地図作成を行い、ハノイ大学の考古学者の指導の下に試験発掘を行った。第2年度は、本格的な発掘調査と出土品の保存処理を行う。

67. 現代チャム語-ヴェトナム語, ヴェトナム語-現代
チャム語辞書 (B.K. テ)

チャム族は, 現代ヴェトナムの有力な少数民族の1つであり, 古代チャンパ王国をつくった民族として知られる。現在あるチャム語の辞書はチャム語の文語を対象としたもので, チャム語の文語と口語が相当に異なるため日常の用には足りない。

当プロジェクトでは, 現代チャム語-ヴェトナム語辞書と逆のヴェトナム語-チャム語辞書(各1万語収録)の作成を目指す。第1, 2年度は, チャム語語彙の収集, カード化を中心に, データをコンピュータに入力した。本年度には, 辞書の出版を目指す。

68. ヴェトナムのフモン族 (P.Q. ホアン)

ヴェトナムの有力な少数民族の1つであるフモン族(メオ族)は, 500万人以上の人口を有し, 北部山岳地帯, 特に中国, ラオスとの国境地域に居住している。彼らは, 焼畑をしながら移動しており, その伝統的生活様式を固く保持している。

当研究では, 民族の起源と移住, 農耕と環境影響, 民族植物学, 社会構造, 地域変差と共通性, 宗教の側面について民族学的な調査を行うことを目的としている。本年度も第1年度と同様に, 文献収集およびホアリエンソン省とゲティン省でフィールド調査を行う。

69. ヴェトナムの地簿コレクションの詳細な検討 (N.D. ダウ)

阮朝によって, 1805~36年にまとめられたヴェトナム全土の地簿は, 10,044巻が戦火を免れ今日まで残っている。中国語で書かれ, すべての村ごとにまとめられている。内容的には, 耕作地の見取り図, 境界の説明, 石高の説明, 公的証明の4つからなる。当プロジェクトは, 10数年をかけてこの地簿の研究に取り組んできた民間史家があり, その成果を逐次刊行していこうとするものである。

第2年度は第1年度に引き続き, ビエンホア省などの5省の地簿について研究をまとめ出版する予定である。

70. ブル語-ヴェトナム語-英語辞書 (V.H. レ)

ブル族は, ラオスではカー族と呼ばれるモン・クメール語族の少数民族で, ヴェトナム, ラオス, タイの山地に4~5万人居住している。

ブル語のための文字がつくられたが, 文盲率は90%に上っている。ブル語による教育全般を向上させるために, 当プロジェクトは地元のフエ大学の研究者が, ブル語-ヴェトナム語-英語の辞書を3年かけて編纂することを目指す。

助成対象者は, すでにブル語の教科書(共著)を出しており実績があるうえに, 地元としての地の利もある。

71. ヴェトナムの文化と文明の研究への貢献: グエン・ヴァン・フエンの全作品の出版 (N.D. ジェウ)

グエン・ヴァン・フエン(1908~75年)は, ヴェトナムの歴史学, 民族学, 民俗学の偉大な先達であり, 今日でも通用するヴェトナムの文化と文明についての著作を多数残した。

著作のすべては, フランス語で書かれているため, 海外やフランス語を解するヴェトナム人の中では高い評価を得ているが, 一般には広く知られていない。当プロジェクトでは, 彼の学術論文中, 特に重要な作品をヴェトナム語に翻訳して出版する。

72. ヴェトナムのラグライ族の文化と社会 (P.X. ビエン)

ヴェトナムには, マラヨ・ポリネシア語族の民族が5民族住んでいるが, うち4民族は中部ヴェトナムの南部諸省の西の山地に住んでおり, 高地マラヨ・ポリネシア語族と呼ばれている。彼らの起源については, 同語族が島嶼部へ移住する過程で取り残された, あるいは移住後再び戻って来たなどの諸説があり, 未解明の部分が多い。

当研究では, この4民族のなかで最も研究が進んでいないラグライ族(人口約7万人)を対象に, 2年間民族学調査を行い, モノグラフを執筆する。

73. 戯作者・演出家、グエン・ヒエン・ディンとクアンナム・ダナン省の伝統演劇トゥオンの発展 (H.H. ホック)

ヴェトナムの伝統的演劇トゥオンは、元来は一人芝居で、そのテキストは散文、韻文、漢詩が含まれ、音楽は詩の朗読、詠唱歌、民謡などからとられている。

トゥオンは、19世紀にフランス植民地化が進み阮朝の力が衰えていくなかで、阮朝に絶望して職を去った官僚たちが中心となり、隠棲文学として、また抵抗文学の一形態として発展した。なかでもダナン出身のグエン・ヒエン・ディンは、トゥオンの作家・演出家として第一人者とされ、彼のつくった劇団、学校は後の時代の中心的俳優、作家を輩出することになる。

74. ヴェトナムの少数民族、チュ族 (N.V. マイン)

中部ヴェトナムの山地に住む、マラヨ・ポリネシア語族の1つチュ族(チュル族)は、今日最も厳しい民族消滅の危機に瀕している民族の1つである(約1,800人の人口)。

当研究では、チュ族の起源、人口分布、移住、言語、経済活動、生活上の困難と解決の糸口など、チュ族の文化と生活について民族学的研究を行うものである。

当研究は、前出のホーチミン市の研究者の研究と対をなすものであるが、地元の大学の若手民族学者による独自の研究である。

75. 古代チャンパ王朝の芸術と文明の研究 (T.K. フオン)

2~19世紀まで存在したチャンパ王国は、今日の中部ヴェトナムを中心に7~13世紀にかけて最盛期を迎えた。この王国の遺跡は、約100のヒンドゥー寺院があり、また博物館等に数千点の石彫刻が保存されている。

当研究では、この100寺院の建築学的実測調査、写真撮影、地理分布地図作成、彫刻の比較研究などを行う予定である。

当研究は、地元の博物館の学芸員を中心に、日本の建築史の専門家も協力して行われる本格的なチャンパ遺跡の調査である。

76. 17世紀から1975年までの南ヴェトナムの仏教 (T.H. リエン)

ヴェトナム南部の仏教は、華人とクメール人のコミュニティがあるという南部特有の民族的背景の下に、北部や中部とは独自の発達をみた。

当研究では、17世紀からヴェトナム再統一の1975年までの南部の仏教について、仏教の伝来、構造、組織形態、南部固有の仏教のセクトの出現などについてまとめる歴史学研究である。方法的には、文献研究を中心とする。

助成対象者は、南部出身の若手女性研究者であり、新しい発想からの研究である。

77. 北ヴェトナム中部の自然環境の再生と保護を伴いながら社会経済開発を行ういくつかの典型的モデルの構築 (N.N. トウアン)

北ヴェトナムの中部(内陸部)は、多くの少数民族の住む1つの典型的な生態系を成しているが、近年市場経済の浸透とともに環境の悪化、人心の荒廃など社会問題が生じてきている。

当研究では、ダム建設の重大な影響を受けたムオン族居住地など3か所を選び、環境、生態系を調査し、少数民族コミュニティの経済活動、社会文化活動を研究し、国内や海外で開発された社会経済開発モデルの方法論等を試行しつつ、環境、生態系、民族文化などに適合するモデルの構築を目指す。

78. 村神に関する文書の保存とドキュメンテーション (L.V. トアン)

ヴェトナム全土の村々では、祖先を祈念して英雄や村の設立者などを神とする村神崇拜が行われてきた。1938年と39年に当時のフランス植民地政府の命で、5,000村を超える村々の村神の物語がまとめられ、今日まで社会人文科学院の社会科学情報研究所に文書として保管されている。これらの文書は、その内容、量共に村神について研究を行うための基本文献であるが、その保存状態は悪く、目録等もつくられていない。当プロジェクトでは、文書の修復と整理、目録づくりを行い、文書の保存と利用の促進を図る。

79. ホーチミン市の女性労働者の雇用問題の実情と雇用創出のためのいくつかの基本的方向性 (B.T.K. クイ)

ヴェトナム戦争後の人口急増、都市部への人口流入、軍の削減に伴う旧軍人の失業など、ヴェトナムの雇用問題は大きな政策課題であるが、なかんずく経済の中心ホーチミン市はその典型例を示している。

当研究では、失業者の3分の2を占め、かつ低賃金の労働についていながら、家計収入をかなりの部分支えている女性労働力についての、ホーチミン市での実態調査と女性雇用創出のための政策の基本的方向性を打ち出すことを目的としている。

80. フエの民間信仰

(T.D. ヴィン)

ヴェトナム中部のフエは、ヴェト族が支配を確立する14世紀初めまでは先住のチャム族の土地であり、それ以降もチャムの文化とヴェトの文化が混ざり合った独自の地方文化を形成した。後には、阮王朝の王都となり封建文化の中心地でもあった。こうした歴史的、民族的背景の下に、フエには独自の民間信仰が存在している。当研究では、民間信仰に関連する民話の収集、古文書の収集、民俗画や宗教施設の調査、儀礼の参与観察などを通じて、フエの独自の民間信仰を明らかにすることを目的とする。

III-2. 国際助成：マレーシア東南アジア研究奨励助成

助成対象一覧

(継2)：継続2年目

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ドル)
81 (継2)	東スマトラとマレー半島のハドゥラーの比較研究 ライラン M. マラヤ大学東南アジア研究学科 修士課程	5,400
82 (継2)	“ドミサイル”から“ドメイン”へ：独立後のフィリピン、マレーシアの現代文学の代表作品の形成 L.J. マラリ マレーシア国民大学ムラユ世界文明研究所 博士課程	7,800
83 (継2)	マヨン：マレー世界の歌謡と芸術 J.S. フェルナンド マラヤ大学東南アジア研究学科 修士課程	5,500
84 (継2)	19世紀のタイ：近代化の始まり マラ・ラジヨ S. マラヤ大学歴史学科 修士課程	1,600
85	1900年から1942年のマレーシアの英字新聞からみた植民地支配の形態 V.T.T. グエット マラヤ大学東南アジア研究学科 修士課程	6,200
86	レゴン峡谷の旧石器遺跡とその東南アジア考古学への貢献 ムハマッド・モフタル S. マレーシア科学大学 博士課程	4,900
87	先史時代のニア陶器の起源とその東南アジアにおける位置 ステファン C.M.S. マレーシア科学大学 博士課程	8,100
88	感情の文化人類学的分類：マレー人とバリのイスラム教徒の比較研究 ザイダー M. マレーシア国民大学 博士課程	3,200
89	シンガポール港のインフラストラクチャーの発展と拡大，1819年－1941年 ハニザ b.l. マラヤ大学東南アジア研究学科 修士課程	2,400
90	シンガポールの防衛施設の発展とその防衛，1819年－1927年 シテイ K.M.S. マラヤ大学東南アジア研究学科 修士課程	2,400

研究題目 代表者 所属		助成金額 (ドル)
91 発展する三角地域：ジョホールーシンガポールーリオウ*		
グルメト K.A.M.S. マラヤ大学経済行政学部 修士課程		1,600
小 計	11 件	49,100 ドル (5,783,084 円)
国際助成合計	91 件	886,900 ドル (104,446,916 円)

* 助成対象者の都合により助成辞退。

助成対象概要（国際助成：マレーシア東南アジア研究奨励助成）

81. 東スマトラとマレー半島のハドゥラーの比較研究

(ライラン M.)

当研究者は、現在マラヤ大学の修士課程に籍をおくインドネシア人である。

ハドゥラーとは、マラッカ海峡の兩岸東スマトラとマレー半島にみられるイスラム神秘主義の流れをくむ文化ショーである。その起源は15世紀頃と考えられ、レバナやグンダンと呼ばれる伝統楽器の伴奏で踊り唄うショーであるが、現在は失われつつある。

当研究は、東スマトラとマレー半島に存在するハドゥラーの踊りの振り付けを記録し、また唄を楽譜に著し、比較研究することによってそのルーツを探る。

82. “ドミサイル”から“ドメイン”へ：独立後のフィリピン、マレーシアの現代文学の代表作品の形成 (L.J. マラリ)

当研究者は、現在マレーシア国民大学の博士課程に籍をおくフィリピン人である。

東南アジア諸国の多くは、20世紀半ばに植民地から独立した経験を有するが、植民地時代の文化形成には支配者側の見方が反映されている。当研究は、植民気質の認識が、独立後どう変化したかをフィリピンとマレーシアの文学に焦点をあて、比較研究するものである。独立後の代表作品の内容分析および作品が生み出された背景にも注目する。第1年度に続き、本年度も現地での資料の収集およびインタビューを行う予定である。

83. マヨン：マレー世界の歌謡と芸術

(J.S. フェルナンド)

当研究者は、マラヤ大学の修士課程に籍をおくマレーシア人である。

マヨンとは、マレー文化圏にみられる伝統的歌謡であり、マレーシアのみでなくインドネシア、南タイ、南カンボジアなどでも歌われている。当研究は、これらの国にフィールド調査を行い、それぞれの地域でのメロディーライン、歌謡のスタイルと心理、歌手のプロフィール、またその地域の音楽との関係および東南アジアにおけるマヨンの影響を考察する。本年度は、カンボジア、インドネシアでデータを収集し、修士論文を執筆する。

84. 19世紀のタイ：近代化の始まり

(マラ・ラジョ S.)

当研究者は、現在マラヤ大学の修士課程に籍をおくマレーシア人である。

タイは、仏教国であるが、キリスト教の使節団を寛容に受け入れ、特にチェンマイを中心とした北タイには、多くのミッションが入り、彼らの残した文書・書簡が保管されている。当研究は、これらの文献を利用し19世紀北タイの社会経済変化に関する歴史研究を行う。当研究者はタイ語をマスターして、長期に文献調査を行う予定である。第2年度は、タイのチェンマイに長期に滞在し史料収集を継続し、修士論文を執筆する予定である。

85. 1900年から1942年のマレーシアの英字新聞からみられた植民地支配の形態 (V.T.T. グエット)

当研究者は、マラヤ大学修士課程に入学予定のヴェトナム人である。

イギリス領マラヤでは、各地で英字新聞が発行されていた。当研究は、特にクアラ Lumpur、ペナンおよびシンガポールで1900~42年に発行されていた英字新聞を取り上げ、それらの新聞を分析することにより、当時のマラヤにおける植民地支配の形態を研究することを目的としている。すなわち、それらの新聞記事にみられるマラヤ社会とその出来事に対するイメージ、偏見および認識のパターンを明らかにする。

86. レゴン峡谷の旧石器遺跡とその東南アジア考古学への貢献 (ムハマッド・モフタル S.)

当研究者は、現在マレーシア科学大学の博士課程に籍をおくマレーシア人である。

マレーシア、ペラック州のレゴン峡谷の旧石器遺跡では、コタ・タンパンの旧石器の分類方法が確立されているが、当研究では、この分類方法の有効性を同地域に隣接したカンポン・テメロンおよびその他のレゴン峡谷内の新しい遺跡を発掘して検証し、同峡谷の先史期の再構築を試みる。またヴェトナム、タイ、インドネシアの数か所の旧石器遺跡で出土された旧石器を比較して、東南アジアに適用できる旧石器分類方法の開発を目指す。

87. 先史時代のニア陶器の起源とその東南アジアにおける位置 (ステファン C.M.S.)

当研究者は、現在マレーシア科学大学の博士課程に籍をおくマレーシア人である。

マレーシア、サラワク州のニア洞穴で出土された先史時代の陶器、特に三色器は、サーフィン-カラナイ陶器コンプレックスとして知られているヴェトナム、フィリピンおよび他の東南アジアの遺跡の陶器と関連づけられてきた。当研究は、このニア洞穴の陶器について、それらの東南アジアの陶器および新たに地層ごとに発掘するニア洞穴の陶器を形態および成分に基づいて比較分析し、その起源と東南アジア地域における位置を研究する。

88. 感情の文化人類学的分類：マレー人とバリのイスラム教徒の比較研究 (ザイダー M.)

当研究者は、現在マレーシア国民大学の博士課程に籍をおくマレーシア人である。

人の感情は、単に心理学分野の研究対象となるのではなく、それが異なった社会では異なって表出し管理されていることから、文化人類学的に研究する動きが出ている。当研究は、こうした観点に立って、マレー人とバリ島のイスラム教徒の感情について、感情を表現することばの分析を通しておのおのの感情に関する概念を明らかにし、また誕生、結婚、死などのライフ・サイクルの各段階における感情を性、年齢、集団等別に比較分析する。

89. シンガポール港のインフラストラクチャーの発展と拡大, 1819年-1941年 (ハニザ b.l.)

当研究者は、現在マラヤ大学の修士課程に籍をおくマレーシア人である。

19世紀の東南アジアには、シンガポール港に劣らない港がバタヴィア(ジャカルタ)、スラバヤ、サバン、マニラに存在した。しかし、第2次世界大戦前に飛躍的に発展したのはシンガポール港である。当研究は、シンガポール港が貿易の発展や船舶の燃料が石炭から石油に変わり、技術発展が起こったことに巧みに対応してインフラストラクチャーを拡充した経過を追い、他の港との比較により、その発展の背景を実証する歴史研究である。

90. シンガポールの防衛施設の発展とその防衛, 1819年-1927年 (シテイ K.M.S.)

当研究者は、現在マラヤ大学修士課程に籍をおくマレーシア人である。

18世紀以降のシンガポールの年間予算に要塞建設費が大きな割合を占めているが、シンガポール港が東南アジアで最も要塞化した港であることはあまり知られていない。当研究は、1819年以降シンガポールが多額の軍事費を支出してきた理由を、船舶が帆船から石炭を燃料とする蒸気船、そして石油を燃料とするように技術的に変化したことに対応して防衛メカニズムを変化させた点に求め、他の港と比較して実証することを目的としている。

91. 発展する三角地域：ジョホール-シンガポール-リオウ (グルメト K.A.M.S.)

当研究者は、現在マラヤ大学の修士課程に在籍するマレーシア人である。

1989年より、マレーシアのジョホール、インドネシアのリオウ(バタム島)およびシンガポールを結ぶ三角地帯を1つの投資地域とし、前2地域が土地、ガス、水、労働力を、シンガポールが経営技術を提供することにより、3か国共同で同地域の経済開発を実施している。当研究は、同地域の成長、投資の流れ、労働や技術の流れおよび貿易の結合など経済的結合を分析し、またこの政策がジョホールおよびマレーシアに与える影響を探る。

(助成対象者の都合により助成辞退)

III-3. インドネシア若手研究助成

助成対象一覧

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
1	ボゴール市——都市形態と都市社会の形成に関する研究 (18世紀から20世紀) —— ムムー ムフシン Z. パジャジャラン大学文学部 講師	4,500,000
2	プサントレン (イスラム塾) における価値観の一致に対するキアイ (師) とサントリ (弟子) 関係の影響——バンドウンのプサントレンでのサントリの社会化過程に関する研究—— イブヌ ハジャール メダン教育大学教育学部 講師	2,550,000
3	環境に配慮した行動の形成の法的側面——南スラウェシ州ボネ県ボンレ郡の事例研究—— ムハマッド ユヌス ハサスディン大学法学部 講師	4,650,000
4	観光の影響の結果としてのバリ語使用の変化——バリ, クタ観光地区の事例研究—— プスット スタマ ウダヤナ大学文学部 講師	1,800,000
5	バンドウンの繊維産業での労働者と会社側の対立 デニー ラムダニー ジャヤバヤ大学政治社会学部 講師	3,000,000
6	キアイと施薬——東ジャワ, セノリ・トゥバンにおける施薬を通じてのキアイのカリスマ性と社会衛生に対する役割の研究—— マリア ウルフア ワリソゴ・イスラム高等学院 講師	2,500,000
7	南スラウェシ州のマカッサル族の民俗文学におけるシンリリック民話を詠む伝統 リトワン エフェンディ マカッサル芸術協会 スタッフ	3,300,000
8	東ジャワ, マラン市の中国系移民——移民の背景, 移動の程度, 社会経済的な意味に関する研究 アブドゥル ハキム ブラウイジャヤ大学行政学部 講師	5,300,000
9	東サトウガラ州東フローレスのワイコモ・レウォレバの水田地帯の農民社会の経済活動 イグナティウス シヌ スサ・チェンダナ大学農学部 講師	3,950,000
10	スマラン, ジョグジャカルタ, スラカルタ, バニユマスの児童労働——社会, 文化, 経済, 法的側面の研究—— アントニウス シディック M. スディルマン将軍大学法学部 講師	3,400,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
11	マラン市における民間企業の政治ダイナミズム——新秩序時代の中小企業の研究—— ハルヤディ アイルランガ大学社会政治学部 講師	3,950,000
12	トゥトゥール年代記に見るマックスゴロー世の世界観——文学の社会学の一研究—— M. ザイスッディン ファナニ ムハツマディヤ大学 講師	3,500,000
13	グループ指導の技法としてのマディヒン・ゲームを通じての学校における生徒の社会適応行動の向上 M. タハ ランプン・マンクラット大学教育学部 講師	3,900,000
14	ジャワ農村における伝統的指導者——マゲランのプサントレン・パベランにおける宗教、イスラム指導者、指導力の研究—— アミツ アルフマニ インドネシア大学 大学院生	3,600,000
15	禁書——独立運動期の文化と政治—— ラジフ 文化研究センター 出版コーディネイター	4,000,000
16	農村の若い女性の労働の動機=収入、快適、結婚——中部ジャワ、クブメン地区ソッカの屋根瓦工場群の労働者の研究—— ムスリフディン スディルマン将軍大学法学部 講師	3,300,000
17	植民地時代（1900年—1930年）のパダンにおける農産物商売——都市経済史研究—— アドリアル アドリ アンダラス大学文学部 講師	4,370,000
18	東ヌサ・トゥンガラ州西チモール社会において地域ごとに伝統的なアグロフォレストリの型の選択を決める諸要素 ジェニー ヨハンナ スエック ヌサ・チェンダナ大学農学部 講師	4,350,000
19	伝統薬ジャム・グンドン売り——ジャム・グンドン売りになる女性の動機と家庭での役割、サラティガ市の事例—— エリザベート パリ トラジャ・キリスト教大学 講師	4,000,000
20	カリサラックの K.H. アフマッド・リファイ——その思想と 19 世紀のイスラム運動—— アブドゥル ジャミル ワリソゴ・イスラム高等学院 講師	3,850,000
21	19 世紀ブトンのスルタン領における権力システムの中の神秘主義イスラムの位置 アブドゥル ラヒム ユヌス アラウディン・イスラム高等学院 講師	4,520,000
22	スندا地方の女性を拘束する三つの格言の鎖の切断——現代スندا女性の役割の現象学的考察—— エリダ スフィアニ A. パジャジャラン大学 大学院生	4,120,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
23	法人類学的に見た社会コントロールの一形態としての平和の慣習法——エンガノ島での結婚慣習法のいくつかの事例—— アンドリ ハリヤント ブンクル大学法学部 講師	3,230,000
24	1982年から1992年の期間にスラカルタで上演されたワヤン・クリット(影絵芝居)の演目の中の天啓劇の研究 バグハワン チプトニン インドネシア芸術大学芸術学部 講師	4,990,000
25	北スマトラ, シマルグンの1つの農園の農業労働者とジャワ農民社会における親族組織と社会交換の類型 エディ イフサン 北スマトラ大学法学部 講師	2,900,000
26	北スマトラ州サラック郡の再定住村プログラムの障害——民族エコロジー的研究—— タンダック ブルトウ シシガマンガラジャ大学 講師	3,500,000
27	EXOR I 石油精製プラント建設のインDRAMU郡の社会の文化・社会に与える影響 ウジャン スラトノ ウィラロドゥラ大学法学部 講師	4,600,000
28	女性政治家のプロフィール——女性国会議員の背景, 態度, 政治的野心と方向性に関する研究—— カチュン マリジャン アイルランガ大学女性研究センター 研究員	4,500,000
29	ポノロゴの同性愛者 ——ジャワ文化のサブ・カルチャーとしてのポノロゴ郡の文化と同性愛者の関係—— セトヤ ユワナ スラバヤ教育大学言語芸術教育学部 講師	3,700,000
30	会社と労働者の間の労働関係のパターン——プカログンの紡績会社における社会関係の構造に関する研究—— エルナ ロハナ ガジャマダ大学 大学院生	3,750,000
31	プスタハ文書——マンダイリン族の1つの古文書の翻字, 翻訳と医療人類学的研究—— ズルキフリ ルビス 北スマトラ大学社会政治学部 講師	4,500,000
32	内陸部のテオン・ニラ・セルアの人々の社会変化 セフナット スリアリ パティムラ大学教育学部 講師	4,650,000
33	労働者, 資本主義, 国家——独立前と独立後の国家とプランテーション資本主義の比較: 北スマトラ, 1870—1959と1960—1992—— ファイサル シアギアン インドネシア大学 大学院生	3,900,000
34	パスルアン郡の養魚民の労働関係と収入に与える漁業の商業化と土地の権利制度の構造変化の影響 アグス チャフヨノ ブラウイジャヤ大学水産学部 講師	3,700,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
35	丁字貿易制度の実施以降の丁字農民の福祉レベルと生存戦略 ブリヨノ 社会経済・マスコミ研究センター 研究員	5,350,000
36	南ロンボックの危険地帯での陸稲水田体系への生産技術転換に対する農民の構造的、社会文化的反応 ハリル マタラム大学農学部 講師	4,700,000
37	家計活動における青果物移動小売りの女性の適応戦略に関する研究——南ジャカルタのパサール・ミングの事例研究—— スラティ スウィリョ 個人	4,650,000
38	女性村長の指導力の対立——ラモガン県、スコダディ郡、カラン・ティンギル村の村長に関する叙述的研究—— フィトリ インダ S. パリハタ・ヌサパダ財団 研究員	3,500,000
39	マンガライ郡の農民による経営体系と土地利用パターンに対する文化体系の影響 アグスティヌス マフル ヌサ・チェンダナ大学法学部 講師	5,000,000
40	バリのギリマヌックの墓跡遺跡に関する古人口学研究 ファディラ アリフィン A. 国立考古学研究センター 研究員	3,625,000
41	11世紀から15世紀の古代ジャワ社会の舞台芸術——芸術の構造と機能についての一考察—— ムザキル ドウウィ C. マラン教育大学 講師 研究員	3,815,000
42	農村社会の舞台芸術の生活パターンとしてのルドルック、そのメカニズムとダイナミズム——東ジャワ、ベスキの事例研究—— ノヴィ アスフラジェクティ ジュンベル大学文学部 講師	3,700,000
43	バリ文学に現れるサム・ペック・エン・タイ——テキストの編集、翻訳および構造と受容の研究—— I.D.G.W. サンチャヤ ウダヤナ大学文学部 講師	2,700,000
44	アンボンのクリスチャン・コミュニティをイスラム・コミュニティに密着させる存在としてのペラの伝統についての研究 トゥリ ラトナワティ インドネシア科学院政治地域研究センター 研究員	4,150,000
45	西ヌサトゥンガラ州ドンブ郡のアラン・アラン草地のエコシステム利用方法の変化に対する農民の社会文化的適応戦略 シャムスディン マタラム大学農学部 講師	4,500,000
46	オンピリンの石炭鉱山労働者の生活——1890年—1940年—— ザイヤルダム アンダラス大学文学部 講師	3,850,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
47	民衆中核農園参加農民の社会とライフ・スタイルの変化に関する研究——西カリマンタン, パリンドウの事例研究—— タデウス ユス タンジュンプラ大学法学部 講師	4,000,000
48	労働争議コントロールの為の手段としての治安機構の役割に対する労働者の認識——ジョグジャカルタのある郡の事例研究—— デディ プリハンブディ 法律援護協会 研究員	4,000,000
49	東南アジアにおける陸上汚染源による海上汚染の地域調整と制度の整備 マルスティ トウリアトモジョ ガジャマダ大学法学部 講師	5,400,000
50	インドネシア人のジェンダー・リレイションにおける隠された力——インドネシア, ジャワ農村の事例研究—— シティ クスジアルティ ブンクル大学社会政治学部 講師	4,950,000
51	ジュンベル人——ジャワ人とマドゥラ人の相互作用から集団が形成される様相—— マウラナ スルヤ クスマ ジュンベル大学社会政治学部 講師	4,400,000
52	ダヤク・ンガジュ族社会における人間と環境の概念とその適用——中部カリマンタン, ブキット・ラウィ村の神話と生活の分析研究—— ムジマン ルス A. パランカラヤ大学教育学部 講師	4,665,000
53	タレカット (イスラム神秘主義) と政治——ナフダトゥル・ウラマの“1926年行動”以降の中部ジャワ, ムランゲンとマランのタレカット, クァディリヤーナクサバンディア—— ナシッ リトワン バンキット誌 編集者	4,400,000
54	社会の劇場としてのルドゥルック演劇——東ジャワのルドゥルック芸人の生活, 組織, 生産性, 人々の鑑賞についての研究—— カシヤント 新聞・世論研究所 研究員	4,700,000
55	外部の人の流入の結果としてのサカイ族の社会構造変化——リアウ州ブンカリス県マングダウ郡の事例研究——* ヌルシルワン エフェンディ アンダラス大学文学部 講師	5,870,000
56	南スラウェシのブギス・マカッサル社会でのライ病の概念に関する知識, 態度, 行動についての研究 ジョハンナ マントウ K. ハサスディン大学医学部 講師	4,400,000
57	ジャワ社会における性的抑圧——民衆芸能タユバンの研究—— ジャトミコ タスウィジョヨ アロシタ研究情報センター 研究員	4,500,000
58	産業労働者のストライキ戦略とそれに影響する社会的コンテクスト——ジャカルタとその周辺で起きた幾つかのストライキの研究—— アボン ヘルリナ 法律援護協会 研究員	3,700,000

	研究題目 代表者 所属	助成金額 (ルピア)
59	マンガライの文化におけるトラ・カバ儀礼 マルセルス ロボット ヌサ・チェンダナ大学教育学部 講師	4,500,000
60	ウガモ・マリム——バタック・トバ族の部族宗教の再興—— ショヒブル アンシヨル S. 北スマトラ・ムハツマディヤ大学教育学部 講師	5,000,000
61	東カリマンタンのダヤク・ケンヤー族の森林資源の保存と利用——東カリマンタン奥地のロンウリ村 とロンアラング村の事例研究—— ブラジャン コンラドウス ヌサ・チェンダナ大学農学部 講師	4,800,000
62	スラバヤに住むマドゥラ出身の屑鉄商人の経済行動 チョイルル サレー ブラウィジャヤ大学行政学部 講師	3,900,000
63	ジョグジャカルタの宮廷の伝統舞踊への西洋の影響 スプリヤンティ インドネシア芸術大学芸術学部 講師	4,470,000
64	南スラウェシ州ブルクンバ県タナ・レモでの伝統帆船竣工祝いの儀礼におけるヒロイズムの側面 ——文化人類学・言語学的研究—— ヌルディン ランゴレ ハサスディン大学文学部 講師	4,500,000
	合 計 64 件	262,025,000 ルピア (127,200 ドル) 15,002,700 円

* 助成対象者の都合により助成辞退。

III-4. 「隣人をよく知ろう」プログラム： 日本向け・翻訳出版促進助成

助成対象一覧

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名 (原著国名)	出版社名	助成金額 (円)
1	海底火山 中村 禮子	<i>Wadabaginna</i> スーシーウィターナゲ Anula Wijayaratna Menike (スリランカ)	段々社	1,960,000
2	虚構の楽園 加藤 栄	<i>Nhung Thien duong mu</i> Duong Thu Huong (ヴェトナム)	段々社	2,370,000
3	インドにおける発展の政治経済学 近藤 則夫	<i>The Political Economy of Development in India</i> Pranab Bardhan (インド)	勁草書房	860,000
4	シンガポール経済の政策選択 岩崎 輝行 森 健	<i>Policy Options for the Singapore Economy</i> Lim Chong Yah (シンガポール)	井村文化 事業社	5,730,000
5	マレーシアの抗日文学——マレー文 学・華語文学に見る大東亜戦争—— 原 不二夫 今仁 直美	馬華新文学大系(四)小説二集, 一個日本女間諜ほか 方修, 張一倩, 陳全ほか (シンガポール)	井村文化 事業社	1,530,000
6	最後の首長——カラーコラムに激動の 時代を生きた政治家貴族の自伝—— 子島 進 麻田 豊	<i>The Last Wali of Swat-An Autobiography as told to Frederik Barth</i> Frederik Barth (パキスタン)	勁草書房	1,660,000
7	花を担いで 片山 須美子	<i>Ganh Hang Hoa</i> Khai Hung, Nhat Linh (ヴェトナム)	穂高書店	1,250,000
8	ヒンドウスターン音楽大系 上・下巻 田中 多佳子 井上 貴子	<i>Hindustani Sangit-paddati-kramik pustak</i> Visnu Narayan Bhatkhande (インド)	穂高書店	5,530,000
9	さとりへの道 中谷 英明	<i>Dhammapada Gandhari Dharmapada/Udanavarga</i> Fausboll/Brough/Bernhard (インド)	平凡社	1,810,000
10	インド古典正統論理学派の哲学 竹中 智泰	<i>Nyayabhasya</i> Vatsyayana (インド)	平凡社	2,520,000

	日本語仮題名 訳者名	原著名 著者・編者名 (原著国名)	出版社名	助成金額 (円)
11	ブリハット・サンヒター 矢野 道雄 杉山 瑞枝	<i>Brahatsamhita</i> Varahamihira (インド)	平凡社	2,240,000
12	フィリピン研究入門 1, 2 寺田 勇文 玉置 泰明 赤嶺 淳 石井 正子 宮原 暁ほか	<i>General Characteristics of Contemporary Religious Movements in the Philippines</i> ほか Prospero R. Covar ほか (フィリピン)	めこん	5,600,000
13	ミール詩集 松村 耕光	<i>Kulliyat-e Mir</i> Mir Taqi Mir (パキスタン)	平凡社	1,120,000
	合 計	13 件		34,180,000

助成対象概要（日本向け・翻訳出版促進助成）

1. 海底火山

この作品は、1970年代のスリランカの農村生活を背景に書かれたシンハラ語社会小説である。著者は将来を囑望される若手女流作家である。小説の主人公は、シンハラ社会に溶け込もうとしているタミル人で、田舎で自転車預かりをしながら、粗末な茶店を営んでいた。この田舎町にも開発の波が押し寄せ、土地が高騰していくなかで、主人公はシンハラ人とタミル人の抗争に巻き込まれ、キャンプへ収容されてしまう。このように、現代スリランカの抱える民族・開発問題などを、主人公の知り合いである「私」の目を通して描いた作品である。

2. 虚構の楽園

戦後16年を経たヴェトナムでは、新しい国家建設の方途を模索するなか、歴史の見直しが進められている。1950年代の土地改革が残したしこりは、現在もなお多くのヴェトナム人の心に怨念の炎をくすぶらせているといわれる。本編は、土地改革が引き起こした悲劇を真正面から取り上げた意欲作である。作者は新進気鋭の若手女流作家で、女性を主人公とする作品を数多く発表してきた。本編でも、特に一女性主人公のたぎるような執念の描写は圧巻である。なお、ドイモイ以後のヴェトナムで長編小説としては、日本初の翻訳となる。

3. インドにおける発展の政治経済学

インドの体制論を資本家層、富農層、官僚層の3者を支配的階層としてとらえることによって論じている。さらに、インドでは経済運営が政治的過程と過度に密着していることや、インド社会の複雑性により、必要な思い切った決定が行われ得ないとしている。このような政治経済過程のうちにインドの低発展の原因を求めている。論理の展開が明確で、多くの読者に分かりやすくインドの政治経済論を紹介できる。さらに専門家の間でも評価が高く多く引用されていることから、日本においても翻訳によって広く読まれる価値があると考えられる。

4. シンガポール経済の政策選択

本書は、シンガポール国立大学の経済学者26人が、1985年までのシンガポール経済の分析に基づき、長期的経済政策の提言を行ったものである。その範囲は、人口、土地利用から政府の役割、所得再分配にまで及び、経済成長への制約要因も議論されている。自他共に許すNIEsの優等生、シンガポール経済の現況と問題を簡潔に説明し、シンガポール経済のよき参考書となるのみならず、専門家にも参考になるものである。26人の大学人の共同執筆は、シンガポールでは異例であるが、さらに異例なのは、政府とは独立の見解を表明していることである。

5. マレーシアの抗日文学——マレー文学・華語文学に見る大東亜戦争

マレー半島の日本軍占領時代をテーマにした現代文学作品は、日本ではほとんど知られていないが、意外と数多く質も高い。そこで、マレー語文学・華語文学（マレーシアの華語文学）双方の作品のなかで代表的な短編6編を選び、日本に紹介する。マレー文学では、『剣の先の生命』（アハマツト・ムラド）と『強制労働』（サマッド・サイド）。馬華文学からは、『八九百個』（乳嬰）、『小城之夜』（陳全）、『白蟻』（鉄抗）、『一個日本女間諜』を取り上げる。1930年代後半から独立（1957年）に至るマラヤ華人の歩みがこれらの作品に凝縮しているといつてよい。

6. 最後の首長——カラーコルムに激動の時代を生きた政治家貴族の自伝

パキスタン北部のスワート地方は、イギリス領インドの辺境にあった。1947年のパキスタン独立後同国に併合されるまでの20年間を、「最後の首長」としてこの地方を統治してきたミヤーングル・ジャハーンゼーブが彼の一生を文化人類学者フレデリック・バースに語った伝記である。彼個人のみならず、この時代と地域の「部族国家」の形成と政治・社会、文化・風習を詳細に伝える第1級の1次史料であり、概説書ではない多事にわたる興味深い事件を伝えている。人類学・政治学・現代史の研究者にも大きく裨益する1冊である。

7. 花を担いで

1930年代初期に結成され、伝統的礼教思想に反対し西洋の合理精神を称揚する作家集団「自力文団」の2人の作家の共作による長編小説中の1編である。社会主義ヴェトナムでは、長年顧みられることがなかったが、長い戦乱が終結し、視点が内なる敵へと変わり、家庭の問題、男女・親子の問題等がクローズアップされ始めるや、このような諸問題に立ち向かうことの多かった「自力文団」の諸作品が再び注目を集めた。本著も、ハノイ郊外で花づくりを業とする若い2人を描き、2人の愛情を縦糸、夫とその男友達の友情を横糸として織りなされる。

8. ヒンドウスターン音楽大系 上・下巻

昨今は日本でもシタールを学び、若しくは北インドの古典音楽を愛好する層が一段と厚くなっている。著者のバートカンデーは、北インド古典音楽の数千年の伝統を理論上集大成した巨人である。マラーティー語による全6巻の大半は、彼が北インド各地で発掘し、採集した歌曲の譜例集であるため、本訳書では、各巻冒頭にある簡潔にまとめられた音楽理論についての基礎的知識の章を1冊に集め、入門書の形式を調べ譜例で本論を補うという形をとる。教授法、習得法、また実際の譜例もある、というプラクティカルな面も損なわないようにする。

9. さとりへの道

原始仏教は、幾世紀を経て部派仏教、大乘仏教、密教へと展開するが、日本に伝来し、現に行われる仏教ははたして当初の形をどのように伝えているであろうか。近年、北西インド、中央アジア、チベットから、仏典のなかでも最古層に属する詩節群『法句経』(ダルマ・パダ)の3種のインド語写本が発見された。『悟りへの道』は、これら仏教最古の1群の詩節を、最新の文献学的方法(音韻、韻律、語系論など)により、新発見の写本から原形を再構して和訳し、わが国に初めて紹介するものである。

10. インド古典正統論理学派の哲学

『ニヤーヤ・スートラ』は、ニヤーヤ学派の開祖とされるガウタマに帰されるが、現存の形が整えられたのは西暦3、4世紀と考えられている。翻訳するヴァーツヤヤナ(5世紀)の『ニヤーヤ・バーシュヤ』は、このスートラに対する最古の注釈であり、インド論理学の理解には最も基本的な文献である。インド古典論理学は、言語思想と並んでインドで最も発達した領域であり、体系期の諸哲学学派にとっては、その哲学思想を表現する最有効手段であった。インド人の思惟方法を知ろうとしても重要な分野であるが、いまだ信頼に足る邦訳はない。

11. プリハット・サンヒター

本書はインド最大の占星学者、天文学者であるヴァラーハミヒラ(6世紀)の主著である。占星術の全領域を取り扱っているほか、インドの社会・文化について多様な情報を提供する百科全書的な作品である。作者が論じているなかには、女性の賛美など、文学的にみて優れた描写も含まれている。本書は占星術において最も権威ある作品であるとともに、インド文化史においても最も重要な作品の1つである。本書は一般読者にも興味ある多くの話題を提供することであろう。本書の翻訳は、計り知れない意義を有するものと思われる。

12. フィリピン研究入門 1, 2

フィリピンの多数民族であるタガログ人、イロカノ人、セブアノ人など低地のキリスト教徒フィリピン人の民族、社会、文化、宗教、行動様式などに関するフィリピン人研究者による論考10数編を独自に編集し、解説を加えたものである。原典は、*Philippine Studies*、*Asian Studies*、*Philippine Quarterly of Culture and Society*、*Diliman Review*、*Philippine Sociological Review*など、フィリピンを代表するジャーナルに発表された論文から選ばれる。本書は、フィリピン社会を内側から、フィリピン人の目を通して理解するための試みである。

13. ミール詩集

ミール・タキー・ミールのガザル(定型の抒情詩)のなかから、代表作を訳者が選び翻訳する詩集である。中世後期、北インドの政権が変転きわまりなく、後援者を戦乱で失ったミールは、近親者との恋が発覚し家を捨て首都デリーに行くが、そこも政情が不安で、ラクナウに移る。多難な生活のなか、感じた騒然たる世相、苦悩と絶望などを詩人は詠んだ。学芸を重んずる家に生まれ、貴族の庇護の下に名を成しながら詩人も時代の波にもまれた。そのなかでの詩は、当時のウルドゥー詩の約束ごとを超え私たちに訴えるものがある。

III-5. 「隣人をよく知ろう」プログラム： アジア相互間・翻訳出版促進助成

(継2)：継続2年目
(継3)：継続3年目
(継4)：継続4年目
(継5)：継続5年目
(継6)：継続6年目
(継7)：継続7年目

助成対象一覧

	プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
1 (継6)	<i>Thailand: Buddhist Kingdom as Modern Nation State</i> のインドネシア語への翻訳と出版 M. サストラプラテジャ カルティ・サラナ財団 副理事長	7,400
2 (継4)	<i>Stories from TENGGARA</i> のマレーシア語への翻訳と出版 アブバカル H. 学術振興財団 理事長	8,700
3 (継2)	<i>Folk Tales from Asia for Children Everywhere Book 2, 3, 4, 5, 6</i> のラオ語への翻訳と出版* フンパン R. 情報文化省文化研究所 所長	18,100
4	『昭和期日本とインドネシア』のインドネシア語への翻訳と出版 モフタル ルビス オボール財団 理事長	9,000
5 (継7)	<i>The Political Economy of Japan, Vol.3</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 V.D. ルオック 国立社会人文科学センター世界経済研究所 所長	13,000
6 (継7)	<i>A History of Japan, Vol.2</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 N.D. ジェウ 国立社会人文科学センター社会科学出版局 局長	13,000
7 (継5)	<i>Transfer of Japanese Technology and Management to the ASEAN Countries</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 N.T. ミ 国立社会人文科学センター東南アジア研究所 研究員	9,500
8 (継4)	<i>The Setting Sun</i> (『斜陽』) と <i>Twilight in Djakarta</i> のベンガル語への翻訳と出版 F. ラッビ アフメッド記念財団 専務理事	4,100 4,900
9 (継2)	<i>The Anatomy of Dependence</i> (『甘えの構造』) と <i>Japanese History Cartoon Vol.12, 14, 16</i> のタイ語への翻訳と出版 チャンウィット K. 社会科学・人文科学教科書プロジェクト推進財団 事務局長	5,000 8,000
10 (継2)	<i>An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926</i> と <i>Malays in Singapore: Culture, Economy, and Ideology</i> のマレーシア語への翻訳と出版 ジョモ K.S. フォーラム	10,400 6,700

プロジェクト題名 代表者 所属	助成金額 (ドル)
11 (継3)	6,000
<i>Japanese Women Writers, A Road with No Ends, Naughty Koko</i> (『わからんちんのココ』), <i>Suho's White Horse</i> (『スーホの白い馬』), <i>Hanako, The Greedy Calf</i> (『くいしんぼうのはなこさ ん』) のウルドゥー語への翻訳と出版	6,200 9,900 9,900
S. アンシャリ マシヤル財団 事務局長	10,000
12	6,000
<i>Japanese Relation with Vietnam : 1951-1987</i> のヴェトナム語への翻訳と出版 L.V. サン ヴェトナム・アジア太平洋経済センター 所長	6,000
13 (継7)	4,000
<i>Urashimataro</i> (『浦島太郎』) のシンハラ語への翻訳と出版 D.A. ラジャカルナ 日本文学翻訳委員会 委員長	4,000
小 計	169,800 ドル (19,995,937 円)
	13 件 (24 冊*)

*3は、5冊に数える。

助成対象概要 (アジア相互間・翻訳出版促進助成)

1. *Thailand: Buddhist Kingdom as Modern Nation State* のインドネシア語への翻訳と出版 (M. サストラプラテジャ)

本書は、仏教国タイを包括的に論じて、評価の定まっているチャールズ・カイスの著作である。インドネシアはタイと同じ東南アジアにあり地理的に隣接しているが、タイを理解するために適した書籍がほとんどない。本書は、その意味で、タイ社会のありさまをその社会の精神的根幹をなす仏教と歴史的背景を踏まえうえて包括的に著したものである。

カルティサラナ財団は、これまで日本の文学作品や人文・社会科学書のインドネシア語での出版を多数手がけたが、本年度は近隣の東南アジアの国の紹介を目指す。

2. *Stories from TENGARA* のマレーシア語への翻訳と出版 (アブバカール H.)

本書は、東南アジアの文学を対象とした唯一の英字文芸雑誌 *Tenggara* から、東南アジア各国の短編を選び1冊の本に編集したものであり、当プロジェクトはそれをマレーシア語に翻訳し、出版しようというものである。

Tenggara は、東南アジアの文学作品やその評論を知るうえで貴重な情報を掲載しているが、英語で書かれているため、マレーシアの一般の人々、特に若い世代には読みこなすことは容易でない。その意味で東南アジア諸国の文学作品をコンパクトな形で紹介する本書のマレーシア語での出版は、意義あることといえる。

3. *Folk Tales from Asia for Children Everywhere Book 2, 3, 4, 5, 6* のラオ語への翻訳と出版 (フンパン R.)

本書は、東京のユネスコ・アジア文化センターがアジア共同出版事業の一環として、ユネスコ加盟アジア諸国から共同出版事業参加者がそれぞれの国の民話を持ち寄り、英語で編集・出版したものである。第1~6巻までが出版されているが、ラオスでは第1巻のみが20年ほど前にラオ語に翻訳出版されただけで、以降の巻は翻訳されなかった。

今回の翻訳出版事業では、残りの第2~6巻までに収録されている38のアジアの民話をラオ語に翻訳し、3巻本として出版の予定である。

4. 『昭和期日本とインドネシア』のインドネシア語への翻訳と出版 (モフタル ルビス)

本書は、早稲田大学社会科学研究所教授の後藤乾一の著作である。著者は、インドネシアにおける日本軍政の研究の第一人者で、本書も昭和初期に南進論、インドネシアの邦人社会、インドネシア知識人の対日本観、インドネシアの在日留学生などを丹念に研究し、当時の日本とインドネシアの関係を解明している。

インドネシア史研究において空白部分となっている日本軍政期を扱っており、また日本理解を促し今後の対日関係に示唆を与える作品として、本書をインドネシアに紹介する意義は大きい。

5. *The Political Economy of Japan, Vol.3* のヴェトナム語への翻訳と出版 (V.D. ルオック)

本書は、3巻本の日本の政治経済学に関連する論文集で、基本的に日本人と外国人の著者の論文の両方が選ばれている。シリーズ第3巻は、村上泰亮と Hugh T. Patrick の共編であるが、*Cultural and Social Dynamics* と題され、公文俊平と Rosovsky の著作である。

第3巻では、市場条件だけでは説明しきれない日本の経済発展の原因を、日本の歴史と社会制度に求めつつ文化の諸側面の分析、法制度の役割、政治権力、学習の体系、日本企業の特徴的な行動様式、ネットワークの型などを説明する。

6. *A History of Japan, Vol.2* のヴェトナム語への翻訳と出版 (N.D. ジェウ)

本書は、George Sansom 著の3巻本の日本史の通史の第2巻である。第1巻は、1992年度助成の対象となっている。第1巻は、日本の地理、人種、大和朝廷の成立、平城京、平安京の建設などから元寇までを扱っている。第2巻は、1334~1615年までを扱い、武家による中世封建支配、戦国時代、ほかのアジア諸国との往来、西欧人の到来から、徳川家康による統一までを扱っている。

7. *Transfer of Japanese Technology and Management to the ASEAN Countries* のヴェトナム語への翻訳と出版 (N.T. ミ)

本書は、山下彰一編著で、日本人とタイ、マレーシア、シンガポールの研究者の共同研究の成果をまとめたものである。日本のアセアン投資の実態、およびアセアンでの日系企業の技術移転、日本的経営の実態についての実証的研究の報告である。本書の基となった研究も、またトヨタ財団の研究助成を受けている。

最近ではヴェトナムも、海外からの投資が活発になっており、日系企業の進出も今後ますます盛んになるものと思われる。その意味で、上述した報告は、ヴェトナムにとって非常に興味深いことであると思われる。

8. *The Setting Sun* (『斜陽』) と *Twilight in Djakarta* のベンガル語への翻訳と出版 (F. ラッピ)

前書は、太宰治の代表作の1つであり、没落した貴族の家庭を背景に、老母、姉、弟、小説家の4人が登場し、これらの人々の人生を描いた作品である。弟の手記や姉の手紙に託して、太宰自身の随想が点綴されている。

後書は、モフタル・ルビスの小説で、『ジャカルタの黄昏』として邦訳も出ている。1960年代のインドネシアはスカルノ政権末期の混乱の時代で、ジャカルタには、貧困、汚職などが渦巻いていた。この小説は、時代にうごめくさまざまな人々の生きる様を描いている。東南アジアの小説を南アジアに翻訳・出版する初めての助成である。

9. *The Anatomy of Dependence* (『甘えの構造』)と*Japanese History Cartoon Vol.12, 14, 16*のタイ語への翻訳と出版 (チャンウィット K.)

前書は、土居健郎の『甘えの構造』で日本人の心理構造がよく分かる本として、いままでにも、他の東南アジア諸国でも翻訳されている。タイ人が日本人の行動や考え方を理解するうえで役に立つと考えられ、本書に対する関心が高い。

後書は、第1次世界大戦以降の日本の歴史を分かりやすく漫画で書いたものである。日本人の生活が日本での主要な出来事に関連する社会的背景や世界の歴史的流れのなかで描かれている。

10. *An Age in Motion: Popular Radicalism in Java, 1912-1926*と*Malays in Singapore: Culture, Economy, and Ideology*のマレーシア語への翻訳と出版 (ジョモ K.S.)

前書は、現在コーネル大学在職の白石隆の博士論文である。20世紀初期のインドネシアの政治運動を学生に焦点をあて、ナショナリズム、イスラム教、共産主義の3つのイデオロギーと組織の視点から研究した。

後書は、カナダのダルホルム大学講師のTania Liの博士論文を基にした著作である。シンガポールの国レベルの物質文明が、マレー人社会の日常生活にどのような影響を与え、また、日常の活動が国の経済や社会の状況をどのように形づけているかを研究した。

11. *Japanese Women Writers, A Road with No Ends, Naughty Koko, Suho's White Horse, Hanako the Greedy Calf*のウルドゥー語への翻訳と出版 (S. アンジャリ)

*Japanese Women Writers*は、日本の女流現代作家の短編集で、Noriko Mizuta LippitとKyoko Iriye Seldonの共訳で、1991年に出版されている。

*A Road with No Ends*は、8.と同じモフタル・ルピスの小説で、『いばらの道』として、『隣人をよく知ろう』プログラムの助成を受け邦訳が出版された。『わからんちんのココ』は長新太、『スーホの白い馬』は赤羽末吉、『くいしんぼうのはなこさん』は石井桃子・作/中谷千代子・絵の作品で、3作とも人気がある。

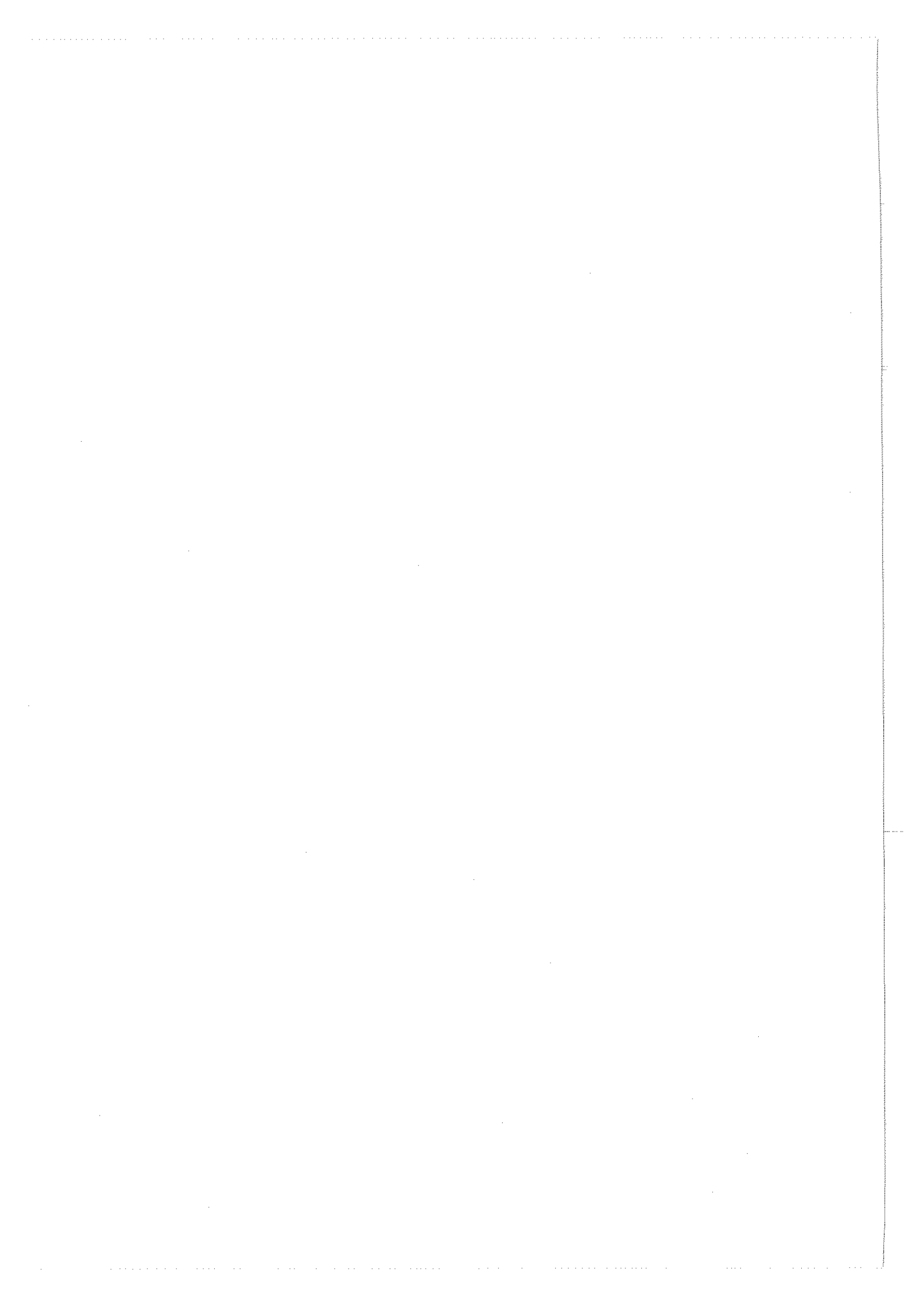
12. *Japanese Relation with Vietnam: 1951-1987*のヴェトナム語への翻訳と出版 (L.V. サン)

本書は、白石昌也の日越関係史をめぐる英文オリジナルの論文で、コーネル大学東南アジアプログラムからモノグラフとして出版されている。本書は、戦後の日本の対ヴェトナム外交の流れを概説しており、ヴェトナム側では日本の対越政策についての知識があまりないだけに、基本的な書物として適切なものと思われる。ヴェトナム語への翻訳にあたっては、著者が1987年以降の日越関係の親密化の現状についても加筆する。

13. *Urashimatara* (『浦島太郎』)のシンハラ語への翻訳と出版 (D.A. ラジャカルナ)

申請者のグループはこれまで、主として日本の文学作品をシンハラ語に翻訳、出版してきた。今年度は、趣向を変えて日本の昔話を題材とした絵本を、シンハラ語に翻訳、出版することを企画している。浦島太郎はいうまでもなく、日本の昔話で最もポピュラーな物語の1つであろう。

日本の絵本を参考に、絵本の絵はスリランカで新たに描かれる。ストーリーは著者が日本語からシンハラ語に翻訳する。



IV. その他の助成

IV-0. その他の助成の概要

IからIIIまでに紹介してきた基本的なプログラムのほか、これらに関連し、本年度も「計画助成」と「成果発表助成」を行った。

●「計画助成」について

「計画助成」は「長期的な展望にたち、財団独自の調査と企画にもとづき計画的に行う助成」である。その対象としては、次の3項目を考えている。

- ①現在および将来の財団の助成プログラムを展開するうえで重要と思われるもの。
- ②わが国の民間助成活動を活発化し、その発展を図るうえで重要と考えられるもの。
- ③その他、他財団との共同助成として、あるいは緊急を要するものとして特に民間財団の助成の意義が大きいもの。

また、助成プロジェクトの形態としては、目的に応じてさまざまなものが考えられるが、従来の経験に基づいておおむね次の項目を対象としている。

- ①小規模で継続的な研究活動
 - ②①の企画・提案に基づく長期計画型の調査・研究
 - ③一般的な短～中期型の調査・研究および研究的性格をもつ実験的事業
 - ④国際的集会の開催や、それに伴う参加者の招聘・派遣
 - ⑤報告書その他の文献の翻訳・印刷・出版
 - ⑥民間非営利団体の基礎固めに必要な事業の運営
- なお、一般公募は行わないこととしているが、申請者の資格に制約はない。財団事務局と関係者の話し合いによって必要な時期に計画書を提出してもらう。

審査については、企画会議（理事長、常務理事、財団スタッフにより毎月開催される会議）で行い、年3回の

理事会で決定している。ただし、緊急を要するものについては、企画会議の審査を経て理事長の決済で決定できるものとしている（結果を理事会に報告する）。

●「成果発表助成」について

「成果発表助成」は「財団の助成による成果を広く社会に発表すること、および成果を次のステップへ向けて展開するための契機とすることを目的とした助成」である。助成の対象となる事項としては、以下を考えている。

- ①成果報告書の印刷
 - ②助成成果の発表を主内容とした出版物の刊行
 - ③助成成果の発表あるいは展開を主目的としたシンポジウム等の集会開催
 - ④助成成果の発表あるいは展開を主目的とした海外で開催される国際的（学術研究）集会への出席
 - ⑤その他の形式によるもの
 - ⑥上記①～⑤項を実施するにあたって必要と認められる補足調査、研究総括、および編集等の仕上げ業務
- なお、プログラムの主旨からも一般公募は行わず助成対象者についても、過去においてトヨタ財団の助成を受けた者に限定している。

申請は随時受け付けており、上述の企画会議で審議、決定している。

●本年度の助成実績について

本年度は、「計画助成」については17件、4,431万円、「成果発表助成」については9件、2,749万円の助成をそれぞれ行った。「計画助成」の本年度助成対象のうち11件が継続案件であったことは、1つの特徴であろう。

なお、助成対象の詳細については次頁以下の一覧表等を参照されたい。

IV- 1. 計画助成

助成対象一覧

	テーマ 代表者 団体名	助成金額 (円)
1	第2回東アジア民間フィランソロピー促進のための国際シンポジウム ク・ヒュン・チュン 延世大学東西問題研究所	1,650,000
2	第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する（第4年度） 池端 雪浦 日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム	800,000
3	日本企業の立地に伴うケンタッキー州ジョージタウンの生活共同体の変化に関する継続的検討（第5年度） ジェームス・ホーランド ケンタッキー大学地域開発センター	2,300,000
4	杭州西湖の環境保全に関する日中共同研究のための準備交流計画 神田 博 財団法人助成財団資料センター	1,500,000
5	人権情報の交換及びネットワーキングに関するアジア地域会議 コフィー コマド 国際人権情報・資料システム	1,150,000
6	中国戦国時代の墓から出土した大型の漆棺の保存について（第2年度） 舒 之梅 中国湖北省博物館	6,000,000
7	社会科学協議会（SSRC）、全米学会協議会（ACLS）の東南アジア合同委員会への日本人研究者の参加（第6年度） D.L. フェザーマン 米国社会科学研究協議会	840,000
8	民間公益活動の社会的役割に関する研究——福祉分野を中心に——（第2年度） 瀧寺 洋一 財団法人公益法人協会	500,000
9	(財)助成財団資料センターの運営（第9年度） 神田 博 財団法人助成財団資料センター	5,000,000
10	フエ美術館収蔵品の保存及びミンマン帝墓建造物の保存・修復（第1年度） タイ・コン・クエン フエ歴史的建造物保存センター	4,200,000

	テーマ 代表者 団体名	助成金額 (円)
11	アジア社会科学研究協議会連盟第10回総会 山田 辰雄 財団法人アジア政経学会	1,000,000
12	日本の産業遺産のデータベースシステムの設計 (第3年度) 内田 星美 産業遺産データベース研究会	4,000,000
13	東南アジアと東アジアにおける自律文化：1750年から1870年 (第3年度) アンソニー・リード オーストラリア国立大学太平洋研究所教授	5,170,000
14	世界ボランティア会議——第13回 IAVE 世界会議の開催—— 脊戸 明子 世界ボランティア会議——第13回 IAVE 世界会議——	4,500,000
15	東南アジアにおける東南アジア研究促進のための計画案の策定 シャハリル・タリブ マラヤ大学東南アジア研究学科教授	1,200,000
16	日本の英領マラヤ・シンガポール占領期 (1941-1945) に関する史料調査 (第2年度) 明石 陽至 日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム	3,400,000
17	日本民法典英訳事業 (第2年度) 樋口 範雄 民法英訳研究会	1,100,000
	合 計 17 件	44,310,000

助成対象概要（計画助成）

1. 第2回東アジア民間フィランソロピー促進のための国際シンポジウム（延世大学東西問題研究所）

当シンポジウムは、①東アジアと東南アジア諸国における組織的な民間フィランソロピーの活動の実態をよりよく理解し、②同地域のフィランソロピーの実践家と研究者のコンタクトを容易にし、継続的な情報交換を促進し、将来の協力の可能性を探ることを目的としている。1993年8月ソウルで開催された。東アジアと東南アジアの財団関係者と研究者がコンタクトを密にしていることは、同地域の財団がより外向きにより国際的になるために有意義であり、将来的には同地域の財団ネットワーク形成につながる可能性もある。

2. 第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する

（日本のフィリピン占領期に関する史料調査フォーラム）

第1年度は、研究者のネットワークづくりと文献目録・口述資料作成のための準備を行った。第2年度は、日本、フィリピン、アメリカでの史料調査および口述記録を収集し、逐次和文ニュースレターを発行した。第3年度は、さらに台湾、オーストラリアでの史料の発掘を行うほか、補足的史料調査および口述記録の収集を行い、整理・編集・刊行し、内外に公表する準備をしている。

第4年度にあたる今回は、これらの刊行に必要な編集のための補足的な作業を行うための助成である。

3. 日本企業の立地に伴うケンタッキー州ジョージタウンの生活共同体の変化に関する継続的検討（ケンタッキー大学地域開発センター）

アメリカの田園地帯に日本の大企業が立地した場合の地域社会の反応を、地元の大学が継続的に調査を進めてきた。調査方法は電話による定量的なもので、十分な深層把握ができたものとはいえないが、企業進出前からのデータとあわせることで時代の変化を追跡できた。

財団では、1986年度以来4回にわたり助成を行ってきたが、1990年を最後に助成を見合わせていた。その後も自助努力で調査は継続されてきたが、今回は12年ぶりの民主党政権の誕生等、経済的・政治的・社会的状況の変化による影響を無視し得ないと判断し、1度応援する。

4. 杭州西湖の環境保全に関する日中共同研究のための準備交流計画（財団法人助成財団資料センター）

浙江省の省都杭州にある西湖は、古くからその風光の美しさで知られ、日本の文人にも親しまれてきた。しかし都市の発展と観光化の進行は、その水質環境に大きな影響を及ぼす。すでに湖水の保全のために各種の対策がとられており、現地での調査も進んでいるが、日中の協力によってさらに本格的な取組みが期待されている。今回の計画は、中国自然科学基金会と日本の民間助成財団との協力を基盤とするもので、双方の研究者が相手国を訪問し、現地視察と徹底した討論によって、今後の長期的な研究の準備を行うものである。

5. 人権情報の交換及びネットワークングに関するアジア地域会議（国際人権情報・資料システム）

国際人権情報・資料システム（HURIDOCS）は、人権NGOの国際的なネットワークの1つで、NGOによる人権情報のコンピュータ利用促進とその方法の標準化を推進することを目的とするユニークな国際組織である。今回の会議は、①アジア地域の異なる国の人権NGO相互の実状理解、②アジア地域での人権分野のコンピュータ技術研修会の企画、③人権情報の共有化の障害の把握、④アジアの人権NGOの相互協力のさまざまな可能性の検討、などを目的として、1993年9月に香港大学で、アジア諸国から人権NGOが参加して行われた。

6. 中国戦国時代の墓から出土した大型の漆棺の保存について（中国湖北省博物館）

中国武漢の湖北省博物館には、戦国時代の姿をそのままとどめて発掘された大型の漆塗り木棺群が保存されている。これらは水分を補給することにより、現状を保たれてはいるが、それも限界に近づきつつあり脱水処理と化学的な処置による保護対策が緊急に必要とされている。

その保護処置について、昨年度の助成により中型木棺については順調に脱水が進み、現在乾燥処置が始まろうとしている。今回は、この経過を受け本体の外棺について保存処置を施すというもので、中国独自の開発による方法の大型漆棺への適用が確立されることが期待される。

7. 社会科学協議会(SSRC), 全米学会協議会(ACLS)の東南アジア合同委員会への日本人研究者の参加 (米国社会科学研究協議会)

財団では東南アジア合同委員会からの要請により、すでに5回日本人研究者の参加費用を助成してきた。石井教授の本委員会への出席は高く評価された。また、1991年度の助成による第1回の会合は日本で開催され、日本の東南アジア研究者との交流が図られた。

1992年度からは東京大学東洋文化研究所の関本照夫教授が、若手の研究者として石井教授の後を引き継ぎ会合に参加した。本年度は1994年3月と10月にそれぞれニューヨークとシアトルで会合が開催される予定である。

8. 民間公益活動の社会的役割に関する研究——福祉分野を中心に (財団法人公益法人協会)

公益法人協会では、比較的成果の少ない民間公益活動に関する研究を、特定の研究テーマを定め研究チームを組織し有志財団からの助成により推進してきた。

今回の内容は福祉領域に関するもので、特に高齢化社会における民間公益部門の果たすべき役割について、協力関係が求められる行政による公共政策、企業等による営利事業との望ましい関係のありかたを模索するものである。昨年度の助成で、地方自治体関係者へのアンケートはすでに回収しており、今年度はその分析と読み込みが作業の中心となる。

9. (財)助成財団資料センターの運営

(財団法人助成財団資料センター)

助成財団資料センターは着実に活動を展開しつつある。本年度は、これまで季刊であった情報誌『助成財団』を隔月刊にし、また隔年発行の『助成団体要覧』も第4版を刊行するに際し、収録範囲の拡大に努めるなど、情報発信のいっそうの充実が図られている。

しかし低金利の情勢下で、センター自身の基金運用増はもとより、会員財団からの大幅な会費収入増も期待できない状況で、財政的には非常な困難に直面している。今後は、出版に関する収支構造の改善など安定基盤を確立するまでの間、あえて運営費の助成を継続する。

10. フェ美術館収蔵品の保存及びミンマン帝墓建造物の保存・修復 (フェ歴史的建造物保存センター)

ヴェトナム中部のフェは、阮朝によって1802年に定められた王都であり、宮城跡を中心として多くの歴史的建造物が残されている。

今回のフェ歴史的建造物保存センターの保存・修復事業への助成は、3年間を予定している。第1年度は、フェ美術館の収蔵品(陶磁器、絵画、漆器、織物など約1万点)の保存のための収蔵庫の冷蔵化と織物の保存の手当で、および展示ケースの作成、第2、第3年度は、阮朝第2代の皇帝ミンマン帝の帝墓の歴史的建造物の保存と修復(第2年度は石碑堂、第3年度は明楼閣)を行う。

11. アジア社会科学研究協議会連盟第10回総会

(財団法人アジア政経学会)

アジア社会科学研究協議会連盟(AASSREC)は、1976年に設立され、アジア・太平洋地域におけるそれぞれの国家の文化伝統を十分尊重しつつ社会科学の教育、研究、訓練および普及を促進することを目的とする国際組織である。

今回の第10回総会は、アジア諸国の強い要望により初めて日本で開催されることになった。日本側では、日本学術会議がAASSRECの構成メンバーとなっており、閣議了解を得た国家的事業と認定されている。会議開催の実務は、財団法人アジア政経学会が行う。

12. 日本の産業遺産のデータベースシステムの設計

(産業遺産データベース研究会)

産業の形成と発展にかかわる、機械、道具、施設・建築物、土木構造物やその図面・写真など産業遺産と呼ばれるものは、人類史のうえでも重要な実証資料であるにもかかわらず急速に散逸・消滅していく傾向にある。

当プロジェクトは、産業遺産に関する基礎的な情報を、今後の共有の知的資産としてデータベースの形で累積していくための基本構想を固めることをねらいとする。第3年度はパソコンを基盤とする分散型データベースのモデルを提示するとともに、将来的に幅広い参加を得て本格調査が行われるよう体制的な面での整備も目指す。

13. 東南アジアと東アジアにおける自律文化：1750年から1870年（オーストラリア国立大学太平洋研究所）

当研究は、アジアの現在のダイナミズムの源を西歐文化が入ってくる以前の社会に見いだそうという試みで、オーストラリア、東南アジア、東アジア、北アメリカ、ヨーロッパの歴史研究者による国際共同研究である。

第1年度には共同研究者が会合をもち、問題についての共通の認識を明確にし、今後の研究計画の戦略が検討された。また、各国での文献収集も進められている。第2年度には各国の文献のカタログ化、保存、翻訳、出版を行っている。

14. 世界ボランティア会議——第13回 IAVE 世界会議の開催
（世界ボランティア会議——第13回 IAVE 世界会議）

IAVE (International Association for Volunteer Efforts) は、世界各国のボランティアが一堂に会し、社会が抱えるさまざまな問題や課題の解決に向けて、相互の経験やノウハウを学び、獲得するための世界会議を2年に1度、各国で実施している。

当計画は、「新しい時代を拓くボランティア～地球家族の絆を求めて～」をテーマに、今秋、日本で開催予定の会議である。世界80か国以上から、ボランティア活動に携わる団体や推進関係者等が集まり、今後のボランティア活動のあり方などを討議することとなっている。

15. 東南アジアにおける東南アジア研究促進のための計画案の策定（マラヤ大学東南アジア研究学科）

東南アジアにおいて、自国の文化を理解するためには東南アジアを1つの地域として研究する必要性を研究者は感じ始めているが、その実行は容易ではない。

そこで当プロジェクトは、インドネシア、マレーシア、フィリピンおよびタイの大学や研究機関に所属する研究者が1名ずつ集まり、各大学等の間におけるネットワークづくりを中心とした、東南アジアにおける東南アジア研究促進のための基盤整備を行うための計画案を策定することを旨とする。当プロジェクトの成果は、今後の東南アジア研究の計画的推進に役立つことが期待される。

16. 日本の英領マラヤ・シンガポール占領期（1941-1945）に関する史料調査
（日本の英領マラヤ・シンガポール占領期フォーラム）

近年アジア各地で日本の戦争責任を問う声が一段と強まっている。日本の戦後処理のあり方を問われると同時に、当時の軍政期に関する資料を研究し、日本、アジア諸国が共通の認識を得ることが不可欠であるといえる。

当フォーラムの目的は、マレーシアとシンガポールの戦後独立史の解明にも重要な時期である同地域の日本占領期に関する史料・口述記録を、両国の研究者と収集し、調査・研究を行うことにある。第2年度は、関係者にインタビューを行うほか、イギリスに送られたとされる行方不明の軍政関係史料の発見に努める予定である。

17. 日本民法典英訳事業
（民法英訳研究会）

今日わが国と海外諸国との摩擦の多くは、特許法、独占禁止法や商法などの法制度をめぐる理解の違いに起因しており、これら私法の基本法となる民法については、外国でも十分利用可能な信頼性の高い定訳を確立することが緊要の課題となっている。

当プロジェクトは、アメリカ人法律家による民法の英訳作業を基に共同者が検討と討議を重ね、比較法的かつ歴史的な研究を踏まえて民法の英訳を行うものである。本年度は、初年度固めた基本方針に準じてさらに翻訳作業の継続を行う。

IV- 2. 成果発表助成

助成対象一覧

	母体となる 助成の番号	助成題目 代表者	助成内容	助成金額 (円)
1	85-II-228 86-III-007	東アフリカの作物害虫に対する主要作物の抵抗性に関する国際共同研究 日高 敏隆	③	3,000,000
2	87-II-075 89-III-035	朝鮮総督府調査資料に現われた文化政策の考察——文化人類学的観点から—— 崔 吉城	②	1,500,000
3	87-I-017 88-II-061 89-III-039	18-19世紀日本の小家族化と子育て意識の変容に関する心性史的研究——マビキ慣行を手がかりに—— 太田 素子	②	4,500,000
4	88-II-053 89-III-018 90-III-013	長崎残留放射能をトレーサーとして利用した長寿命有害物質と自然界との相互作用に関する調査研究——局地汚染と地球規模汚染—— 工藤 章	③	1,740,000
5	84-II-227 85-III-015 86-III-022 88-III-036	航空における INSIDENT REPORTING SYSTEM に関する総合的研究——航空交通管制業務, 航空材整備・検査をめぐって—— 宮城 雅子	②	6,600,000
6	91-II-120 91-III-030	長期ケア老人のマネージメント試行とその経済的社会的評価に関する研究 前田 信雄	③	2,980,000
7	85-II-198 87-III-024	アメリカにおける日本製造企業の現地化をめぐる諸問題の日米共同研究——自動車および電機企業における「日本的経営」の現地適応可能性—— 安保 哲夫	②	1,000,000
8	85-II-079 88-III-027	タイ語および日本語一次史料に基づく日本・タイ交渉史の基礎研究 吉川 利治	②	1,270,000
9	90-P-001 91-P-004 92-P-002 93-P-002	第二次世界大戦中のフィリピンにおける日本の占領軍政およびその前後期に関する史料および口述記録の整理・収集・利用方法を検討する 池端 雪浦	②	4,900,000
成果発表助成合計			9 件	27,490,000

(注) 表中の助成内容欄のマル数字は下記の内訳を示す。

- ①成果報告書の印刷 ②出版物の刊行 ③シンポジウム等の集会開催
④国際的学術研究会への出席 ⑤補足調査等の仕上げ業務

V. 会計報告・事業日誌

V-0. 事業実績の概要

今年度の助成事業の内訳は、次ページの表に示すとおりである。研究助成はI, II, III種計で53件1億9,026万円、市民活動助成は19件3,090万円、市民研究コンクール助成は13件700万円、国際助成は91件1億444万6,916円*、インドネシア若手研究助成は64件1,500万2,700円*、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は日本向けが13件3,418万円、アジア相互間が13件1,999万5,937円*、計画助成は17件4,431万円、成果発表助成は9件2,749万円、以上合計すると助成件数は292件、助成金総額は4億7,358万5,553円である。

その結果これまで19年間の助成金累計は件数で3,502件、金額で87億8,433万9,032円となった。なお、以上の金額は理事会決定段階のものであり、その後の変更（一部助成金の返納等）は含んでいない。

今年度の会計状況は、p.106以降の3つの表に示すとおりである。

また今年度の当財団主催事業としては、市民活動リンクアップフォーラム (p.37参照)、国際助成研究報告会 (インドネシア・ジャカルタ) (p.53参照)、インドネシア若手研究助成報告会 (インドネシア・ポゴール) (p.50参照)、環境フォーラム“都市と自然” (トヨタ自動車と共催) (p.37参照) を実施した。

*金額が円単位まで細かくなっているのは、海外向け助成金については、為替相場による現地通貨額の変動を防止するために、決定額をドルにしたためである。

助成金支出累計表

助成種別	1975～ 1988年度	1989年度	1990年度	1991年度	1992年度	1993年度	累計	
研究助成	1,002 3,415,440	62 201,000	56 200,700	59 201,200	56 199,400	53 190,260	1,288 4,408,000	
市民活動助成	70 113,600	18 27,300	19 32,400	23 35,400	19 35,000	19 30,900	168 274,600	
市民研究コンクール助成	155 266,600	1 20,000	— —	15 9,000	8 48,000	13 7,000	192 350,600	
国際助成	398 1,086,712. ⁴¹¹	72 114,110. ⁹⁵⁰	68 110,251. ²³²	66 109,987. ³²⁴	82 113,645. ⁶⁴³	91 104,446. ⁹¹⁶	777 1,639,154. ⁴⁷⁶	
インドネシア 若手研究助成	35 10,146. ²⁷⁴	24 6,490. ¹⁴⁰	31 9,754. ⁵⁷⁶	35 9,998. ⁷⁶⁰	61 15,288. ⁸⁹¹	64 15,002. ⁷⁰⁰	250 66,681. ³⁴¹	
国際学術研究集会助成	30 60,263	[当プログラムは1980年度にて終了]					30 60,263	
「隣人をよく 知ろう」 プログラム 翻訳出版促 進助成	日本向け	121 247,310	6 11,250	11 17,600	13 27,410	17 30,520	13 34,180	181 368,270
	アジア 相互間	51 235,264	10 45,341. ¹¹⁰	17 44,783. ⁵¹⁰	14 24,303. ⁶⁶⁴	16 22,009. ⁵²⁷	13 19,995. ⁹³⁷	121 391,697. ⁷⁴⁸
東南アジア諸語辞書 編纂出版助成	5 34,500	— —	— —	— —	1 5,500	— —	6 40,000	
東南アジア研究英訳 刊行助成	2 29,079. ²²⁷	1 13,963. ³⁶⁰	[当プログラムは1989年度にて終了]				3 43,042. ⁵⁶⁷	
フェロシップ助成	10 235,000	[当プログラムは1984年度にて終了]					10 235,000	
計画助成	51 177,750	11 32,800	12 30,700	16 34,620	13 32,550	17 44,310	120 352,730	
特別助成ほか	12 70,750	— —	— —	— —	— —	— —	12 70,750	
成果発表助成	268 342,879. ⁸⁸⁰	17 30,270	18 29,580	19 29,190	13 24,140	9 27,490	344 483,549. ⁸⁸⁰	
合計	2,210 6,325,294. ⁷⁹²	222 502,525. ⁵⁶⁰	232 475,769. ³¹⁰	260 481,109. ⁷⁴⁸	286 526,054. ⁰⁶¹	292 473,585. ⁵⁵³	3,502 8,784,339. ⁰³²	

(注) 1. 金額は各年度の理事会で決定したものであり、その後の変更については含んでいない。

2. 上段は件数を表す。

3. 下段は金額(千円)を表す。

4. 計画助成金のうち1988年度まではフォーラム助成、特別研究助成、民間助成活動促進のための助成、他のプログラムと関連する助成、他の財団との共同助成への参加、緊急な対応を要する助成を示す。

5. 特別助成ほかは10周年記念特別助成金、日タイ修好100周年記念特別助成金、その他の助成金を示す。

V-1. 1993(平成5)年度 会計報告

1. 収支計算書 (自 1993年4月1日～至 1994年3月31日)

	項目	金額(円)
収入	財産運用収入	761,848,040
	寄付金収入	10,000,000
	雑収入	2,906,571
	当期収入合計 (A)	774,754,611
	前期繰越収支差額	139,714,086
	収入合計 (B)	914,468,697
支出	事業費	660,206,078
	管理費	152,980,151
	固定資産取得支出	0
	特定資産支出	10,865,062
	当期支出合計 (C)	824,051,291
	当期収支差額 (A) - (C)	▲ 49,296,680
	次期繰越収支差額* (B) - (C)	90,417,406

* 次期繰越収支差額は、次年度収入予算繰入

2. 貸借対照表 (1994年3月31日現在)

借方科目	金額 (円)	貸方科目	金額 (円)
(資産の部)		(負債の部)	
現金・預金	31,934,971	未払金	295,835,016
有価証券	12,211,498,782	預り金	3,526,655
前払金	4,136,246	退職給与引当金	72,100,452
立替金	14,309,530	助成金準備金	400,000,000
固定資産	52,870,203	(正味財産の部)	
		正味財産	11,543,287,609
		(うち基本金)	(7,000,000,000)
		(うち準基本金)	(4,400,000,000)
		(うち当期正味財産減少額)	(50,162,150)
合 計	12,314,749,732	合 計	12,314,749,732

3. 財産推移表

年度末	基本財産 (円)	運用財産(円)*	正味財産計(円)
1974 (昭和49) 年度	3,000,000,000	133,057,559	133,057,559
1975 (昭和50) 年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976 (昭和51) 年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977 (昭和52) 年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978 (昭和53) 年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979 (昭和54) 年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980 (昭和55) 年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981 (昭和56) 年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982 (昭和57) 年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983 (昭和58) 年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984 (昭和59) 年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985 (昭和60) 年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445
1986 (昭和61) 年度	7,000,000,000	4,895,989,935	11,895,989,935
1987 (昭和62) 年度	7,000,000,000	4,897,677,802	11,897,677,802
1988 (昭和63) 年度	7,000,000,000	4,638,898,571	11,638,898,571
1989 (平成元) 年度	7,000,000,000	4,675,999,340	11,675,999,340
1990 (平成2) 年度	7,000,000,000	4,707,768,117	11,707,768,117
1991 (平成3) 年度	7,000,000,000	4,705,697,939	11,705,697,939
1992 (平成4) 年度	7,000,000,000	4,593,449,759	11,593,449,759
1993 (平成5) 年度	7,000,000,000	4,543,287,609	11,543,287,609

* 運用財産のなかには、その他の固定資産および次期繰越収支差額を含む。

4. 助成金変更および返納一覧

(自 1993年4月1日～至 1994年3月31日)

助成番号	助成代表者・団体名 助成金種別 事由	助成決定日	上段：決定金額 (円)		
			中段：変更および返納金 (円)		下段：最終助成額 (円)
1	84-II-171 黒柳 米司 研究助成 助成金返却	1984.10.4	3,000,000		
					801,967
					2,198,033
2	86-S-024 鳥居 泰彦 成果発表助成 解約	1987.3.17	2,000,000		
					1,880,000
					120,000
3	91-I-021 イスマイル H. 国際助成 助成金残	1991.10.3	1,091,859		
					178,698
					913,161
4	91-K-07 ムハメット Y.I. 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成 助成金残	1991.10.3	899,177		
					3,750
					895,427
5	91-P-016 中村 光男 計画助成 助成金残	1992.3.17	330,000		
					42,156
					287,844

(注)この表は、各年度の年次報告書記載の助成金額(理事会で決定した金額)を、後に助成対象者側において、計画変更、辞退等の理由で変更したものの一覧表である。

V-2. 1993(平成5)年度 事業日誌

1993年4月1日	研究助成・市民活動助成(第1期)公募開始	
4月19日	トヨタ財団レポート No.64 発行 バイラーン No.15 発行	
4月22日 ~24日	インドネシア若手研究助成報告会(インドネシア・ボゴール)	
5月31日	<i>Occasional Report</i> No.17 (英文) 発行 研究助成公募の受付締切 (757件)	
6月18日	環境フォーラム“都市と自然”(トヨタ自動車と共催)(東京)	
6月20日	市民活動助成(第1期)公募の受付締切 (122件)	
6月29日	第67回理事会 1992(平成4)年度事業報告, 収支決算の承認 インドネシア若手研究助成, 助成先決定 64件 計画助成, 助成先決定 5件 選考委員長・専門委員の選任 成果発表助成, 助成先報告 2件	
	第18回評議員会 1992(平成4)年度事業報告, 収支決算の承認 理事(増員)の選任 財団活動状況の報告	
7月30日	トヨタ財団レポート No.65 発行 バイラーン No.16 発行	
8月20日	1992(平成4)年度年次報告(和文)発行	
8月23日	「環」No.5 発行	
8月26日	監事菊池稔氏逝去	
9月21日	第68回理事会 研究助成, 助成先決定 53件 市民活動助成(第1期), 助成先決定 9件 国際助成, 助成先決定 91件 翻訳出版促進助成(日本向け), 助成先決定 13件 翻訳出版促進助成(アジア相互間), 助成先決定 13件 計画助成, 助成先決定 6件 選考委員の選任 成果発表助成, 助成先報告 1件	

10月12日	第 19 回助成金贈呈式	
10月15日	市民活動助成 (第 2 期) 公募開始	
	第 7 回市民研究コンクール公募開始	
10月25日	トヨタ財団レポート No.66 発行	
11月 1 日 ～ 2 日	国際助成研究報告会 (インドネシア・ジャカルタ)	
11月27日	市民活動リンクアップフォーラム	
11月30日	<i>Occasional Report</i> No.18 (英文) 発行	
12月15日	市民活動助成 (第 2 期) 公募の受付締切 (147 件)	
12月25日	1992 (平成 4) 年度年次報告書 (英文) 発行	
1994年 1 月15日	第 7 回市民研究コンクールの受付締切 (70 件)	
1 月25日	トヨタ財団レポート No.67 発行	
2 月 4 日	「環」No.6 発行	
3 月17日	第 69 回理事会	
	市民活動助成 (第 2 期), 助成先決定	10 件
	第 7 回市民研究コンクール予備研究助成, 助成先決定	13 件
	計画助成, 助成先決定	6 件
	1993 (平成 5) 年度収支予算変更の承認	
	1993 (平成 5) 年度収支決算見込みの説明・承認	
	1994 (平成 6) 年度事業計画, 収支予算の承認	
	選考委員長の選任	
	成果発表助成, 助成先報告	6 件

事務局

1994 年 3 月 31 日現在

常 務 理 事	山口日出夫
理 事(常 勤)	黒川千万喜
事 務 局 長	亀沢 直道
プログラム担当部	
国内助成部門	久須美雅昭 (プログラム・オフィサー)
	渡辺 元 (プログラム・オフィサー)
	田中 恭一 (プログラム・オフィサー)
国際助成部門	若山 佳子 (チーフ・プログラム・オフィサー)
	牧田 東一 (プログラム・オフィサー)
	姫本由美子 (プログラム・オフィサー)
総 務 部	亀沢 直道 (部長兼)
総務・財務部門	伊藤 勝義 (課長) 川島 治彦
	成田 真澄 (主任) 木村 清子
	福山 純子
助成業務部門	土方かほる 有泉 志乃
	村井 美奈 坂本 香

1993 (平成 5) 年度年次報告

発行者	財団法人 トヨタ財団
	〒 163-04 東京都新宿区西新宿 2-1-1
	新宿三井ビル 37 階・私書箱 236
	TEL. (03) 3344-1701～3
	FAX. (03) 3342-6911
発行日	1994 年 7 月 1 日
制 作	童夢出版株式会社
印 刷	真友工芸株式会社